



# 月下魔術師

# 1. 欧州より

その新聞記事を読んだのは秋の最高点、高く澄んだ夜空に見事な月が輝く夜のことだった。

「え」  
小さな困み記事だが、報じられた名前の意外さにぎょっとして、思わず新聞を引っ掴んで食堂を飛び出す。  
「周一郎！」  
慌ただしく階段を駆け上り、仕事が詰まっているからと自室で夕食を摂った周一郎の部屋にノックもなしに飛び込んだ。

「……何です」  
一瞬だけ動きを止めた周一郎はちらりと視線を上げ、すぐに書類を捲り出す。

「これ、この記事読んだか?!」  
周一郎はたいてい朝一番に数種類の新聞に目を通してている。ましてやこんな記事を見逃すはずもないのだが、知ってたなら話してくれてもいいだろうと苛立った。

「ええ」  
俺が振り回した新聞に何が載っていたのか先刻お見通しらしく、相手は淡々と書類に目を通し続ける。

「なら！」

「なら？」

「なら……えーと……なら……」

周一郎のそっけなさに見る見る勢い込んだ気持ちが萎えた。

「奈良の大仏は大きいかなーと……」

「……彼が収監されていたのは奈良ではありませんが」

「わーってるよ、そんなこと」

「……座ったらどうです」

「あ、ああ」

ドアを閉め、ソファにどさりと腰を落とし、改めて新聞を広げる。

そこには綾野啓一の獄中死が伝えられていた。

うまく尻尾を切って逃げられるはずだった悪だくみ、けれど周一郎の打つ手の方がうんと早くて容赦がなくて、京都の事件の後、綾野は見る見る余力をはぎ取られ、保釈金を積むことさえできなくなった。そのまま、なおも余罪追及で収監されて数日、獄中で自殺しているのが見つかったらしい。

「あいつが死ぬとはねえ……」

贅沢な暮らしをしてたから、一転してしまった環境に耐えられなかったんだろうか。

「…そうですね」

周一郎の声は静かだ。恨みも憎しみも、ましてや悲しみの陰りさえ響かない、けれど。

なら。

ならお前も安心しただろう、とか。ならお前もこの先ちょっとは楽だよな、とか。そういうふうに言いかけた俺のことばがどういう意味だか、周一郎はきちんとわかっている。

それが人の死を喜ぶことだとわかっているから問い直した、そういうふうに思える。

新聞を畳み直して視線を上げると、周一郎は書類を繰る手を止めて何か考え込んでいる。感情の浮かばない透明な黒い瞳が、部屋の淡い光を跳ねて、まるで丁寧に磨かれたガラス細工のようだ。

「周一郎？」

呼びかけると、夢から醒めたように周一郎は瞬いた。

「ああ……」

ふいに思い出したように立ち上がり、一通の封筒を手に机を離れてやってくる。

「これがあなたに届いています」

「へ？」

渡された封筒をまじまじと眺める。

「エア・メール？」

「フランスから」

「ふらんす？」

って、あの外国のフランスだよなあ？

尋ねる俺に呆れたように溜め息をついた周一郎は、促すように俺を見た。

差出人の名前はない。微かに甘い香りは香水だろうか。封を切ると、薄い緑の半透明のレター・ペーパーが現れる。開いた中身に並ぶのは紺色の女性らしい筆跡だ。それを横目で見た周一郎が机に戻ろうとするのを、中身を読んで呼び止めた。

「おい、お前宛でもあるみたいだぜ？」

「……」

肩越しに周一郎が振り返る。

「一緒に居ろって書いてある」

だからこっち座れよ。

促すと、一瞬ためらったが、仕方ないといった顔になって俺の隣に腰を降ろした。そのまま少し身を乗り出して手紙を覗き込む仕草はこれまでのこいつならしなかった柔らかさ、よしよしい傾向だとにやにやしながら文面に目を走らせる。

『周一郎も側に居ること。』

お久しぶり、志郎。私は今パリにいます。事情があって、急ぎこちらに来ただけけど、あなたが私がいらないのにいじけると困るし、気になることもあるので手紙を書きました。いい加減に携帯ぐらい持ってよね』

「……ほっとけ」

携帯代が払えるぐらいなら、バイト一つはとっくに止められるだろうが。

ぼやきながら続きを読む。

『実はこの前の事件、日本では始末がついていますが、こちらではまだいろいろ残っていることがあって、まあその残務処理というところね。一ヶ月ほどかかると思います。

大学には休学届けを出してあるので心配しないで。

ただこちらの連絡先ははっきりできません。「佐野由宇子」の名前が注目されるのも困るので、妙なことはしないでね。あなたはおせっかいなんだから。

また連絡できるようなら連絡します、それでは。

由宇子

P.S. そうそう、せっかく芸術の都に居るんだから、詩を一つ送るわ。

愛してるのに  
優しさしか見せないのね  
残っていた悲しみはどこに消したの

血に濡れた腕には愛なんて  
夢の中のこと  
憂いを包んで肩竦めてみせる  
愛しいあなた

命掛けて愛せなんて言わないわ  
綺麗なだけの約束もいらぬ  
天上の甘さがほしいの  
今はただ  
瑠璃の瞳で見つめ返して』

「なんだあ…？」

これって恋愛の詩だよな？

お由宇が俺に恋愛の詩？

「……ありえねえ…」

俺は首を傾げた。

「外国で悪いもんにでもあたったとか」

「…ちょっと見せて頂けますか？」

一体お由宇に何があったんだと引き攣っている俺に、珍しく周一郎がねだった。

「ああ、なんか面白いのか？ これ有名な詩なのか？」

「いえ、そういうわけでは…」

手紙を渡すと周一郎は食い入るように文面を見つめている。その表情が見る見る険しく強張っていくような気がして、俺はなお首を傾げた。

「周一郎？」

ひょっとして。

「……」

ひょっとして、周一郎はお由宇のことが好きだったとか？

そう言えば、この二人はどうもお互いに知っている感じだったんだよな、と思い出した。

お由宇は心理学系大学生、周一郎は家からほとんど出たことのない引きこもり実業家、どこに接点があるかというところ……合コンぐらいか？

「うーむ」

周一郎が合コン？ お由宇が合コン？

「ありえねえ…」

それこそ、何か特殊な研究とかセミナーの席で顔を合わせたという方がまだあり得るような気がするぞ、うん。そう、それならあり得る、たとえば、軍需産業の会合とかで、周一郎はスポンサー側、お由宇は才能を見込まれたのヘッドハンティングとか。

「……ありえる……」

わはは、はまりすぎて笑えねえ。

「滝さん」

「わ、はいはい」

「何を百面相してるんですか」

「いやあの、そのつまり男と女の深い関係についてだな」

「……ふーん」

冷やかな相手の視線にはとどろく。

「え？ あ、いや違う、俺は別にお由宇とそういう関係じゃ」

あれ？ なんで俺は弁解してるんだ？

「別に構いませんよ、僕は」

あなたが誰とどういう関係であろうが。

「相手が気の毒だなと思うだけです」

あなたのドジに付き合い続けていく根気には敬服しますが。

「おい」

冷たく言い捨てて、しかも手紙を持ったまま立ち上がる相手を見上げる。

「なんか誤解してるだろ」

「誤解していません」

「いや、誤解してるぞ絶対」

「何を誤解すればいいんですか」

あなたがドジだってことですか、それとも。

「あなたが佐野さんに対してよからぬ妄想でも掻き立てると」

「わーっ」

お前、一体何を言い出すんだ、そう続けて立ち上がったとたん、ノックが響いた。

「はい」

「坊っちゃん、コーヒーをお持ちいたしましたし……おや、滝様もここにいらっしゃいましたか」

高野がにこやかに微笑みながら、銀色の盆を手に入ってくる。カップが二つ用意されているところを見ると、俺の部屋にも運んでくれるつもりだったんだろう、そのまま、ここで召し上がられますね、とテーブルに並べてくれた。

「さすが朝倉家の執事だよな、タイミングばっちり」

「よかったですね」

「陰があるな……おい、飲まないのか？」

「僕はもう少し仕事を」

「冷めるぞ」

「……わかりました」

周一郎は渋々再び俺の隣に腰を降ろし、カップを手にした。それでも手紙のことが気になるらしく、テーブルに広げてじっと眺めながらコーヒーを啜っている。

「そんなに面白い詩なのか？」

思わず尋ねると、周一郎はゆっくりと目を細めて俺を振り向いた。

真っ黒な瞳、表情が消えていて感情の動き一つない、完璧に制御された視線、等身大のロボットに見つめられるとこんな感じかもしれない。

「ええ、とっつても面白いです」

ことばと裏腹に声も感情の一切を含んでいない。

そのままふいと、また手紙に視線を戻す、その集中具合が並じゃない。

何となく声をかけられないまま、ひたすらコーヒーを飲み、それが終わっても立ち上がってさよならというのもし落ち着かなくて、俺は新聞を手にした。

綾野啓一。

周一郎を妹の仇と狙い、朝倉家を手中におさめようと、あれこれ仕組んだ男。

思い出す爬虫類のような瞳に奇妙な感覚が広がる。

あいつが自殺？

地球が減びても自分だけは生き残る手立てを仕組みそうなやつだと思ったんだが、違ったのか。ひょっとして、周一郎もお由宇のことではなくて、そのことを考えているんだろうか。

パリはあいつの本拠地だった。先日の事件に絡んでいるとお由宇も伝えてきている。こちらでは終わったそれが、あちらではまだだとも。

けれど、全ての黒幕であった綾野が死んでしまった以上、もう何をどうしようもないんじゃないか。

周一郎の思考も一区切りついたらしく、カップを置いて溜め息を付きながらソファにもたれる気配がした。横目で盗み見ると目を閉じて少し眉を寄せている。

今日は一日中難しい案件があったようで、部屋からほとんど出て来ていないと高野も言っていたから、疲れてしまったのかも知れない。端正な顔が微かに青白くなっていて、伏せた臉に陰が差している。

「大変だよな…」

思わずつぶやいてはあったが、周一郎が気づかなかったようだ。くったりと背中をソファに預けている姿が妙にか細く見える。

無理もない。

たった十八、九で巨大な企業を背負って、そりゃ、小さい頃から慣れている、才能がある、運命だ、そう言うのは簡単だろうけど、そのせいでこいつが受け取れなかったもの、満たされなかったものはきっと俺が思っているよりもうんと多いに違いない。

かといって、どこをどう楽にしてやれると言うわけでもないんだが。

今でもこうやって宿敵の死をあっさり喜べない大人びた感覚に、俺の方が面倒みてもらってる状態だ。

それでもいつか。

周一郎が心の底からほっとできたり笑えたりするようになればいい。違う人間になるとか、仮面をつけてとかじゃなくて、周一郎自身として、真実楽しいとか嬉しいとか思えればいい。

そのために何か少しでもしてやれるといい。

「うん」

まあとりあえず俺の仕事はこれ以上こいつに迷惑をかけないことだよな、そう頷いて、残ったコーヒーに手を伸ばそうとした矢先、とん、と肩に何か当たった。

「……お」

振り向くと、ソファの背にもたれていたはずの周一郎の体が滑ってきて、俺の肩に頭を寄せている。すうすうと軽い寝息が響いていて、どうやら一休みしたつもりが眠り込んでしまったらしい。

「おーお、無邪気なツラして」

微かに開いた口元、緩やかに溶けた表情は幼い。俺の肩に頭を預けて、眠りはいよいよ深くなっているようで、俺が動いても全く起きない。

「……頼ってくるのは、おかしい時か、眠ってる時か」

苦笑いして、再びコーヒーに手を伸ばそうとし。

「……うーむ」

届かない。

「う、うーむ…」

高野のコーヒーはうまいんだが。

「う…う…うーむ……」

あまり身を乗り出すと背中とソファの間に周一郎の体が落ち込んでしまうし、かといって支えて動けばすぐに目を覚ますだろうし、このままの位置で、と頑張ってみたが肩の骨を外しそうなほど伸ばしても後数センチが届かない。

「も…すこし…」

「……ん…」

「わ」  
もぞもぞ、と周一郎が身動きして、ひやりと思わず動きを止める。  
いやもちろん、起こしてもいいんだ、別に構わないんだ、けどな。  
せっかくこんなに無防備に眠ってるのを、起こしてやるのは可哀想じゃないか、なあ？  
誰ともわからぬ相手に同意を求め、そうだよな、そらそうだ、と溜め息をついた。  
コーヒーはまたいつか飲める。こいつは次にはこんな風に眠らないかもしれない、眠れないかもしれない。  
「だよな」  
諦めて腰を据え、少し体勢を整えて周一郎がまったく体を預けやすくしたあたりで、密やかなノックが響いた

。 どうぞ、と小さな声で応えると、聞き逃すこともなく高野が入ってきて、俺と視線を合わせたとたん呆気に取られた顔で立ち竦む。

「お加減でも…？」

「いや、寝てるだけ」

「眠っておられる、んですか…？」

「疲れたんだら……ああ、そうだ」

どうせなら毛布持って来てくれ。

「冷えてくるしさ、もう少しのんびり寝かせておいてやりたいし」

「はい、すぐにお持ちしますが……そうですか……お休みに……」

高野は首を振りながらコーヒーを片付けながら続けた。

「坊っちゃんまが他人の側でお休みになるのは……初めてでございます」

「はい？」

いや、他人の側でって。

そもそも周一郎はここへ引き取られてきたんだから、周囲には他人しかいなかったらうに。

「大悟ってのが父親がわりだったんだら？」

それに清も居たわけだし。

俺がよっぽど妙な顔をしていたんだらう、高野は複雑な顔になった。

「旦那さまは坊っちゃんまにとってお仕事のお相手でしたし……お仕事もおありでしたので、休まれるのはいつも皆が寝静まってから……私どもが最後の見回りをする前後だったと記憶しております」

「最後って……十時とか……」

「私は十二時から一時、でございますね」

「……いや、待て、そのころってこいつ…」

小学生とかそういう年齢だらう？

「それまでずっと仕事？」

「眠くならないから、とおっしゃって」

「…そんなわきゃねえだらう」

精神は大人でも、体も心も子どもだったらう。一日大人と対等に話して仕事して、きつとくたくたに疲れ果てていたはずで。なのに眠れなかったのは。

「……安心、できなかったのか」

「……おそらくは」

「……馬鹿が…」

こいつも、周囲の大人も、みんな馬鹿だ。

誰も気づいてやらなかったのか、眠くならないはずがないと。誰も気にしてやらなかったのか、疲れ切っているのではないかと。

だからこそ、張りつめた心は夜が来ても緩まない、いや夜になり人が動いている間は眠れない、何かを失うのではないかと、何かに脅かされるのではないかと不安で。

その不安や恐怖を、誰もこいつから受け取ってやらなかったのか。

出て行った高野が毛布を持って戻ってきて、俺達の上にそっとかけてくれた。周一郎はそれでも起きない。俺がそっと体を倒して、一緒に軽く支えつつソファにもたれても、周一郎は目覚めない。

「…本当によくお休みですね」

高野が嬉しそうにつぶやいた。

「だな」

柔らかな寝息、甘い温もり、俺もじんわり眠くなる。

こんな周一郎を一体何人知っているやつがいるだらう。

「……おやすみなさいませ」

よろしく願いいたします。

高野の口に出さない懇願を聞いて、俺は頷いた。部屋の明かりを消して、高野がゆっくりドアを閉める。

窓にかかったカーテンの隙間から澄み切った濃紺の空が見えた。

そこに浮かぶ煌々と白い月。

差し込む光は清浄だが冷たくて固い。まるでこいつのようだ。

けどな、周一郎。

俺は目を閉じ、見る見る闇の中へ落ちていきながらつぶやいた。

月も真昼には眠っているんだ。

温かな大地の底で。

## 2.孤高一人(1)

次の日、俺は上機嫌だった。  
「じゃ、ちょっと本屋まで行ってくるな」  
「はい、いってらっしゃいませ。お夕食までにはお戻り願います」  
「わかってるって」  
高野の見送りを受けて、足取り軽く歩き出す俺の頭に浮かんでくるのは、今朝、俺にもたれて前後不覚に眠っていたと気づいた時の周一郎の顔。

俺が目を覚ましたのは、珍しいことに周一郎より先で、差し込んできた朝日の眩さと体中の痛みのせいだった。

周一郎を起こすまいとしたのが一晩中の緊張の原因、体が他人の物のように強張ってしまっている。そっと首を捻り、続いてカチカチになった足を少し動かしてみる。

「…ふ…」  
漏れた声にぎくりとして周一郎を見やると、相変わらず無邪気な顔で眠っている。  
良からぬことを思いついてにやりとした。

「周一郎」  
声をかけ、軽く揺さぶる。

「起きろよ、朝だぞ」

「…ん……」

もぞりと動いて逆に朝日を避けるように俺の懐へ潜りかけた周一郎は、次の瞬間、文字通り跳ね起きた。

「っ、滝っ、さん！」

「おお」

「どうしてここにっ！」

「どうしてはないだろ」

に、と笑ってやる。

「人の肩を枕にしてたくせに」

「僕、が？」

弱みを見せた、といつもの照れたような怒ったような表情になった周一郎は、みるみる赤くなった。

「その様子じゃ、よく眠れたみたいだな」

澄まして言ってやるとくるりと背を向け、急ぎ足に机に近づき書類を片付け始めながら、むっつりした声を投げた。

「どうして起こしてくれなかったんです。仕事も溜まってたし、片付けなくてはならないこともあったし。第一、滝さんも困ったでしょう」

「べつに」

俺は肩を竦めた。

「俺はかまわん。お前もかなり疲れてたみたいだしな」

よいしょ、こらしよ、と掛け声をかけながら、ソファにガムみたいにくっついた体を引きはがす。

「それに」

「？」

無言で振り返った周一郎はきっちりサングラスを掛けている。部屋に差し込む陽光を遮り、ついでに周一郎の表情も隠してしまったそれに、皮肉をこめて言い放つ。

「こんな時ぐらいしか、俺を頼ってくれないしな」

「……あなたは先天的なお人好しなんですね」

言い捨てて、周一郎はすたすたと部屋を横切り、ドアへ向かった。

「それとも時間を持って余した暇人ですか」

見事なポーカークフェイス、声にはためらいも思いやりもない。

ちえっ。

胸の中で舌打ちしつつ、うん、と両手を上げて伸びをした。

はいはい、悪うございましたよ、暇人で。なら何か？ あのままソファの真ん中でこてんとか一人で眠りたかったというのか？ それとも俺とソファに挟まれて圧死したかったとでも？

そんなこと言うなら次は絶対、眠るな起きろ、ここで寝ると凍死するぞ、と大声で叫びながら起こしてやる、と密かな復讐計画を練りながら、微妙に落ち込む。

(結局こいつが俺に心を許すってことはないんだろうなあ)

大きく溜め息をついて手を下ろし、ドアの側で立ったままの周一郎が出て行こうとしないのに気づいた。

「？」

「……すみませんでした」

きょとんとした俺の耳に届いたのは優しい謝罪。

「おい……って、もういなくなってるやがる」

だがそれは幻聴かと思うほど一瞬で、次の瞬間には開いたドアの隙間から猫のようにすり抜けて姿を消してしまっていた、のだが。

「ふ、ふんふん、ふーん」

俺は鼻歌まじりで角を曲がった。いずれにせよ、まあ少しは軟化してきたんだ、いい傾向だ、そのうち膝枕とかでも寝る……さすがにそれはないか。

「まあぼちぼちやるさ、なあ！」

「きゃあっ」

「どあっ！」

勢いをつけて大きく踏み出したとたん、いきなり飛び込んできたものと嫌というほどぶつかってひっくり返った。追い打ちをかけるように、じゃぶっと頭から降ってきたのは。

「コーヒーっ？」

え、何だ、最近の天気はコーヒーまで降るのか、と思わず空を見上げた額に、続いてもう一回。

ごん。

「、てえっ?!……げ！」

ぽふんと間抜けな音をたてて落ちて来たコーヒーカップが、俺の腹に残った中身を撒く。

「ご、ごめんなさい！」

高くて可愛いうろたえた声が響いて、目の前にしゃがみ込んだのは、メイド喫茶店員風のミニドレスに白いフリルエプロン、推定年齢20歳前後の女性、が膝をついて真正面に迫った。

「どうしよう、こんなに汚しちゃって」

眉をしかめた顔は零れ落ちそうな瞳とふっくらした唇のなかなかの美人、いや、待て、距離が近い、かなり近いんだが。

「だ、大丈夫」

俺ならよくこけるし、コーヒーをかぶるのも初めてじゃないし、第一怪我も何もしてないし。

「だからその、だいじょ」

「大丈夫じゃないわ！」

笑いながら言いかけたら、逆に断言されてぐい、と手首を掴まれた。

「全然大丈夫じゃないの！」

「は？」

「はい立って! 早く! 着替えて乾かすの！」

「え、あ」

いや着替えて乾かす前にできれば洗う方がいいんじゃないか、そうぼんやり考えた俺を急ぎ立てて、娘は俺を引っ張り起こすと、手にしていた銀色のお盆を片手にぐいぐい俺を引っ張っていく。

「あの、君、出前か何かなら、あのカップ放置はまずいんじゃ」

「いいのよ！」

うわ。

がう、と一瞬大型肉食獣に噛みつかれたような奇妙な感覚が襲った。

なぜかわからないが、急所を銜えられてしまって逃げられない、そういう気がして、何となく相手に握られた手首を見る。

「あの、ちょっと、待って」

「待たないの、待てないでしょ！」

「う……うん……？」

うなずいて、大人しく彼女の後から歩き出しながら、俺はそのまますると相手のアパートだという部屋に連れ込まれてしまった。

「ヘーックシヨイ！」

「ごめんなさいね、ほんと、あたし慌ててたものだから」

「んあ……いや、俺のほうこそ、どうも…」

もごもご言いながら、与えられたバスタオルを腰に固く巻き付けて、背中からバスタオルも搔き合わせる。

秋とはいえ、夜になるとずいぶん冷えてくる。彼女は洗濯機の回りで忙しそうにしている、それは俺のジーパンとポロシャツを洗ってくれているからなのだが、それでも。

「こんな簡単に男を入れていいのか…？」

お由宇といい、この娘といい、それほど俺は安全パイ人畜無害に見えるのか？ 消防庁から表彰されるほど安全基準を満たしてしまってるのか？ ………それは男としてはどうなんだろう？

「うーむ…」

「もう少しだから、これ、飲んでて」

唸っていると、目の前のテーブルに温かそうなコーヒーが置かれた。

「どうも…でも、あの、工作中じゃ」

「マスターはあたしに惚れてるから。文句なんか言わないの、ゆっくりしてて」

「……はあ」

そういうことなら一層他の男が自宅に居るってのはまずいんじゃないのか？

「つくしよ」

再びくしゃみが出て、続いて何度も出そうになったのに、慌ててカップを掴んだ。

「いただきます」

じんわりと掌が伝わる熱にほっとした。

「あったかい…な」

ごくりと一口飲み、すぐにもう一口飲む。

何か不思議な味だった。

今まで飲んだことがない、奇妙な甘みとも苦みともつかない味。

それともこれは凄く高いコーヒーで、俺が知らないような種類だからだろうか？ いやそれでも朝倉家のコーヒーだって、確かとんでもない値段だったはずだし、このコーヒーの妙な感じはそれとまた違う気もする。

「??」

匂いを嗅いでみようとして、そのままごくりと飲んでしまい、またあれ、と首を傾げた。

今俺は飲もうとしなかったよな？ 飲もうと思ってなかったよな？

なのになぜ、飲んじまうんだ？ ほら、今だって。

ごくん。ごくごくごく。

残ったコーヒーを一気に飲み干し、何となく娘を振り返った。洗濯を終わって、今は乾燥機をかけてくれていたらしい娘が振り返ってにっこり笑い、その笑顔が満月のようだと思い、次の瞬間、また、がぶりとどこかの急所を噛みつかれたような気がして皮膚が粟立った。

「あれ…？」

「コーヒー」

娘が笑った。  
「もう一杯、いかが？」  
「もう一杯、下さい」  
俺は間髪入れずに応えて空のカップを差し出す自分の腕を見つめた。  
なんだ？ 今こいつ、勝手に動かなかったか？  
瞬きして、カップと娘を交互に見る。相手は微笑みながら、カップにコーヒーをポットから注ぐ。  
手を放していないと、もし零れたら火傷するかもしれないし、危ないだろうに、娘は手を放せと言わないし、俺も放さない。  
こ、ぼ、ぼ、ぼ、ぼぼ。  
湯気を立てて注がれるコーヒーが、一気に溢れて手もろとも膝や体を焼きそうで、目が離せない、手が放せない。  
こぶこぶこぶこ…ぶ。  
「はいどうぞ」  
促されるままに、俺はコーヒを口元に運んだ。  
いい香り、奇妙な味、舌を焼きそうな熱さ、なのに呑み込むのが止められない。口の中、確実に薄皮がめくれたに違いない。なのに。  
「おいしいでしょう？」  
娘が笑う。  
「おいしいです」  
俺は笑い返す。口の中がひりひりしている。  
「体が温まるわよね？」  
「体が温まります」  
何だ？ 何だ？ 何だ？  
勝手に受け答えする口や、勝手にコーヒーを飲む手や、温かくなってくる体に勝手に解れていってしまう気持ちに妙な違和感が広がって不安になってくる。  
おかしい。  
何か、おかしい。  
けど、何が？ なぜ？ どこが？ どうして？  
「お名前は？」  
娘が静かに尋ねた。  
いつの間にか、テーブルの前に座って、俺を覗き込みながら目を細めている。満月のように思った微笑が、今は研がれて鋭く曲がった三日月のように思える。  
「滝、です……滝、志郎」  
「どこに住んでいるの？」  
「周一郎のところ……朝倉、周一郎ってやつ、家庭教師をしています」  
「そう…」  
その朝倉周一郎って、あたしの探してる人かしら？ サングラスをかけた怖い坊やなんだけど…？  
「ああ……きっとそうですね」  
俺はへらりと笑った。彼女に応えられるのが嬉しくて、もっとたくさん聞いてほしいと思った。  
「でも怖くないですよ……あいつは…」  
凄くいいやつなんです。  
「そう……じゃあもっと教えてね…？」  
甘い声が響いて、視界が柔らかな吐息を紡ぐ唇と細めた瞳だけに覆われた。

淡い夢の中のような問いかけは続く。  
周一郎が怖くないなんて、滝さんって強いよね……強い？……怖くないんでしょ……ええ、ありません…だってあいつにはひどく脆いところがある……知ってるわ、あなたでしょ……俺が？……そうよ、あなたが周一郎のアキレス腱……まさか…あいつは俺なんか頼ったりしませんよ……そうかしら……。  
くすくす、と笑い声が響いた。誰が娘と話をしてるんだろう。  
俺なのか？ 俺らしい。  
けど、何だって、俺はこんなことを話している？  
そうかしら……そうですよ……周一郎に確かめたの？……何を……あなたにいて欲しいのか、いて欲しくないのか……俺から聞くんですか、相手にしてもらえないですよ、俺は……あいつのパートナーにもなれやしない……いじっぱりね……誰が？  
いじっぱりなのは周一郎なんだ、だけど……俺はそのいじっぱりな周一郎が好きなんです……そう……かわいそうにね……。  
かわいそうにね。  
誰が？ 周一郎が？  
なぜ？

「はい！」  
娘の声がふいにはっきりと耳に届いた。  
我に返る俺に、娘は微笑しながら服を渡してくれた。上だけだから、とちょっと娘に背中を向けて服を着る……と。そこで少し手を止めた。  
ジーパンも汚れてなかったか？ 俺はさっき、バスタオルを上下にまきつけていなかったか？  
いつ、俺はジーパンを履いたんだろう？  
思わずまじまじと下半身を眺める。  
確かに汚れていない。数日前につけた染みもなくなっているような気がするから、きっと洗濯してもらったのだろう、けど、いつ？  
かわいそうにね。  
「……」



娘の眩きが妙に鮮やかに頭の隅にこびりついているのに、それがどういう経過で、どういう話でそうなったのか、どうにも思い出せなくて不安になった。

「あの」

「はい？」

「今の話、何だったんですか」

「？」

娘はきょとんとした。

瞬きをし不審そうに眉を寄せる。何を言っているのか、意味がわからないという顔だ。

「えーと」

「はい」

「何か話してませんでしたっけ」

「……いいえ？」

俺の歯切れの悪い問いかけに、相手はますます奇妙な顔になって、俺をじろじろと眺めた。

「いや、ほら、俺、今コーヒーを飲んで…」

言いかけて気づく。

テーブルの上にはコーヒーどころか、茶も出ていない。

夢？

今のやりとりは夢、だったのか？

「あれ？」

いつ俺は眠り出したんだ？ 第一どうして眠り出したんだ？

「あれ？」

「あら、ごめんなさい」

催促されたと感じたのか、娘が慌てて立ち上がった。

「何かいれましょうか」

「あ、いや、俺、そんなつもりじゃ」

ふと目をやると、窓の外はすっかり暗くなっている。

「俺、もう帰ります、すみません、お世話になって」

キッチンに向かいかけた娘の背中に声をかけて立ち上がった。

「いいえ、こちらこそ迷惑おかけして」

戸口まで見送ってくれた娘が、ふいと俺の肩越しに空を見上げる。

「あら……きれいなクレッセント」

「え？」

いくら無料な俺でも、クレッセントが『爪跡のような三日月』のことを示すことぐらい知っている。けれど、今は『満月』に近いはず、周一郎が高野とそんなやりとりをしていた。

だが、娘の指差す先には、細い、切り裂くようなクレッセント・ムーンが夜を削っていて呆気にとられた。

「ほんとだ…」

「ね？」

娘の腕がするりと伸びて、俺の腕を捉えた。

「きれいな月でしょう。あたしの声、よく聞こえる？」

気持ちのいい響き、けれど人を圧するような声音、またあの夢の中のような淡い光に周囲が閉ざされていくような感じがする。危険を感じた俺の心の何かが、体から抜け出して、遠くの方から何が起こっているのか見定めようとする。

「……のよ」

娘が呆然と立っている俺の耳に囁いた。

虚ろに俺は頷く。ゆっくりと、けれど、その意志を貫き通すようにはっきりと。

「周一郎を…」

娘は再び囁いた。

もう一人の俺が内容にぞっと体を震わせ、やめろ、と叫ぶ、だがその声は、今の俺にはあまりにも遠く微かだ。

娘が満足げに頷いて、パンッ、と唐突に手を叩いた。

「っ！」

引き戻され、我に返る。その瞬間に、今自分がどこに居たのか、何をしていたのかわからなくなった。

覚えていることばはただ一つ。

「爪跡月（クレッセント）？」

思わず尋ね直す。

「あれ、三日月のことですよ？」

「え、そうなの？」

娘は瞬きした。

「あたし、おさまの別名がクレッセントだと思ってたわ」

娘がクレッセント、と口にすると、心の中に淡い波が立った。銀色の靄がかかった半透明な視界、呑み込まれそうになって危うく首を振る。

「違いますよ、三日月のことだけです」

「そうなの！」

娘はきらきらと瞳を輝かせて笑った。

「これで、少し賢くなったわ！」

「あはは」

笑い返す、慣れた友人同士のように。

けれど。

あれ？

何かが引っ掛かる、何か妙な不安感が。

自分が取り返しのつかない何かを約束してしまったような、不快感。

「あ、の」

「じゃあ、あたしも仕事に戻りますね。本当にごめんなさい」

言いかけた俺を遮るように、娘はぺこりと頭を下げた。

慌てて俺も頭を下げ、急かされるように家を出る。

(あの娘の名前、聞かなかった)

歩き出した夜道でふいに思った。

「……それが？」

何かあんのか？

思わず頭上を見上げた。

鮮やかに光を放つ、ほぼ満月に近い白い月。

「…ま…いいか」

遅くなったのを、周一郎が心配してるかもしれない。

俺は足を速めた、自分が重ねたミス大きさにも気づかずに。

## 2.孤高一人(2)

嫌な夢だった。

眠る前に見た満月の丸く白い面輪が、夢の中で膨らんだりしぼんだりする。

夏祭りの風船よろしく、するすると月から下がる銀糸を持ったのはあの娘で、にっこり笑いながら『クレセント』と口を動かした。クレセント……と、俺は夢の中で繰り返しながら、自分が二つに分裂していくのを感じた。

一人の俺がベッドから起き上がる。コートを羽織り、どこかへ出かける。どこなんだと別の俺が考えている間に、最初の『俺』は目的地に達したらしい。もやもやと白く淡い光が『俺』の回りを取り囲んでいて、視界はほとんどきかない。

夢うつつで『俺』はある所まで来ると立ち止まり、霧の中に両手を差し入れた。

何をする気だ、と俺が問う。『俺』は応えない。

しばらくもやの中で探っていて、目当ての物に辿り着いたらしい。『俺』はその円柱状の生暖かいものをぐっと両手で掴んだ。じわじわと力を入れていく。

『俺』の手の中のものがもがき始める。低く遠いうめき声……がともやの中からいきなり手が飛び出し、俺の手にすがってぎよっとする。

(人間じゃないか！)

なんてことだ、『俺』は人の首を絞めているのか。

狼狽して俺は『俺』を相手から引き離し、何とか止めさせようとした。

だが、『俺』は強かった。

あの娘の声のように、逆らい難い力で掴んだ首を絞め続ける。

(んなろくそ！)

主人の命令に主人が逆らいやがって！

俺は激怒して、『俺』を殴りつけ、蹴りつけた。だが『俺』は手を放さない。冷淡な殺人者になり切ったように首を絞め続ける。

その感触が俺の手にも伝わってくる。被害者の腕から力が抜けてくる。するりとその手が『俺』の体を掠め、ぱたりと落ちる。

(放せっ！)

俺は渾身の力で『俺』を引っ張った。『俺』はようやく一、二歩後ずさりし、ゆっくりと歩き出す。途中でびっ、とコートが何かに引っ掛かる衝撃があったが、『俺』は構わず先に進んだ。

再び気づくと俺は自室に戻っていた。

俺も『俺』もベッドにのそのそ潜り込み……目覚ましの音が鳴り響く。

「……うえ……」

起き上がってがんがんする頭に唸って抱えた。

なんかとんでもない夢を見たぞ。

「うう」

人の首を絞めた夢だった、ぐらいしか覚えていないが、生々しいことこの上なくて——特に、あの絞めていく手の感触——夢に悪酔いした気分だ。

カレンダーは休みの日だと告げていたが、もう眠る気にはなれなかった。

「うぶ……」

口を押さえて吐き気をこらえつつ、部屋を出て食堂へ向かう。

「……これが唯一……」

入ろうとする直前、ひそひそ声が聞こえた。

「手がかり……」

てがかり？

「……一体誰でしょう」

心配そうな高野の声に立ち止まる。

「それなんだ、ぼくの気になるのは」

周一郎が静かに応じた。

「ぼくはあの時、何の殺気も感じなかった……いや、それどころか目覚めることもなかった……」

不安げというよりは不思議そうな声だ。

「どうしてだろう？」

「………あるいは……」

高野が何か言いかけたのに、ドアに近づき過ぎて思わず扉を押し開けてしまった。溢れ出た眩さに思わず目を細める。

「おはようございます、滝さん」

その光の中から、周一郎が声をかけてきた。

心なしか青白い顔、サングラスが染みのように黒々と沈んでいる。珍しく、白いタートルネックのセーターに焦茶のスラックスという出で立ちだ。

「あ、おはよう………どうかしたのか？」

「え？」

「顔色が悪いぞ」

「ええ、実は……」

「にゃああ～～ん」

言いよどんだ周一郎の足下に、青灰色の光がじゃれついた。

ルトだ。

「ルト」

呼びかけて周一郎はルトを抱き上げた。気持ち良さそうにルトが一瞬目を細め、周一郎の腕に体をすり寄せる。その光景がまるで映画の一場面のように綺麗で、思わずぼかんとしてしまう。

と、ルトがはっと首をもたげ、忘れていた、と言いたげに周一郎の膝から滑り降りた。

「ルト？」

サングラスの奥の瞳を一瞬きらりと光らせ、周一郎はルトの後を目で追った。

外へ走り出て行ったルトは、何かをくわえてずるずるひっぱって来、小猫には荷が重いのだ、さっさと手伝えと言いたげに数歩向こうで立ち止まる。

「にゃっ！」

「何だ？」

警告するような鋭い鳴き声に、周一郎が緊張した声を返し、椅子からすらりと立ってルトの側へ近寄った。

「何をお前……」

ふいに、こちらに向けた周一郎の背中がびくんと強張った。ことばが宙に途切れる。周一郎がゆっくりとそれを持ち上げる。

「あれ？」

思わず頓狂な声を上げてしまった。ルトが引きずってきたのは、他でもない、俺の一張羅のコートなのだ。

「……滝さん、これはあなたのものですか？」

俺に背中を向けたままじっとそれを眺めていた周一郎が、低い声で尋ねてきた。声が微かに震えているように思える。

周一郎の手の中のコートをもう一度見る。

確かに俺のだ。

「うん……けど…上から三つ目のボタンは千切れてなかったぞ？」

「っ！」

続けたことばに、周一郎は弾かれたように肩越しに振り返った。

顔は蒼白、唇も真っ白だ。サングラスの奥で瞳が揺れている。何かを言いたげに開かれた口が、ふわふわ動く。

。「どう…し」

「周一郎？」

俺の声に周一郎は顔を背けた。そのまま、眩んだ視界をはっきりさせようとでもするように、二、三度首を振る。妙に幼い仕草だった。まるで、小さな子どもがいよいよをするような……やがて、妙に沈んだ表情でこちらへ向き直る。

「あなたの……なんですね…？」

縋るような声、そう感じた。周一郎が縋ることなどあり得ない、そのはずなのに。下唇を小さく噛む、その動きもどこか頼りない。

「ああ、でも…一体ルトはどこから持って来たんだ？」

俺は首を捻った。

「確か、昨日の夜はタンスに入れたし…」

「……っ」

周一郎が俺を詰る、一瞬、そんな気がした。く、っと顔を振り上げた相手が体を強張らせたまま、俺を貫くように凝視する。

それがあまりにも訴えかけるようで、そろそろと尋ねる。

「……どこかに落ちてた、のかな…？」

汚れたコートを放置していた、それで怒ってるんだらうか。それとも、コートが妙なところに落ちていて、それが周一郎の仕事に何かまずい影響でも与えたんだらうか。

「あの…ごめんな？」

とりあえず謝っておこう、と続けると、周一郎は表情をなくした。

「……滝さん…」

「ん？」

「………食事が終わったら…散歩でもしませんか」

口調は問いかけ、けれど有無を言わせない響きにおどおどと頷く。

「いいけど…」

「コートのボタンをつけさせておきましょう……ちょうどぴったりのがありますから」

「あ、うん？」

さすが朝倉家だ、そういうものも常備してるんだらうか？

頷きつつ、コーヒーを傾けると、

「お呼びですか」

姿を消していた高野がすぐに現れた。

「滝さんのコートのボタンが千切れたそうさ。つけておいてくれ」

「かしこまり……」

高野が周一郎の手からコートを受け取り、固まった。

「これは」

高野が呆然とした顔で、俺と周一郎を交互に眺める。ついに見つけられた幻の秘宝、そう差し出されてもこれほど驚いた顔にはならないだらう。俺は思わずパンを食いちぎるのを中止した。

「坊っちゃん」

「ちょうどいいのがあつたらう」

「で、では、坊っちゃん！」

「高野」

珍しく反論しかけた高野を鞭のようにぴちりと押さえて、周一郎は続けた。

「ぼくは、滝さんのコートを直してくれと言っている」

「し、しかし…」

「…」

今度は無言で、周一郎は高野を制した。じっと高野を見つめる目に激しい光が走った気がしたが、俺が横顔を見ているのに気づいたのか、すぐに瞳を伏せて顔を戻す。

「かしこまりました」

高野が苦しそうな声で引き下がった。

「すぐにお持ちします」

「？」  
高野がじろりと俺を見る。コートの修理を押し付けられたから、だけではないような冷ややかさにきょとんとすると、

「滝さん……構いませんか？」

「あ、うん」

残ったパンをコーヒーで流し込み、オレンジを一切れ口に放り込んで席を立つ。  
周一郎らしくない性急さ、散歩というのは理由付けで、何か話したいことがあるんじゃないかと想像はつく、がその内容となると見当がつかなかった。  
玄関から外へ出る。秋の空は高く青く澄み、常緑樹の緑と紅葉しつつある木々に、その下縁を僅かに削られている。

俺と周一郎はなんとなく、大悟の墓のある場所へと続く小道を歩いた。木漏れ日が独特の哀愁に満ちた色に染まっている。

「いい天気だな」

俺は大きく伸びをして眩き、日差しに気づいて周一郎を振り向いた。

「大丈夫か？」

「……」

頷く周一郎の顔色はやはり青かった。気分が悪いというよりは、何かの緊張感で血の気が引いている、そうも見える。だが、それほど周一郎を緊張させる出来事など、そうそう世の中にあるとも思えない。切り出してくるのを待つしかないようだ。

しばらく無言で歩いた後、周一郎が、らしくない、ためらうような口調で尋ねた。

「滝さん……昨日の夜……何か……していましたか？」

一瞬奇妙な感覚があった。周一郎は今、違うことを尋ねようとしたような気がしたのだ。

「いや…何も？」

唐突に夕べの夢が浮かんだ。

そういや、あの夢の俺はコートを着ていなかったか？

「すぐに眠ったんですか？」

「あ…うん」

どうも勝手が違う。

周一郎の尋ね方は、聞きたいことの中心を微妙に外しているように思える。

「変わったことはなかった？」

「ああ……まあ、嫌な夢は見たけどな」

「夢？」

ぎくん、と周一郎が体を固めた。

「それがさ」

人を殺す夢なんだ。

思い出してちょっとげんなりする。

「……殺す相手は？」

「それがわからなかった……霧の中だったし」

誰かの首を絞める感触、それは掌にまだはっきりと残っている。

「どんな……感じの？」

珍しく周一郎は重ねて尋ねてくる。

「どんな感じのって……それがさ」

俺の夢の話、周一郎は食い入るように聞いていた。緊張していた表情が話が終わりに近づくにつれ、感情をどんどん削ぎ落とされていく。やがて、

「…どうして」

微かな眩きを漏らして、周一郎は押し黙った。振り返る俺に、ふいに奇妙な笑みを浮かべ、

「滝さんは……僕みたいな人間は……」

掠れた優しい声音、突然日差しが紅葉に跳ね、風が梢を鳴らし、続いたことばを呑み込んだ、それとも、何も言わなかったのだろうか。

「周一郎？」

「…」

俺の声に相手はなぜか遠い瞳になって、くるりと頭を巡らせた。促すような背中に、そちらを向けば、その視線の先には、朝倉大悟の眠る白い墓碑がある。

それを見やった視界に、ふいに全く別のものが飛び込んできた。

背けた周一郎の首についた、赤黒い痣。

おいおい、その歳でもうキスマークかよ、そう思ったのは一瞬、何かが違うと囁く声に、目を凝らして気づく。

。まるで、誰かに締め付けられたような、食い込むような内出血の痕、だ。

(締め付けられた？)

見えない冷たい手に背中を撫でられた気がして、ぞくりと体を竦めた。

重なったのは、夢の中の細い首の感触。

(まさか)

まさか、そんなことは、ないよな？

まさか、夢が現実と重なることなんて、ない、よな？

「あの墓碑…」

ふわり、と柔らかな声が届いた。首を振って、頭に湧き上がった考えを打ち消そうとして、周一郎が伸ばした腕の先を見つめる。

白く鮮やかに墓碑は立っている。まるで、それが、何かの啓示であるかのように、周一郎は見つめ続け、やがてぼつりと眩いた。

「あれは、僕の墓碑でもあるんですね」

問うように聞こえた。

教えるようにも聞こえた。  
うすら寒いものが足先から、体の内側から、なぜか煙ったように鈍く霞む脳のどこかから広がってくるのを感じて、俺は黙ったまま、凝然とそこに立っていた。

## 2.孤高一人(3)

数日間が過ぎた。  
(今日もおかしかった)  
ここ数日の周一郎の様子を思い出して、ベッドに寝転んで読んでいた本を閉じ、小さく溜め息をつく。時計は真夜中、二時を過ぎている。草木も風も、空気さえも寝静まっているような、妙に静かな夜だった。  
(一体どうしたっていうんだ?)  
周一郎は緊張し続けている。一瞬たりとも気持ちを緩めない。  
それは俺の前だけではなく、高野達の前でさえそうだ。時々痛々しいばかりに高まり、次の瞬間、惚けたような奇妙な放心状態に陥りかけ、再び心を絞りに上げていくような緊張に戻っていく。  
何かを恐れ、しかも待ち受けている。  
(でも、何を?)  
朝倉周一郎が、あそこまで身構えて待ち受けているもの、恐れているものなど、俺には思いつかない。  
(仕事、か?)  
厳しい交渉とか、難しい相手とか?  
「……わかんねえなあ……」  
そのまま浅い眠りの中に滑り込んでしまっていたらしい。  
(あれ?)  
ここって、例の。  
あの淡い霧に包まれる夢の中に、いつの間にか立っていた。  
今度は何となくあたりがわかる。どこかの屋敷にいるようだ。  
『俺』が歩く、しっかりした足取りで。その後から俺がついていく、おどおどした足取りで。  
(どこだよ……ここ)  
不安になった矢先に、目の前でドアが開いた。  
誰かの部屋に入ったらしい。  
勝手に知り尽くした場所のように『俺』はすたすたとベッドの側に歩み寄り、片膝を軽くのせてぐっと体を屈めた。  
(お、おい!)  
その動作のとんでもない意図を感じて狼狽し、俺は伸ばしかけた腕を引き止めようとした。ちょっとの間引き止められたが、すぐにまたじわじわと腕が伸びていく、おそらくはきつと、この間絞めた首の方へ。  
(こら馬鹿やめろ何すんだてめえ!)  
あがいた、喚いた、抗った。  
だが『俺』は遥かに強かった。  
与えられた仕事を遂行することだけを考えている『俺』の手がゆっくりと犠牲者の首を掴む、じりじりと圧力をかけていく、容赦なく、ひたすらに。  
「う…」  
『俺』の手の下で、細いうめき声が漏れた。  
(あっ)  
どこか聞き慣れた声、そう思った瞬間に、ここ数日忘れるともなく忘れていたことを思い出した。  
周一郎の首の痣。  
(おいまさかあれは)  
背筋が凍えるような考えに呆然としている間に、もう一人の『俺』は沈着冷静に握り込んだ首を絞め続けている。限界を越えたのだろう、びくりと手の下の体が痙攣し、この前と同じく『俺』の腕を離そうとするようにしがみついている。  
「っ…っ」  
もがく体に相手の覚醒を感じ取り『俺』は締め付ける力を増した。悲鳴を上げさせないつもりだったが、相手は悲鳴を上げなかった。それどころか、『俺』の腕を押しつけようとしていた手からも力を抜いた。ぱたりと軽い音をたてて両手がベッドの左右へ広がって落ちる。さすがの『俺』も一瞬ぎょっとしたようだが、すぐに満身の力をこめて首を絞めようとするように、ベッドについた片膝をずらせ、体重を乗せかけた。  
その一瞬。  
僅かに首から力が抜けたのだろう、相手が掠れた声で吐く。  
「……たき……さ……」  
「っ！」  
頭の芯を駆け抜けた衝撃、いきなり視界が晴れた。  
「えっ、あっ」  
俺は周一郎の部屋に居る。俺の両手はベッドの上に力なく体を横たえ、無抵抗に両腕を左右に投げ出している周一郎の首に、しっかり絡み付いている。こちらを見上げている周一郎の瞳は朦朧と霞み、あの印象的な光は生気を失って闇へ沈んでいこうとしている。  
額から流れ落ちた汗に誘われるように、周一郎は目を閉じた。苦しそうに開いていた白い唇が、ひ、と小さく息を吸って固まり、がくりと首を横へ落とす。  
「しゅ、周一郎っ！」  
慌てて肩を掴む、ずるっと仰け反った首に震えが走って、相手をベッドに落としてしまう。  
「待て、待て、待て、どういふことだよ、なんで、なんで」  
無意識に後じさった。指先に残った冷ややかな皮膚の感触に体がすくむ。  
「なんで、俺、なんで、お前、なんで」  
一体、抵抗をやめた…?  
「く、そっ！」  
ベッドの Spredd に脚を取られて転げかけ、必死に体勢を立て直してドアへと走った。  
「高野っ！！」  
情けない、何もできない、俺にできるのは今、助けを呼ぶことしかない。

「高野っ！ 周一郎がっ！！」  
力の限りの絶叫は届いた。屋敷のどこかで慌ただしい物音が響き、あっという間に視界にガウンを羽織った高野が全速力で駆け寄ってくるのが映る。  
「高野、周一郎がっ！」  
「水を！」  
言い捨てて部屋に飛び込む高野と入れ代わりに、俺はつんのめりそうになりながら走った。洗面所に駆け込み、常時準備されている客用のコップに水を汲み、だばだば零しながら部屋に取って返すと、パンパンパンッ、と立て続けに周一郎の頬を平手打ちしている高野が居た。  
「坊っちゃんま！」  
呼びかけてさらに数回、容赦なく高野は周一郎を叩いた。こぶっ、と突然小さな咳をした周一郎はふいに大きく息を吸い込み、むせかえった。  
「く、ふっ、はっ、はふっ」  
そのまま体をくの字に曲げて咳き込み続ける。喉元に当てた手が震え、シーツにすがりついた指先は真っ白だ。  
「坊っちゃんま！」  
「だ…いじょ……」  
激しく荒い息を吐きながら、周一郎は仰向けに寝そべった。額に数本、汗に濡れた髪の毛がへばりついている。整わない呼吸を繰り返しながら、何かを探るように彷徨った瞳が俺を捉えて、ふいに緩んだ。  
「すみ…ません……滝さん……何か……僕……急に気分が…悪くなって…」  
「へ？」  
「びっくり…した…でしょう……？」  
おい、待て。  
周一郎の台詞にきょとんとする。  
気分が悪くなった、だと？  
「では、坊っちゃんは御気分が悪くなったのだ、とおっしゃるのですか」  
高野が納得しかねるように尋ねる。  
「そう…なんだ……。滝さんに…頼まれた……資料を……探していたら……ねえ、滝さん？」  
きらりと周一郎の目が光った、はい、と言えと言うように。  
「あ…あ」  
掠れた声で何とか応じる。  
「もう……大丈夫だ…。高野はやすんでくれていい」  
「し、しかし」  
なおも続けようとする高野を、周一郎はじっと見つめた。その瞳に嘆願するような切なさが浮かんでいる。高野はちらりと俺を見つめ、無言で頭を下げた。それから静かにドアの外に消えていった。  
行くな、高野。  
不安に胸が揺れる。  
だが、高野は戻ってこない。  
「……周一郎」  
口から零れた自分の声が重かった。  
「俺は…」  
違うよな？  
「俺は、お前を…」  
違うだろう？  
「違います、滝さん」  
「っ」  
きっぱりした声に振り返った。  
ベッドから俺を見上げる周一郎は、まだ呼吸が整っていない。微かに息を喘がせて、  
「僕が気分が悪くなったんです」  
そう、なのか。  
いや、違う、よな？  
「嘘をつくな」  
振り向いて、周一郎の側に歩み寄った。  
いつの間にか首のあたりまで引き上げていた掛け布団を、掴んで引き下ろそうとしたが、周一郎がぐっと布団を握って止める。  
「滝さんは何もしていないんです」  
「俺は」  
そこまでぼけちゃいない。  
自分が何をしていたか、この掌の感触が教えている。  
「俺はお前の首を絞めていた」  
引き下げることこそ叶わなかったが、一瞬見えた周一郎の首には、くっきりとした手形がついていた……おそらくは、俺の。  
「僕、眠ります」  
ふいに周一郎が微笑した。  
「疲れました。おやすみなさい」  
そのまますぐに目を閉じる。  
俺の口の塞ぎ方を心得ていた。  
「……おやすみ」  
一言呟いて、部屋の外へ出た。  
ドアを閉めると、中で周一郎が目を開けたのが気配でわかる。  
「この前のも……」  
俺なのか。  
「どうして…？」



唇を噛む。  
夢の中の自分の殺意を思い出した。  
理由も状況も考えず、俺は周一郎を殺すことだけを考えていた。そして、それに何の疑問も抱かなかった。  
ぞくり、と体を震わせる。  
自分が自分でなくなってしまったような、暗黒の感覚。  
それに。

「……どうして」  
周一郎は抵抗をやめた？  
振り向いたドアは開かない。開けられない。  
のろのろと歩き出しながら、ががんとくる頭の中で理解する。  
そうだ、まぎれもなく、周一郎は殺されるつもりだったのだ、気を許している——そう高野は言った——俺に

(気を許している…?)  
階段を下りる途中で立ち止まる。  
もし、俺が周一郎の立場だったら？  
唯一気を許している相手に殺されかけたとしたら？  
(裏切りだ)  
何よりも受け入れ難い罪。  
形容し難い痛みが胸に走った。  
「そんなの」  
あるはずないだろ。  
「俺が周一郎を殺すなんて」  
急ぎ足に階段を下りる。  
あるはずがない。  
そう強く言い聞かせながら。

その夜、俺は朝までまんじりともせずにごろごろと過ごした。  
眠れるわけはなかった。眠れば、あの淡く輝く靄が、再び俺に周一郎を襲わせるような気がして、幾度かぞくりぞくりと身を震わせながら。  
次の朝は見事な秋晴れの日で、青色のガラスを散らせたように、空はそこそこに微妙で繊細な輝きを煌めかせていた。

雲一つない、とは、こういう空を言うのだろう。爽やかな風が開けた窓から吹き込み、強張った体をほぐしていく。少し伸びをした。タンスに放り込んでいるポストンバッグのことが、ふと頭を掠める。

(出て行くか?)  
理由もわからないままに？  
「……」  
部屋を出た。  
この部屋、そして、この家は、俺にとっても『ホーム』になりつつある。  
できることなら離れたくない。

(けど)  
周一郎の生死となれば、話は違う。  
「ふう……」  
廊下をとぼとぼと歩いて行った俺は、階段の下で、高野から手紙を受け取っている周一郎の姿を見つけた。  
整った顔立ちには少し影がさし、身に着けたベージュのタートルネックに隠れた首が、微かな傷みを伴って視界に飛び込んでくる。

「…おはようございます」  
こちらの視線に気づいたらしい周一郎が、ゆるやかに俺を振り向いた。艶やかな黒髪、眩げな表情、妙に幼く見えて、そのまま消えてしまいそうで、慌て気味に廊下を駆け寄る。

「周一郎、俺、」  
「お由宇さんからまた手紙が来ていますよ」  
不思議なほど淡々とした、別な言い方をすれば、心がどこかに行ってしまったような声だった。差し出された手からエアメールを受け取り、封を破る。

『こんにちは、志郎。元気でやってる？  
こちらはまた新しい展開になろうとしてるわ。以前のフランスの密輸組織を覚えてる？ あれが、また急に動き出しているの。寸断されたはずなのに、みるみる組織化されていっている。まるで、「誰か」がまとめ始めたみたい。長期戦にもつれ込むのは困るから、早急に決着をつけることになると思う。準備は進んでいるから、心配しないで。』

むしろ心配と言えば、そっちの方がも。  
私にはどうしても気になっているの。  
綾野は、本当に死んだのかしら？  
「はあ？」  
いきなり手紙で、京都の事件をあれこれ書き出してあるのにも呆気にとられたが、何だって？  
「綾野が死んでない？」

「、っ」  
びくっ、と周一郎が激しく震えて思わずそちらを見ると、相手の顔が真っ白になっていた。  
「おい、周一郎、」  
「なぜ」  
「だよな、あいつが生きてるなんて…」  
言いかけて俺は口を閉じた。  
真っ青になっている周一郎のサングラスの向こうの瞳、見えないはずのその視線がまっすぐ俺に注がれている

と痛いほどわかる。その視線の意味も、まるで、テレパシーのように頭に飛び込んできた。

「そうだ、違う、こいつが今こんなふうなうろたえているのは。」

「生きてる、のか？」

「、」

周一郎が目を見開いた。微かに息を吸い込む、だがその酸素は助けにならなかったらしい。

「な、ぜ」

「周一郎！」

「滝さん、に…っ」

苦しげな呟きを漏らして崩れた相手に手にした便箋を投げ捨てた。

「周一郎！ おい！」

叫びながら、同時に理解する。

こいつは知ってたんだ。

綾野が死んでないこと。

生きていること。

フランスで復活している密輸組織、まさか、その背後の『誰か』というのは。

そして、その『誰か』が狙っているのは、まさか。

「周一郎！」

半身起こさせてぴたぴたと頬を叩く。高野の迫力には負けるが、幸いにも少しめまいを起こした程度だったらしく、周一郎はすぐに意識を取り戻した。

薄く開けた瞳で俺を見上げ、肩越しに入る朝日が眩しかったのか、すぐに背ける。

「大丈夫か？」

夕べのことも堪えてるはずだ。何より今わかった事実、それが俺に封じられていた情報だったということは。

「…ちょっと…出かけませんか」

「は？」

ぼんやりした口調で周一郎が呟き、呆気にとられる。

出かける？ こんな状態で？ こんな体調で？

「ざけんな！ 何、馬鹿なこと言ってやがる！ さっさと寝ろ！」

本気で詰った。

「ぶっ倒れたくせに、出かけるも何も」

「あなたは本当にのせやすいな」

俺の怒りの形相を見上げていた周一郎が、ふいに、にと笑って身を起こす。

「何度ひっかかっても懲りないんですね」

「は、あ？」

くすりと笑った相手は、倒れたことなど夢だったようにするりと立ち上がって、パンパンと元気に服の埃を払い、ことばを継いだ。

「今のは芝居です」

微かに肩をすくめてみせる。嘲る口調だった。

「おい」

「本当にあなたはいつまでたってもお人好しだ……」

最後の方が滲むように噛み締められた、そう感じたのだが。

「どうせ、今日、大学へは行かないんでしょう？ ちょっと付き合ってください」

暇な男を使う、そういう響きの声にむっとする。

俺だってそれなりに予定があるのだ、予定が。まあ、今日はないが。今日は。

「付き合う…って、どこへ」

ふて腐れた俺の問いかけに答えが返ってくるまで、少し沈黙があった。

「……ぼくが気に入っている所へ。それとも…」

背中を向けて呟き、くるりと振り返った周一郎は、冷めた笑みに唇を歪ませていた。

「行き先不明では不安ですか？」

変だ。

ふと、そう思った。

これは周一郎らしくない。らしくなさすぎる。

これではまるで、俺に甘えているようだ。

そう思った瞬間、頭の濟みで白い反射が閃いた。クレセント・ムーン……ちらりと浮かんだイメージに呼び出されたように、淡い靄が見る見る頭の中を覆っていく。

(しまった！)

心の中でうろたえた。

眠ってる時だけじゃなかったのか！

「…わかった。行くよ」

『俺』が応える。

「…」

ぴくりと周一郎の眉が動いた。

(気づけ、周一郎！)

気づいてくれ、『これ』は俺、じゃない。

「……………」

周一郎はじっとこちらを見つめていた。光が瞳を過り、煙るような目になったのを、サングラスをかけて隠すように背け、

「では、車を用意させます」

背中を向けて遠ざかる。しばらくして、玄関から俺を呼ぶ声がした。

(気づかなかった？ まさか)

『俺』は当然のようにすたすたと歩いて玄関に向かい、用意された車に乗り込む。じたばたしている俺に気づかないふうで、珍しくラフなジャケットスタイルで既に車に乗り込んでいた周一郎が、表情のない顔で運転手に告げる。

「和野岬へ」

朝倉家を出て数十分後、運転手が唐突に伝えてきた。

「尾けられています」

「何だ」

後ろを振り返りもせず、周一郎が尋ねる。

「オートバイが一台……追いつきます」

思わず後ろを振り返った。HONDAの750、見る見る近づいてこちらの車と並ぶ。

「っ！」

ライダーがふいに手を伸ばし、どンドン、と車の窓を叩いてきた。何かを喚くように頭を振っているが聞こえない。何を思ったのか、ライダーが片手でオートバイを操りながら、ヘルメットを脱ごうとした。

（おい、危ない！）

俺は慌てたが、『俺』は落ち着いたものだ。車の外で怪しい動きをするライダーにうろたえた風も驚いた風もない。だが、それは周一郎も同じで、何か攻撃をしかけられていると怯える様子もなく、相手の出方を眺めている。

「！」

と、背後からもう一台、HONDAと車の間に突っ込んでくる。

「…」

運転手は見事な腕で、絡み合うように並走し始めたオートバイ二台から離れた。HONDAがもう一台のバイクと競り合いながら速度を上げていく。あっという間に道路の先に消えていく。

「……暴走族の小競り合いでしょうか……おや？」

平然とことばを継いだ運転手が再びバックミラーを見る。

「もう一台……女性ようですが、さかんに止まれと合図してきています」

ふ、と周一郎が笑った。

寂しい笑み、切なげな、胸を絞るような笑みを浮かべて、首を振る。

「振り切ってくれ」

「はい」

いきなり車の速度が上がった。背後から追いつがってくるバイクを見る見る置き去る。

「今のは……？」

『俺』が尋ねた。

「さあ」

変だな。

（相手のこと、知ってるみたいだったのに）

俺の思惑も知らぬ気に、車は和野岬へ向かって走った。

途中、オートバイ事故一ひょっとすると、俺達を追い越していった、あの二台のどちらか一があっただけなく、人々が集まっていたが、今の俺にとっては、どうやって『俺』を引き止めるかが差し迫った問題、だがじたばたするだけで何もできない。

そうこうしているうちに、岬が見えてきた。観光地でもない寂しい場所、おまけに朝のことだから、人影はほとんどない。

まさに『俺』にとっては絶好の場所だ。

「……どうぞ」

運転手がドアを開け、『俺』達を降ろすと、言いつけられていたのか、近くのレストランへ走り去って行ってしまふ。俺が必死に、行くな、行ったら、お前のご主人がどうかなっちゃうんだぞ、と心の中で叫んでも、もちろん届かなかった。

「いい天気ですね」

周一郎は車が消えてしまうと、深く息を吸い込んだ。ゆっくりとした足取りで岬の突端へ向かう。それほど切り立った険しい岬ではなく、突端まで緑豊かな岬だったが、見下ろせば白い歯並みを思わせる海が広がっている。岬の裾に噛みつく波の勢いはかなり強い。

ここから落ちれば、まず助からないだろう……。

（あ、このっ！）

その俺の思考に反応したように、『俺』は静かに周一郎の背後に忍び寄った。

（ばかっ、やめろっ）

もがく俺、進む足、踏ん張る俺、周一郎の背中に向けて伸ばされる、手。

（やめろこのくそ馬鹿すつとこどっこい！）

「滝さん」

「、」

突然、凜と響いた声に動きを止めた。

無防備に背中を向けていた周一郎が、陽炎が揺らめくように向きを変え、俺に向き合った。

ざぶり、と、その遥か下で波の砕ける音がする。

「滝さん？ 僕のことばが聞こえますか？」

物柔らかい口調で呼びかけながら、周一郎はこちらを見据えた。静かに澄んだ瞳、サングラスの向こうからでもわかる、優しい視線。

（気づいてたのか！）

いつから？ どうして？

でも、それなら、なぜ、こんなところへ『俺』を誘い込んだ？

（あ）

俺の脳裏に、力なくぐったりとベッドの上に伸ばされていた周一郎の腕が浮かんだ。

（まさか）

背中に氷塊が放り込まれた気がする。過ったのは京都の清の姿。

それが何を意味するのか、もう俺はよくわかっている。

（殺される、つもりで）

「、っ、ば、かっ」

じりじりと周一郎の側へ近づいていた『俺』の足が止まった。ほんの少し、俺が表面に出ることに成功した、

その間に叫ぶ。

「何、してるっ！」

「滝さん…」

「にげ、ろっ！」

必死に後ずさりする俺に、周一郎は静かに首を振った。

「じゃあ、誰か、を、呼んで、く、れっ！」

前へ前へと否応なく押し出される力に抵抗する。次第に押さえがきかなくなる。頭ががががん痛み出して吐き気がする。

「は、やくっ！」

だが、周一郎は再び首を振った。

「……暗示は……強いものです」

微かな声がつぶやいた。

「へたに実行を妨げれば……人を…破壊することもある……」

「周一……っ！」

びしっ、と脳髄に亀裂が走った、そんな痛みで膝をついた。もっともそれは、意識上の俺のこと、『俺』の体は再び周一郎に向けて迫り出している。

「滝さん？」

周一郎は正面から俺を見つめた。サングラスを通して、その瞳に宿る深い憂いと絶望は、とても十八、九で浮かべられる凄さがあった。

「他の誰かなら、僕はむざむざ殺されはしない……でも……あなたには……」

ぐっと眉根が寄せられた。端正な顔立ちが苦しげに歪む。閉じた瞼の睫毛が震え、深いところから声が漏れた。

。「僕は死にたくはない」

(それなら『こいつ』を何とかしろよ！)

胸の中で地団駄踏んだ。

(殴るかどうにかして病院送りにしろって！)

俺だって嫌だ、こんな状態で訳もわからず、人殺しになるなんて。

(周一郎！)

助けてくれ。

(周一郎っ！)

俺の煩悶に応じるように、ふ、と周一郎は薄く目を開いた。

風が吹き上げ、周一郎の髪をなびかせる。噛みしめていた唇に淡く血が滲んでいる。どれほどの激情と戦っていたのか、こちらを射抜くように捉えていた瞳が、急に生気を失った。

(おい？)

背中を氷塊どころではない、もっと寒い、ぞっとしたものが滑り落ちていく。

(どこかで、これと同じ場面を)

そっくりな、この競り上がる不安感、溢れていく、満ちていく、奇妙な確信。

オレハコイツヲ、タスケラレナイ。

(周一郎？)

「でも……」

甘い、とさえ言えるような声音。

微かな笑み、今にも消え去りそうな、気弱な。

(京都)

そうだ、あの橋の上、川面へ周一郎が呑み込まれていく一瞬前の。

(あのとき、俺は間に合わなかった)

場面が重なる。

仰け反り落ちる周一郎、水面にあがる飛沫、寸前綻ぶ、幻のような笑み……。

(冗談、じゃ、ね、えっ)

俺は死にものぐるいになった、『俺』を内側から殴りつけ、ぶちのめし、淡い靄を突き抜けようともがく。

だが。

「僕はあなたを殺人犯にしたくない」

淡々と周一郎はことばを続けた。同時に、まるで後ろにも地面があるかのように、平然と空中へ一歩、後じさりした。

がらっと音をたてて、周一郎の足下の岩が砕ける。

「周一郎！！！」

俺の口を絶叫がついた。

瞬時に靄を突き抜け、周一郎へと精一杯手を差し伸べる。

はっとしたように、一瞬、周一郎の顔がほころんだ。いいんですか、と言いたげな、妙に痛々しい表情が空に舞う。

「っ！」

周一郎が腕を伸ばした。俺の手を掴もうと、岩と一緒に崩れ落ちながら、こちらへ手を差し伸べる。

「くそおっ！」

両手を差し出す。手と手、スローモーションのように近づいていく。地面に倒れて叩きつけられ、一瞬視界が眩んだ。

「ち、いっっ！」

強打した胸の痛みにつつと緩んだ意識の中で、這い寄ってきた『俺』を蹴り出す。

微かに鈍っていた視界が晴れ渡る。

体を伸ばす、もっと、もっとだ。

がっ、と腹のあたりでのしかかっていた岩が崩れる。均衡を失って前へのめる。

一緒に落ちるかもしれない。

(んなもん、構うか！)

もう、二度と、あんな想いはごめんだ。

なのに。  
「…え？」  
周一郎の唇が何かを紡いだ。  
「なに……？」  
もう少しで届くはずの手を、周一郎がいきなり自分の体に引き寄せて驚く。  
「ばっ…！」  
緩やかに流れていた時がいきなり加速される。  
「おいっっ！」  
俺の目の前で、周一郎は見る間に黒い点となって遠ざかっていく。何が起こったのか信じられなくて見開いた目に、波が意志あるもののように大きく盛り上がり、周一郎を包み込み呑み込むのが映った。  
「どう…して……？」  
落ちた？  
なぜ？  
十分に俺の手を掴める距離だった、今度は間に合った、なのに、なぜ？  
「なんで…？ ……っ」  
体を起こそうとして、地面についた手の下でざくり、と砕けた岩にぎよっとする。改めて気づけば、俺の体はかろうじて岩盤に乗っている状態、もう少し力が加わって岩が砕けていれば、きっと支えを失って落ちていただろう。  
「まさか」  
閃光のように答えがひらめいた。  
周一郎の視界に、この俺の状態は見ていただけるか？  
ああ、もちろん、見ていただける、あの全てを見通す瞳は、自分を掴んだ俺がこの後どうなるのかも、はっきり見て取っていたに違いない。  
(俺も落ちると、思って…？)  
この岬を熟知していた。端に近寄れば、踵の軽い一撃で崩れるほど脆い基盤だということも。だからこそ、ここを選んだ周一郎、ならば当然。  
「……どうして……お前はそう…なんだよ…」  
悔しさが募る。腹立たしさに変わり、怒りに変わる……またもや助けられなかった無力、それは周一郎と俺の、どうしても埋め切れない立ち位置の落差を思わせて。  
周一郎が俺を助けるということは、周一郎が死ぬしかないこと。  
俺か、お前か。  
そういう選択肢しかない厳しさを、俺はまた読み損なったということか？  
けど。  
「どうして…一人で、決めちまうんだよ！」  
ざぶっと海が穏やかな音をたてた。  
「どうしていつも！」  
俺にその才能があれば、お前を追い詰めずに済んだのか？  
俺にその覚悟があれば、お前を守ることができたのか？  
けど。  
「どう、して……っっ！」  
どうして、お前はいつも、俺を対極に置くんか。  
「く…そおおっ！」  
ざわざわと人が集まる気配も気持ちにはなく、がくがく震える体と過熱した頭が、今の俺の全てだった。

### 3.空へ

こんこん。  
静かなノックに続いて、  
「滝様」  
辺りをはばかりような低い高野の声が聞こえた。  
俺は動かなかった。深く肘掛け椅子に身を沈ませたまま、黙っている、主を失った周一郎の部屋で。  
「滝様」  
少し口調が強くなった。  
「坊っちゃんまが悲しまれます……どうか、ご参列下さい」  
「…っ、」  
口に競り上がった罵倒を噛み殺した。  
高野が周一郎の死を悲しんでいないはずがない。周一郎の命令と意志を、最後の最後まで守りたいだけなのだ。

。日差しは既に落ちていた。部屋の中には、夕暮れの物憂い光が満ちている。青く霞む部屋の壁に、俺のポートレートが掛かっている。  
「滝様……」  
低い声が諦めたように続ける。  
「それでは、こちらにお食事を置いて参りますから、一口でもお食べ下さい」  
朝からほとんど何も食べておられないでしょう……？  
どこか寂しそうに尋ねる声が滲んでいる。  
そのまましばらく俺の動きを伺っていたようだったが、やがて静かに立ち去って行った。  
屋敷の中は、俺の居る部屋を除いて、軽く湿ったざわめきに揺れていた。  
今日は周一郎の密葬の日だ。  
周一郎が朝倉財閥を動かしていることは、ごく限られた者しか知らない。そして、知っている者は、その突然の不在に動揺を隠せていないようで、密葬とは形だけ、その実、次に打つ手を必死に探し求めての話し合いが続いている。  
その形だけの式にも、俺は出なかった。  
周一郎を追い詰め殺したのは、他ならぬ俺、伏せられ隠され匿われてはいるけれど、俺が何をしたのか、誰よりも俺自身が知っている。  
胸が苦い。腹が、視界が澱んでいる。  
(ここに居ちゃ、いけない)  
足元には、すっかり荷造りしてしまったボストンバッグがあった。  
(周一郎…)  
俺なんか、雇わなければよかったのに。

周一郎の死体は、あの事故――厚木警部のことばを借りれば――の翌日に見つかった。  
「滝さんですね」  
知らせて朝倉家から駆けつけた俺に、警官は沈痛な顔を向けた。  
死体などは見慣れているはずの相手の態度には、痛々しくて見ていられない、というニュアンスがあって、心臓を鷲掴みされたような気になった。  
警官は、おそろおそろ頷く俺を人垣から連れ出し、野次馬達が近寄れぬ岩場の方へ導いていく。  
「あそこです」  
警官の声に、そこに居た厚木警部が立ち上がり、重々しく頷く。俺を連れていった警官は、そこで向きを変えた。不審な顔つきの俺に答えるように、  
「見たくないんです……あれは」  
固い声音で言って、警官は野次馬の整理に戻っていく。  
俺は少し後ろ姿を見送り、厚木警部をめざして岩場を歩いた。  
近づくにつれ、厚木警部の足下のビニールシートをかぶせられた塊に目を吸いつけられる。  
「辛い役目でね」  
厚木警部の声は苦かった。腰をかがめ、ビニールシートをそっとはぐる。  
「っ、」  
信じたくなかった。  
あの崖から確かに海に落ちたのに、俺はまだ周一郎が死んでいるとは思いたくなかった。  
だが。  
「……」  
ビニールシートの下にあった顔は、紛れもなく周一郎のものだった。  
「……周一郎君だと思っただが」  
厚木警部の声も半分耳に入っていなかった。  
崩れるように膝をついた俺の前で、周一郎の体がぐったりと水に濡れそぼったまま横たわっていた。  
乱れた髪が額に張りつき、どこかで打ったのだろうか、幾筋かの血の跡が額から端整な顔を横切っている。伏せられた顔は青白く、もう開くことはなく、悲鳴をあげまいとしたのか、一文字に結んだ口元にも血の跡があった。身に着けていたページユのセーターの所々に赤黒くしみ込んだ血痕があり、何も拒まぬように弛緩し切って投げ出された四肢には、わずかな温感もない。  
俺はそっと手を伸ばして、周一郎に触れた。  
冷えきった、死者の固さだけが戻ってきた。  
「滝君……」  
「……周……一郎……です」  
掠れた声で応じた。

涙が出なかった。胸のあたりで重いしこりがあって泣けなかった。それが悔しく哀しく、俺は吐き捨てた。  
「周一郎ですよ！」  
死体の、切なげにひそめた眉が苦しそうで寂しそうで、その顔に『滝さん』と呼びかける周一郎の顔が重なってやりきれなくなった。

(帰ってこない)

冷たい感触の指先が心臓に届く。

(周一郎は二度と俺を呼ぶことはない)

「……」

ゆっくり我に返る。

正面の俺のポートレートが能天気な笑みを浮かべている。

周一郎の個室に、その写真は掛かっている。ベッドと上品な落ち着きをたたえる木製の調度品の中、部屋のどこからでも見られるように。

まるで、一番大切な家族、離れてはいるけれど、誰よりも側で見守ってほしい家族の写真のように。

「…んなもん、飾ってどうするんだ」

写真は答えない。

写真は助けない。

俺はすぐ側に居たのに。

(最後まで一人で逝ってしまった)

落ちた時に、周一郎が自分から差し伸べた手を引き寄せてしまったことが、心に苦く澱んでいる。

「ひきずり落としときゃ、よかったんだ」

こんなに鈍感な俺なんか。

「こんなふうに大事にするほどの価値なんて、なかったんだ」

写真に毒づく。

どれほど哀しかっただろう、自分から救いを断ち切ってしまうのは。

どれほど苦しかっただろう、これほど心を許した友人に裏切られるというのは。

「俺を落として、お前が助かればよかったんだ……っ」

冷たい顔で冷やかに振舞っていた通り、俺の安全なんか、気にしなくてよかったんだ。

「にゃ」

「……ルト？」

ふいに声が響いて振り向くと、部屋の隅から青灰色の猫が立ち上がり、とん、と机の上に乗った。そのまま、燃えるような金色の目でこちらを見ている。

「…呪い殺していいぞ」

お前にはその資格がある。

自嘲気味に呟いてみせたが、相手は俺の自己憐憫なぞに興味はなかったらしい。瞳を鋭く煌めかせると、ごととつ、と机の上にあった本を蹴り落として床に飛び降り、そのうちの一冊を踏みつけて小さく鳴いた。

「にゃむ」

「何？」

「んにゃ」

「何だ？」

こっちへ来てみると言わんばかりの声に、ゆっくり体を起こし、ルトの側へ近寄る。ひらりとルトが身を避けて、踏みつけていた本を拾い上げる。

立派な革表紙の本、だが開いてみて、繊細な文字で書かれたそれが日記だと気づく。

「…今日、遊び相手が来た。滝志郎。大悟に似ている。だがドジだ……俺？」

おい、ルトこれは、誰の。

振り向いてみたが、既にルトは姿を消している。

日付は俺が初めてここに来た日だから、ここの家の者には違いない……もしかして。

「周一郎の…？」

おいおい、それはまずいだろ、と慌てて戻そうとしたとたん、視界に飛び込んだ文字に動けなくなる。

『滝さんが撃たれた。ぼくは自分を許さない』

「ああ……あの時の…」

『こんな人が居てくれたら、どれほどこの世界が好きになれるか、と』

「……」

胸が詰まる。

のろのろと椅子に戻り、俺が屋敷に来た日からゆっくりページを捲った。

『わからない。どういう人だ？ 見えている通り？ こんな人が世の中を生きていける？ ぼくと同じ、孤児なのに』

『本当に見えている通りのお人好し？ あり得ない』

『本気で心配して、子ども扱いする。不愉快だ。計画に適合しない？』

『他人をあてにした。ぼくが。怪我をしたせいだ。計画がずれたせいだ』

『何を迷ってる？ 打つ手は終わった。滝さんを使えばいい。けれど、嫌われる？ たぶん確実に。憎まれる？』

あり得る。憎まれるんだ』

『ミス。滝さんが危ない。怖い。どうして？ 失敗が？』

『滝さんを庇ってしまった。馬鹿か？ ぼくが？ 滝さんが？ きっとぼくだ。キャストをミスしたのに手放さなかった』

『種明かし。しなくていいのにしたかった。嫌われたくなかったが嫌われた。憎まれた。二度ともう戻ってこない』

『二度と戻ってこない。助けてくれそうだったけど』

『二度と戻ってこない』

『戻ってくるはずない』

『どこにいるんだろう』

『戻ってくるはずない』

『大丈夫か』  
『二度と戻ってこない』  
『戻ってきた。なぜ？ ああもう理由はいい。戻ってきた』  
胸をえぐられて読むのを止める。  
朝倉家に戻った時の周一郎の顔を思い出す。自制がきかずに、一瞬ぱっと顔を輝かせた。その時ばかりはサングラスが不似合いな子どもに戻った顔。  
「……ちっ」  
舌打ちして日記に戻る。  
逃げるな。こっからが俺がやったことだろ。  
『清の裏切り。罨。滝さんが一緒だ』  
『ぼくは、大丈夫だ』  
日記は少し途切れている。無邪気な『直樹』の時間。  
光の中、笑い声、あのまま周一郎を放っておけば、今で生きていたんだろうか。あんな切ない死なせ方をさせなくて済んだのか。  
『滝さんが撃たれた。ぼくは自分を許さない』  
『こんな人が居てくれたら、どれほどこの世界が好きになれるか、と考えては、いけなかった』  
『何度も戻ってくる。なぜ？ 危ないのに。なぜ？ ぼくは何もしないのに？ なぜ？』  
『信じる、という行為は何だろう。意味がないのに。滝さんはなぜここにいる？』  
『彼女から警告。綾野は生きている』  
ざわ、っと背中が毛が一気に逆立った。  
「お由宇、か？ だよな…？」  
そういえば、お由宇からの手紙を読んだ周一郎の様子がおかしかった。  
思い出して、慌ててバッグを探して、手紙を取り出す。どことって、おかしなものではなかったように思う、思うが。  
周一郎が異常に集中して読んでいたのは、どの部分だったろう、と読み直す。  
「確か詩があって……」  
芸術の都パリ、とは古めかしいことばだが、人類の宝とでも言いたい作品がある場所には違いない。その空気にあてられたかと思ったような詩だったはず。  
「……あいしてるのに、やさしさしかみせないのね、のこっていたかなしみはどこにけしたの……」  
読みながら首を捻る。  
これのどこに警告がある？  
『残っていた悲しみ』というのが京都の事件の符号だとか？  
『優しさしかみせない』というのが、隠されていた真実だったとか？  
「うーん」  
顔をしかめて続きを読む。  
「ちにぬれたうではあいなんて、ゆめのなかのこと、うれいをつつんでかたすくめてみせる、いとしいあなた……」  
俺に詩の才能があるとはさらさら思えないが、この詩がお由宇が惚れ込むような内容にはとても思えない。ましてや、最終章に至っては、ほとんど中身の無いことばを並べただけとも…。  
「中身が、ない？」  
ふいにそれに引っ掛かった。  
俺が、この詩がお由宇に不似合いだと思うのは、中身らしい中身がないからだ。お由宇が中身の無い、意味のないものをわざわざ送って寄越すとは思えないからだ。  
そして、周一郎は確かに『それ』を受け取っている、警告だ、と。  
その警告が『綾野が生きている』ことだと。  
「……あいしてるのに、やさしさしかみせないのね、のこっていたかなしみはどこにけしたの、ちにぬれたうではあいなんて、ゆめのなかのこと、うれいをつつんでかたすくめてみせる、いとしいあなた……あ」  
何度も何度も眺めていて、ふいに気づいた。  
これってよくあることば遊びじゃないか？  
「『あ』いしてるのに『や』しさしかみせない『の』こっていたかなしみ……『あ』『や』『の』『ち』『ゆ』『う』『い』……か！」  
ことばの一番始めの一字を繋げていくと、確かにそう読める。  
「綾野、注意、生きている……だ」  
周一郎はこれを読み取ったのだ。  
慌てて日記を繰った。  
『彼女と連絡を取る。フランスで動いた。綾野を見た』  
「え…」  
背中が毛がざわざわと立ち上がっていくのはこういう感覚か。あの蛇じみた残忍さを思い出す。運命という奴は何が何でも、俺と綾野をぶつけないでは気がすまないのか。  
お由宇はフランスで綾野を見つけるや否や、すぐに周一郎に連絡を寄越した。  
なぜだろう？  
（まさか）  
淡く白い霧を思い出した。ここ数日の俺の妙な出来事。  
（まさか）  
『連絡は順調。綾野は僕を憎んでいるが、一度死んだ人間が「これから」死んでも問題はないだろう』  
『「マジシャン」。催眠術の天才。フランスから送られたらしい。誰を狙っている？』  
（催眠術？）  
それって、あの、眠くなりますよー、はい、1、2、3、ってやつか？  
チカッと頭の隅でクレセント・ムーンが閃いた。  
あの、名前も聞かなかったウェイトレス、あの娘にコーヒーをぶっかけられた日から、俺は周一郎を狙い始めた、んじゃないか？



(まさか、あの娘が『マジシャン』?)

『僕への刺客は、滝さんか』

「……」

予想はしたが、そのことばに呆然とする。

あの日コーヒーをぶっかけたのも、アパートに誘ったのも計画か? あそこで俺はコーヒーを飲んだ。そこにたぶん、何かの薬が入っていて……俺はあっさり暗示にかかった、周一郎を殺せ、という暗示に。

指から日記が滑り落ちかけ、我に返った。

『僕は馬鹿だ。「マジシャン」に操られている滝さんを遠ざけることも、拒むこともできない。彼女に頼んだ仕事を切り上げるか?』

『彼女に口止め。僕は賭けをしたいのだろう。滝さんは暗示を破ることができるかどうか。無理だろう。滝さんの好意を量ってる。僕の価値を量ってる』

『ことばを使い分けてどうしようというのか。自分の必要性がわからないだけだ』

『生きていいのかわからない』

『滝さんは誰でも受け入れている』

『滝さんは大事にしてくれる、僕を、だがそれは本音か?』

『本当は、面倒なんじゃないか?』

『言い出せないんじゃないか』

『優しいだけだ』

『滝さんまで不要なら、僕の生きている価値などない』

『僕は、生きていていいのか?』

『ここにいていいのか?』

『僕はここにいていいんですか、滝さん』

「……っ」

歯を食いしばった。年甲斐もなく泣き出しそうだった。

「…俺が一度でも、嫌ったことがあったかよ…っ」

小憎らしい奴だとは思ったことがある。ガキのくせして、何を突っ張っている、そう思ったことはある。だが、一度だって心底嫌いだとは思ったことはない。むしろ、いじっぱりがほんの一瞬、俺の前で崩れるのが無性に嬉しくてならなかった。

苦しくて、その先を求めてページを繰る。白紙。周一郎の寂しいような哀しいような、何とも言えない瞳が重なる。白紙。「滝さん!」振り返る周一郎が重なる。白紙。弱みを見せたと気づいて赤くなる周一郎。白紙。ルトを抱き上げる周一郎。白紙。サングラスの奥の瞳が問いかける、いいんですか、と。白紙。「僕、ここにいていいんですか?」白紙。「いいんですか、滝さん」白紙。「滝さん」白紙。「滝さん…」 「…滝さん…」 「…滝…さん……」 ……。

滲む視界に、周一郎の声が遠く響く。繰り続ける白紙のページに零れ落ちる涙、それを隠すように、永久に埋められることがなくなったページを、俺はひたすら繰り続け……。

「……周一郎……すまん……」

最後まで白いままのページに深く項垂れた。

## 4. 導火線

秋晴れの気持ちのいい日だった。  
「おはようございます、滝様」  
周一郎の告別式は終わったにもかかわらず、いつもより一層黒づくめの服装をした高野が深々と頭を下げた。俺を迎えてくれるはずの、もう一人の顔はない。周一郎の体が既に灰となり、細かな粒子となっている、それは俺にとって一おそらくは高野にとっても一実感のないことだった。  
「にゃあん」  
優しく甘えた声を上げて、ルトが足下へすり寄ってくる。青灰色の滑らかな体を俺の脚にこすりつけ、少し耳を倒し、小さく口を開けて、下げているポストン・バッグを邪魔そうによけ、再び俺に全身で甘えてくる。  
「お前も淋しいのか」  
俺はそっとルトの小さな体を抱き上げた。  
床に置いたポストン・バッグに高野が静かな目を向ける。  
「出ていかれるのですか？」  
「……周一郎がいないんだ。俺のいる意味はない」  
（そうだ、俺はもう、あいつに何もしてやれない）  
答えながら、俺は妙に虚ろな気分になっていた。ふと、身内が死ぬというのはこんなものなのだろうか、とぼんやり考える。  
「にゃ…あ」  
ルトが頬に顔をすり寄せてきた。甘えているとも慰めているともとれる仕草、その温かみが急にあることを思いつかせた。  
（本当に？）  
俺の思考に気づいたように、きらっとルトが金色の目で俺を射抜く。  
（俺は、本当に何もしてやれないのか？）  
「マジシャン…だ」  
俺はきっと、日本で唯一彼女の素顔を知っている。そして、その拠点としていているところにも、ひょっとすると辿りつけるかもしれない。  
「高野」  
「はい」  
「もう少し、俺をここに置いてくれ」  
振り返った俺を、高野は眩そうに目を細めて見た。  
「ひょっとすると、何かわかるかも知れない」  
まさか、滝様が。  
そう一笑に付されるかと思った予想は外れた。  
「坊っちゃんから命を受けております」  
「は？」  
「滝様が望まれるなら、お好きなだけ御滞在頂くようにと」  
また大家さんに追い出されるようなことになるんでしょう？  
そうつぶやいて、サングラスの奥で微笑む顔が見えた気がした。  
「周一郎が？」  
「はい。もし自分に何かあった時は、滝様の望まれるままにするように、と」  
高野は物寂しい笑みを浮かべた。  
「…それは、最近、に…？」  
掠れる声を絞り出した。  
「いいえ、京都へお出かけになった直後です」  
高野のことばに、優しくまとわりついてくるような周一郎の思いを感じ取った。  
（周一郎……おまえ…）  
守ろうとする、かの高みの翼を思わせる両の腕。  
本当は、誰よりそれが欲しかったのは、周一郎だっただろうに。  
（居場所が欲しかったのは、お前だろうか？）  
沈んだ俺にルトが小さく鳴いて、腕を擦り抜け、軽い足音を立てて床に降り、肩越しに振り返った。来い、と言っているらしい。  
俺はルトに付き従って外に出た。緑豊かな広々とした敷地の中を、俺を導いて、ルトは二つの墓標の前に出た。  
真白な二つの墓標。  
目にしみるような鮮やかさと冷たさで、俺の前にそれらはあった。  
「周一郎」  
そっと墓標に手を置いた。ぼんぼん、といつか周一郎がやっていたように叩き、最後にばちん、と叩き降ろして勢い良く背を向けた。  
（待ってるよ、マジシャン！）  
俺は、神経だけは他の誰よりタフなんだ。  
  
「……っかしいな」  
俺はうろうろともう一度道に戻った。  
確かこの角だったはずだ。そして、そこから……？  
五度目か六度目の、角を曲がるという行為を繰り返す。  
見覚えのある街並、通り過ぎたような店構え、たぶん俺はあの時この道を行ったはずなのだ。なのに、心に引っかかる何かがあって、角を曲がった、そこから進めない。  
「く、そっ」  
ひどく妙な感じだった。進もうとするたびに、心のどこかから「違う違う」と叫ぶ声が出て、手足がこわばっ

てしまう。意地になって、倒れ込むのも想定内、一歩大きくそちらへ足を踏み出したとたん、

「きゃっ！」

「わ!!」

悲鳴とともにいきなりぶつかってきた塊に吹っ飛ばされる。

(マジシャン?!)

そんなことがあるはずはないと思いながら、そう閃いた次の瞬間、

「何してんだよ、このドアホッ！」

飛んできた罵声にぎよっとする。たぶん俺とぶつかって転がったのだろう、目の前で尻餅をついていた娘がぱつと立ち上がり、きつい目で俺を睨みつける。

「トロい顔していつまでも座ってんじゃないよ！ 怪我でもしてんのかよ！」

「え、いや、あの」

すっかり気を飲まれて、俺は相手を見上げた。歳の頃、十六、七、黒の革ジャンと革ズボン、はっきりした顔立ちに化粧がよく似合っている。ショートカットの髪を無造作にかきあげ、見下すようにねめつけた。

「早く立ちなあって、みっともない。それとも……あれ？」

俺を罵倒していた娘がひょいと視線をずらせる。

「由宇子さん！」

「へ？」

振り返ると、ベージュのニットワンピース姿のお由宇の姿があった。

「あら、志郎」

「あら、志郎って……じゃ、この人が滝さん?!」

娘が素っ頓狂な声を上げてげらげら笑い出す。どうやら俺を知っているらしい。だが碌な『知り方』じゃないのだろう、腹を抱えて笑いつつ珍獣でも見るような目に、むっとして急いで立ち上がる。

「日本に帰ってたのか？」

「ええ、ちょっと前にね。こっちで片付けたい仕事があったものだから…」

ふ、と憐れむような、聖母マリアじみた表情を浮かべて続ける。

「周一郎が死んだ、と聞いたけれど」

「ああ」

思わず目を伏せた。

「そう、なんだ」

殺したのは俺らしいんだが。

お由宇なら、何かもっと有効な手立てを思いついたり手伝ってくれるかも知れない。だが、その前に俺は人殺し(間接的にでも)だと告白しなくちゃならない。それもまだ決心がつきかねた。だが、

「ところで、こんなところで何をしてるの？」

「う」

相変わらず、お由宇はまっすぐ焦点を突いてくる。

「大学は？」

「う」

「アルバイトは？」

「う～」

「どこへ行くつもり？」

「う、う～」

「この人、熊か何か？」

娘が容赦なく俺を指差して獣扱いした。

「違うわよ……違うから、何かをしようとしてるんでしょ？」

にっこりと微笑まれる。

だめだ、見抜かれている。

「実は」

「実は？」

「周一郎の件で、マジシャンって娘と俺が関わってるらしくて」

「マジシャン？」

ちかり、とお由宇の目が物騒な輝きを帯びる。

「それで？」

「居場所を知ってると思うんだ。だから、そいつの所へ行こうとしてるんだが、どうにもこっから動けなくなっちゃまって」

「へえ～ベビーカーが要るんだあ？」

「動けない」

娘の茶々にお由宇は動じない。

「そうなんだ、早くしないと、あいつが逃げちまう」

「…志郎？」

「あん？」

「これを見て？」

お由宇は軽く頷き、首から外した銀のロケットをすりと俺の前に垂らした。突然の動き、思わずその揺れるロケットを眺める俺に、子どもをあやすような優しい口調で呼びかけてきた。

「銀のロケットよ。この中に何が入っていると思う？」

「さ、あ…」

ロケットはゆっくりと左右に揺れる。

どこかでこれとそっくりなものを見た、と思った。銀色の何かが視野を過ってゆっくりと動く。白い反射。白い面輪。白い顔。白い……月。

コーヒーはどこだろう？

「さあ、私が手を叩くとすべての暗示が解けるわ、3、2、1！」

パン、とお由宇の手が鳴った。びくっとして我に返る。

「あれ？」

違和感は足下にあった。

軽い。

「俺？」

「行きましょう、志郎。マジシャンが危ないわ」

「え？」

走り出すお由宇に慌てて肩を並べる。

「マジシャンが、危ない？」

聞き間違えたのかと思ったが、相手は真面目な顔をしている。

「危ないって…？」

走りながら尋ねた。

敵方は周一郎を始末した。危険なことはもう何もないだろう？

「あなたがいるでしょ」

お由宇が走りながらさらりと口にした。

「俺？」

「そう、今もこうして」

どんどん真実に近づいている。

「あ」

確かにそうだ、今の今まで角を曲がって、それから、がどうしてもわからなかったのが嘘のように、俺は先に立ってマジシャンの家に向かって走っている。

「志郎が進みにくかったのは催眠暗示が続いていたせい、でしょうね。目的を果たした後に追跡されないために、記憶の連鎖を切っておいた……けれど、それだけの用心をしても、あなたはここまで来て…しまった」

見覚えのあるアパートが見えてくる。

「それほどあなたが鈍かった」

「おい」

「…わけ、じゃなくて」

軽く息を弾ませたお由宇が笑う。

「それほど、あなたと周一郎の結びつきが強かった。……それを利用しようとした綾野が、あなたに直接接触しているマジシャンをそのままにしておくとは……思えない……安全弁は幾つでもあったほうが…いい」

はっ、と軽くお由宇の呼吸が乱れた。もちろん俺はもう聞くだけで手一杯、ぜいぜいはあはあ言いながら、それでも何とかマジシャンの部屋のドアに飛びついた、その瞬間。

「ぶがっ！」

ドアが勢いよく開け放たれて、視界が火花に覆われた。

「どわあっっ！」

続いて小さな手が容赦なく俺を突き飛ばし、目一杯ぶつめた鼻を押さえて仰け反った俺は、ごっどぐっどしんっ、と擬音語満載で背後に転がる。

「待ちなさいっ！」

お由宇の制止の声、足音が乱れる。

「理香さん！」

「わかってる！」

「うぐぐぐ」

涙でぼやぼやした視界の中、背後からついてきていた革ジャンの娘が応じて、そちらへ走っていく娘を遮ろうとする。だが、一瞬遅く、身を翻したマジシャンが一気に道路の向こうへ走り抜けていこうとする。

だが。

「あああっ！」

ぎゃあああんっ。

悲鳴とも金属音とも取れる無機物な叫びが響き渡り、逃げ切ろうとしたマジシャンと理香の間を一台のバイクが横切った、と同時に、先に走っていたマジシャンの体がぐきよっ、と妙な角度に折れ曲がるように傾ぎ、次の瞬間、ボロ切れのように吹っ飛ぶ。

「くそっっ！」

理香が自分の方へ向かってきたバイクからかろうじて飛び退く。かなりの距離をとったように見えたが、バイクの男が握っていたのは鉄パイプ、ぎりぎり僅差で理香を掠めてあっという間に走り去る。

ちいっ、と高い舌打ちが聞こえ、俺の前からお由宇が走っていく。

「ナンバーは！」

「だめ、ナンバープレート外してる！ 狙ってやがった、あいつ！」

振り返った理香が激しく顔を振った。

「ブレーキもかけてねえ！」

「かけてたら自分もただじゃすまないわよ」

人一人、たとえ少女にせよ、人間の体は重い。バイクのバランスを保ったまま、相手だけをなぎ倒すには、それなりの度胸と腕は必要、とお由宇は冷めた目つぶやいた。

吹っ飛んだマジシャンは、予想もしていなかったのだろう、いやむしろ、バイクが自分と理香との間を遮ってくれると思ってさえたのかもしれない。道路の端に人形のように奇妙な形で転がった彼女にゆっくり近づくとお由宇の後から、おそるおそる覗き込む。

「…っ」

同じものを見た、和野岬の海岸で。

遠い視線、微かな驚きと穏やかさの同居する、ぽっかり空いた魂の虚ろを思わせる目。

何だよこれは。

「……綾野、か？」

「…たぶん。理香さん」

「……さっきそこに居た人が連絡してくれてた」

理香が顎で、そこから一目散に走っていく背中を示した。

「面倒なことに関わり合いたくないらしいね」

こっちも同じだ、と肩を竦めてみせる。

「帰ろう、お由宇さん」

そいつはもう戻ってこないよ。

言い放つ理香がちらりと何か言いたげに俺を見た。

「そうね。そっちの情報はすぐに入るでしょう……志郎？」

お由宇が同じように静かな声で続けて、ゆっくりと振り返る。

死体を目の前にしても全く動じない四つの目に見据えられて、俺は竦んだ。

「何、だよ」

思わず視線を逸らせる。逸らせた視界には、否応なく道路に転がっている死体が入ってくる。

ああそうだろう、綾野なのだ。綾野は手段を選ばない。自分の身を守り、自分の望みを叶えるためには、何人死なせても平気なのだ。

ぞくり、と背筋が冷えた。鳥肌が立って、足下が頼りなくなる。

どうもがいても捕まってしまうような気がする。知らない、とここで投げ出しても、綾野が俺の死を安全弁の一つとして必要とするなら、俺の思惑おかまいなしに、今夜にでもコンクリート詰めになっているのかもしれない。

「志郎？」

お由宇がもう一度呼びかけて、振り返った。

聖母マリアじみた微笑。

いいのよ、と語る瞳。

あなたが嫌ならいいのよ。

でも、な？

思わず掌を開いて見下ろした。

あの時、俺は周一郎を救えなかった。

なのに、周一郎は俺を救ってくれた、自分の退路を断つことで。俺が殺人犯になることから。俺と一緒に死ぬことから。俺が負い目を背負うことから。

命の借りは、いつ精算されるのだろうか？

園長の話の思い出す。

太陽は全ての道を照らしている。

「俺は…」

できれば、自分がぎりぎりのときに、助けが欲しい。

自分がぎりぎりのときに、今果たさなかった借りを返せと言われて受け入れられるほど、器の大きな人間じゃないんだ。

「…お由宇…」

「はい？」

「……コーヒーを一杯奢ってくれ」

もちろん、出世払いで。

かたかた震えながら、それでも胸を張って伝えると、理香が呆れた顔になり、お由宇がぐすりと笑った。

「いいわ……あ、そうだ」

私の家で面白い人に会うかもしれないわよ？

「面白い人？ ……厚木警部とか」

「は！ デカが居るならあたしが行きゃしないだろ！ ばかじゃね？」

理香が嘲笑うのに、事情を知らないだけでも馬鹿なのか、と思い……ふと、足下を見下ろした。

「……ごめん」

虚ろに開いたマジシャンの瞳を閉ざす。ひんやりと冷たくて固い感触に、あの時伏せられていたとはいえ、薄く開いていた周一郎の目も、こうして閉ざしてやればよかった、と胸が詰まった。

辛い現実の裏側を見る傷みから、少しでも守ってやればよかった。

けれど、俺は馬鹿だったから。

何も知らなかった、から。

「ごめん」

マジシャンと呼ばれるこの娘が俺を操った、けれど彼女もまた綾野の操り人形でしかなかった。どこかでその鎖を切ることができたとしたら、俺が君に操られなければ良かったんだ。俺が何が起こってるのを見ないふりをしなければよかったんだ。

周一郎がいなくなる前に、俺がもっと、世界をよく見ていればよかったんだ。

俺が見ているから、安心して眠っている。

そう言ってやれば、よかった。

「……志郎！」

「今、行く」

きっと口を結び、立ち上がり。

何かがいきなりだらだらと鼻から口へ。

「おわ！ おっさん、鼻っ！」

「むぐぐぐ」

「志郎、早く」

ハンカチを出したお由宇がいきなり流れ出した俺の鼻血に溜め息をつく。

……やっぱり慣れないハードボイルドなんてするべきじゃない。

「で、」

誰なんだ？

さっきの事件のショックからやや立ち直って、俺は前に行く娘を顎で示した。

「立花理香さん。日本での仕事の協力者よ」

「協力者？ お前、一体何をしてるんだ？」

きょとんとすると、お由宇はふふっと謎めいた笑みで応じた。

「話せる部分は後で話すわ」

「……話せない部分は」

「今にわかる」  
「また名探偵気取りかよ…」  
いいかけて脳裏を、朝倉家ででくわした事件が掠める。  
あの時はあいつが居た。  
今度は俺一人で立ち向かわなくちゃならない。  
(京都の時だって結局は)  
落ち込みかけた俺は、次に聞こえた理香の声に飛び上がった。

「直樹！」  
直樹？

「って、待てよ」

慌てて顔を上げると、理香が走っていく先にはもうお由宇の家が見えてきていた。家の前には、煙草を銜えた、理香と同じような革ジャンの男が立っている。理香を見つけると煙草を指先で弾いて捨て、ふてぶてしい笑みを浮かべて両手を広げる。その腕の中へ飛び込んだ理香は、人目も憚らず相手の首に腕を巻きつけ伸び上がってキスをかかわした。

「わー」

二重のショックで口をぱくぱくさせる俺を従えて、お由宇は抱き合う二人の横を平然と通り抜けながらたしなめる。

「そういうことは中でやりなさい」

「…と言ってもね、ここ二、三日こいつと会えなかったんだから」

名残惜しげに唇を離して、男はようようこちらを向いた。だが、片手はまだ理香の腰に回されたままだ。

「滝さん、お久しぶりですねえ」

にやっと不敵な笑みを浮かべる顔は、できれば今一番見たくない顔、周一郎の顔だ。

里岡直樹、周一郎の代わりとして俺を騙そうとした少年……。

「まあ、こんなところで立ってないで、入りましょう」

直樹は卒なく続けて、あ、と口をつぐんだ。少し沈黙した後、気まずい微笑をにじませる。

「いけねえや、『前』の癖が残ってるな。どうしてもあんた相手じゃ、敬語になっちゃう」

「志郎」

「あ、うん」

引きつりかけた顔をことさら伸ばして、お由宇の後に続く。

なんでこいつが、こんなところに居るんだよ？

数十分後、湯気のとつコーヒーカップを手に、俺達四人はお由宇の家の居間に居た。

「傷は？」

「かなりまし。無茶やってくれるぜ」

直樹は理香の声に、つい、と額に手を当てた。よく見ると髪に隠された額に白い包帯、片手にも包帯が巻きついている。ばさりとした髪の下から、妙に凄みのある目で俺を見つめる。

周一郎ならそんな目で俺を見ない。

いや、今となっては、俺を見もしないかも知れない、信頼を裏切った友人、なのだから。

その俺の表情に気づいたのだろう。

「ご不満のようですね？」

「敬語を使うな」

問いかけた直樹に俺は唸った。

「あいつを思い出すばかりだ」

「へえ？」

おやおやと言った顔で肩を竦めた直樹は、お由宇の方を向き、

「オレの顔が気に入らないのかな？」

軽く首を傾げてみせる。

「それとも、オレが自分を詰るように見えるとか？」

どこまでもふざけた口調だった。

「志郎」

お由宇が小さく吐息をつく。

「あなたの気持ちはわかるけど……彼は綾野相手の場合、どうしても必要な人なのよ」

「…わかってる」

なら、顔を整形させ直してくれ。

危うく言いかけたのを思いとどまった。

だが、それは本音、今にも吹き出しそうな本当の気持ちだ。

絶世の美男子だろうが、神話に出て来る偉丈夫だろうが、どっちでもいい。俺の知らない、全く違う男の顔でやってくれ。でないと、周一郎を重ねてしまいそうになる、今のままでは。

「わかってるよ」

つぶやいて、無意識にそっぽを向いた。

「ちえっ、冷てえの」

直樹がふてた。

「あの時だって、せっかくバイクで追いついたってのによ」

「あの時？」

思わず聞き返した。

「あんたが周一郎と和野岬に行った時だよ」

ちかっとオートバイの競り合い場面が脳裏を掠めた。

「ひょっとして」

確かにそう言えば、HONDAの750のライダーの姿が目の中の男の動きと微かに重なる気もする。

「綾野が生きてて、あんたらを狙ってるって教えてやろうとしたのにさ、あんたらは気づかない。おまけに綾野の手下が邪魔しやがるし、珍しくしつこく競り合って事故ちまって、このザマよ。あっちは死んだけどな」

それが『元々』の癖らしい、直樹は肩を軽く竦めてみせた。

「けど、どうして…」

直樹は綾野側だったはずだ。

俺のことばの先を察したらしく、直樹は煙草に火を点け、唇の端で銜えた。

「オレ、あの家では保護観察処分？ てやつで」

あの家、とは里岡家のことだろう。ことばに含まれた冷やかさに、直樹は『あの家』におさまりきれなかったのだろう、と推測する。

ふう、と物憂げに煙を吹き出して、直樹は続ける。

「何回か、けーさつへ出ばってね、事件の証人喚問とやらに答えてた。で、綾野が死んだって言うんで、こりゃ全部吐いちゃっていいかなと思った次の夜ぐらいにさ、襲われて殺されそうになったんだ」

じっと煙草の先を見つめる。

「……それまで、オレ、少しは綾野を尊敬してたんだよね。あそこまでやることやって悪になれるのも偉いとか。なのに、オレ一人の口を塞いで、自分だけが生き延びようとセコイ手使う。あげくのはてにコイツまで狙いやがって」

くい、と直樹に頭を抱き寄せられた理香は、妙にしんみりした顔になっている。

「で、オレ、もっとやばくなる前にあんたらに教えてやろうと思ってたんだけど……遅かった、な」

直樹は、パシッと片手のこぶしをもう一方の掌に叩きつけた。こぶしの傷が痛んだらしく、ぐっと眉を寄せる。

「直樹君は協力を申し出てくれたわ」

お由宇は滑らかで無駄のない動きでコーヒーを口元に運びながら、直樹の煙草を取り、灰皿に押しつけて消した。目の前で動かれるも、雑誌のモデルか俳優のような綺麗さ、けれど、そんなことには頓着せずに、直樹がちゅと舌打ちする。

「傷によくはないわ」

「協力はする、けどオレの自由まで奪うなよ」

「死にたければ勝手になさい。ここなら綾野も手を出しにくいでしょうけど、他の場所は知らないわよ」

お由宇がざらりと脅して、直樹がことばに詰まる。

ここならって、ここは普通の一軒家だろ、綾野が手を出しにくいって、一体ここに何があるんだよ。

「でね」

突っ込みかけた俺の気配を察したのか、お由宇は直樹を放ってくるりとこちらに向き直る。

「日本へ帰ってきたのは、フランスの方と合同の仕事に取りかかるためなの」

「へ？」

フランスの方？

「綾野の組織はトップの復活で再び蠢き始めている。放っておけば、また国家間貿易を揺さぶる被害が出てしまうでしょう。もちろん『SENS』の被害も広がる」

そうだった。単に密輸どうのこうのではなくて、薬剤がらみもあるんだった。

「だから、表立っては動けないけれど、日仏合同で壊滅しておくことにしたの」

「かいめつ？」

隣の猫が喧嘩してうるさいから、ちょっと怒ってくるわ、的な軽さで続いた内容に瞬きする。

「かいめつってあの、破壊するとか、徹底的にやるって、あれだよな？ 新種の浜辺に居る生物とかじゃなくて」

「どんな生き物だよ、それ」

直樹が突っ込み、お由宇が微笑む。

「今回はいろいろな『協力者』が居てくれて」

直樹と理香に視線を送り、にっこりと笑ってから、ゆっくりと俺を振り向く。

「きっちり始末がつけられそうよ？」

「あんたは止めとけ、ドジそうだから」

直樹がにやにや笑った。

「足手まといになるぜ？」

「足手まとい…」

ああ、そうだろう、いつだって俺は、碌に何もわかっていなくて、何もできなくて、しなくていいことをしちまったり、言わなくていいことを言っちゃまったりする。そして、その結果、しなくちゃいけなかったことをしなかったり、伝えなくちゃいけなかったことを伝え損ねたりして……今もこんなに後悔してる。

「俺は…」

理香が妙に光る眼で俺を見据えながら、直樹の腕にすがりついてぴったり身を寄せた。きつい表情、さっきまでの手荒い言動に反して、何だかいじらしい仕草だ。黙り込んで視線を落とした直樹がぼつりと呟く。

「コイツだけは、もう狙わせたくねえんだ、オレは」

突っ張った表情が消えると、やっぱりどこか周一郎に似た寂しさが過る横顔だった。

「お由宇…」

「ん？」

「俺は何もできなかった。周一郎をほんの少しも助けてやれなかった」

コーヒーカップを両手で包んだ。

脳裏にマジシャンの死に顔、周一郎の死に顔、日記の、永久に埋められることのない白いページ、目が痛くなるほど磨き上げられた白い墓標が交錯し、重なり、また離れていく。口には出さないけれど、みんな悲しんでいる、周一郎のいない朝倉家を……それを、あいつは本当はわかってなかったんじゃないか？

目を閉じると、それらの映像の奥に、燻り続ける燠火のようなものが風を得、空気を得て、再び燃え出していくのが見えた。

願いは何だろう？

周一郎を失った俺が、今真実願っていることは？

「……それでも、俺に何かできることがあるなら」

気づくと口は勝手に先を続けていた。

「手伝わせてくれないか、お由宇」

「…そう言ってくれと思ったわ」

微笑んだお由宇は空になったカップを、俺の掌から持ち上げた。

「お代わりをいれてくるわね」  
カップがなくなった掌は、まだ空間を包んでいる。  
周一郎という名前の、友人を。  
「…代わりなんかいない」  
俺の呟きに直樹が反応した。  
「次のが来るさ」  
「代わりなんかいない」  
見上げた視線を受け止める相手に、繰り返す。  
「俺はまだ、あいつと出会ったことを終わらせてない」  
「…」  
直樹は一瞬大きく目を見開いた。



## 5.喉元過ぎれば...

俺はきつと底なしのお人好しなのだ。  
何度面倒ごとに巻き込まれているのかわからないのに、どうしても放っておけなくて、やっぱり面倒ごとに首を突っ込んでしまう。  
「今度だってそうだ。」  
京都の事件で、俺は綾野に敵対する無茶を十分身にしみて知っているはずなのに、こうやってまた、『周一郎まがい』とこんなカフェで顔を突き合わせている。  
「何ぶつぶつ言ってんだい？ 出て来たぜ、ほら」  
直樹は、くい、と親指を立てて、通りの向こう、そびえ立つビルの入り口からゆっくり階段を下りてくるスーツ姿の男を示した。紺色のリクルート風な色合いだが、生地と仕立てがそこらで見かける類じゃない。  
冷やかな視線で相手をそいつを眺めながら、直樹は、左手に煙草右手にコーヒーカップを掴んで、冷めた中身を喉に流し込んだ。  
「あれが……………誰だっけ？」  
頷いたものの思い出せず尋ねると、  
「あんたもたいがい物覚えが悪いな」  
頭の中に詰まってるのは何だよ、スポンジか、と直樹は呆れた。  
「綾野の片腕とも言えるって言う、大沢夏雄じゃないか。四十七歳、大沢産業の副社長だよ」  
「あのパソコンの？」  
「厳密に言えば『技術屋』、ソフトの方。ハードウェアソフトウェア問わず、腕のいいやつを他業種のIT部門に派遣してる。親父の明宏が社長で締めてるから、ちょっとやそっとじゃ動かないぜ……………レポート読んだろ？」  
「読んだぞ、日本語はちゃんと読める」  
「いや、そこが問題じゃなくて」  
「ただ、頭には入ってない」  
「おい」  
「自慢じゃないが、一度目を通して全部理解できたら、わざわざ追試には走り回らないぞ。最低でも三回ぐらい読まないとは駄目なときもある」  
「……………自慢してないか？」  
「してるよな？」  
直樹はやれやれ、と小さく吐息をついた。  
大沢は少し周囲を見回していたが、やがて昼飯を食べに行く人々の中に混じり込んでのんびりと歩き出した。周囲で弾ける女性社員の華やかな笑い声に目を細め、寛容な大人の笑みを浮かべている姿は、ごく普通の『立派な』社会人に見える。  
「犯罪に関係してるようには見えないなあ」  
「あんたはお人好しすぎる。行こうぜ」  
直樹がレシートを放って席を立つ。慌ててレシートを掴んで会計に向かう俺を顧みることもなく、すたすたと人波の中に紛れ込んでいく。  
俺より背の低い、やや小柄な姿が機敏な動きで人ごみを縫っていく。  
勘がいい。  
まるで周囲の思惑を全て知ってでもいるように、すれ違う人間に正確に一步ずつの隙を空けて避けていく。眺めていると、今度は逆に、周囲の思惑など知ったことではないという気配で人々の体の中を通り抜けていくような奇妙な感覚を覚えた。革ジャン姿、整った容姿、滑らかな動きはけっこう人目を引くだろうに、まるで人ごみの中に溶けていってしまうようだ。  
(こういうところが周一郎と違う)  
周一郎はあの年齢にしては不似合いなサングラスのせいだけではなく、いつもどこか人の目を魅きつけるものがあつた。一つ一つの動作の、絵画のような華やぎと、内側から滲む、静まり返った緑の水をたたえる湖のような気配が、一人の人間に共存していて、知らず知らずに人の視線を吸い込んでいく。  
集団の中に居ても目立つ少年と、集団とは違う動きをしても消えていく少年。  
周一郎の代わりを務められる人間などいない。  
けれど、たぶん、誰でもそうなんじゃないだろうか。  
誰でも、自分なりに一所懸命生きてきたなら、その存在を代行することができる他の人間なんて、いやしないんじゃないだろうか。  
「あれ？」  
ぼんやり考えていた俺は、ふと、前に居たはずの革ジャン姿を見失ってどきりとした。  
「え」  
「そう言えば、いつの間にか、大沢もいなくなっている。」  
「ちょ、ちょっと。そりゃ…やばいよ」  
うろたえて辺りを見回した。  
「一体いつはぐれてしまったのだろう。今の今まで、まっすぐ俺の目の前を……………」  
「どっ！」  
「しっ」  
きょろきょろしていたところに、いきなり足をかけられてひっくり返った。表通りから少し入った路地へと一気に引っ張り込まれて、喚こうとしたのを制される。  
「お由宇…」  
真ん前に突き出された顔が、苦笑した。  
「案の定、まかれちゃったのね」  
「案の定って……………始めっからそのつもりだったのか？」  
むっとすると、  
「そういうわけじゃないけど……………でも、『彼』があなたと一緒にいたら、大沢は周一郎が活着していると思うかも知れ

ないし、そっちから揺さぶりをかけられると思ってただけど…」

「周一郎は死んだんだ！」

思わず反論してしまった。

「あいつの代わりなんて、いやしない！」

びくっと体を震わせたお由宇が口を嚙み、はっとする。

「ごめん。そうよね、周一郎はいないのよね」

「……ああ」

慰めるような物言いに、きまり悪くなって目を逸らせた。

実は自分でも驚いた。こんなに『周一郎が活着ている』ということに対して過敏に反応するとは、自分でも思わなかった。

たぶんきっと俺は、まだ信じてないのだ。

あんなにはっきり死体を見ても、高野や岩淵やお由宇が周一郎の死をベースに、いろいろ動き出している、まだ信じていない。

『周一郎は死んだ』

『周一郎はいない』

そう繰り返す言い聞かせている途中で、だからそれを覆されるようなことを聞くと、それに頼りそうになる自分が不安になるんだ。

けど、それはお由宇とかには関係のない話で。

関係のないことで八つ当たりした自分が情けない。

「はあ…」

溜め息をついて目を上げた先に、いつの間にか、直樹が居た。淡いシルエットになって、じっと俺とお由宇のやりとりを聞いていたらしい姿、俺の視線を一瞬避け、次には思い直したようにまじまじと見つめ返しなが、直樹は口を開いた。

ためらいがちに、何かを囁こうとするように。

けれど、その直前、急に気を変えたように、

「まーったく！ やってられねえな。いなくなったんで心配して来てやれば、こんな所で何してるんだよ、あんたって人は！ 救いようがねえな！」

「……」

確かに俺は救いよーがないアホかも知れないが、お前に罵倒される筋合いはないぞ。

無言で睨み返した俺のかわりに、お由宇が尋ねた。

「大沢は？」

「例の所。誰と待ち合わせてるぜ」

ひょいと肩を竦めてみせる。

「アンリ、聞いての通りよ」

「ソウ、デスカ。ヤッパリ、取引ハ、日本デ行ワレルヨウデスネ」

振り返るお由宇に答えたのは、上品な三つ揃いを着こなした、背の高い男だ。たどたどしい日本語を操り、きれいなブルーの目で俺を捉え、無邪気に笑った。

「滝サン、デスネ？ ボク、あんリト言イマス。あんリ・でゅびえデス。由宇子サンニハ、オセワニナツテマス」

誰だこいつは？

「彼は、今度の事のフランス側の人間なの」

俺の内側の声を聴いたように、お由宇が説明してくれる。

「……えーと、それはあの……警察とか、ICPOとかの？」

「…」

にこりとアンリは目を細めた。肯定とも否定とも取れる曖昧な笑みだ。

「それで？」

鋭い目でアンリとお由宇を見比べていた直樹が口を挟んだ。

「オレはどうすればいい？」

「そうね……彼は知ってるでしょ、アンリ」

彼に陽動の方を頼もうと思うの。

お由宇の声に、アンリは頷いた。

「アア…ソレハイイ。滝サントデスカ？」

「そ」

きゅっといたずらっぽく片目をつぶったアンリに、お由宇は不思議に優しい表情になって、俺を振り向いた。

「志郎、後は『直樹君』にまかせるわ」

「へ？」

「直樹君、大沢をしばらく見張っていて。私達、もう少し情報を煮詰めてみるから」

「お由宇？」

一瞬、彼女の瞳に何かひどく優しいものが見えた気がした。こう、思いやりに満ちた俺への謎かけ、みたいなものがその瞳にたたえられていて、俺がそれに気づくのを待ってくれているような…。

「あの、おゆ」

「滝さん！」

だが、急にぐいっと腕を引っ張られて、それ以上考えるのは無理になった。

直樹がしっかりと俺の腕を抱え込み、表通りへ引っ張り出していく。

「お、おい！」

「頑張ってるね、志郎」

お由宇はちらりと憐れむような顔になり――それは、なぜか直樹により多く向けられたような気がしたのだが――軽く頷いてアンリと話し始めた。

俺はそのまま直樹に引立てられるように表通りに戻り、そこでようやく相手の手を振り切った。

「なんだよっ、もう！」

「…」

ふっと、不敵な、見ようによってどこか物寂しくも見える笑みを浮かべて、直樹は肩を竦めた。ポケットから

出した煙草をくわえ、ライターで火を点け、にやっと笑う。

「あのままにしておいたら、あんた、ずっと話してるだろう？」  
言い捨てて、すたすたと先に立って歩き出す。慌てて後を追って尋ねた。

「お、俺は一体何をやればいいんだ？」  
「陽動さ。由宇子さんが言ってただろ？」  
ふうっ、と煙を吐く。

「陽動？」  
「由宇子さん達の方がちょっと華々しい動きをしなきゃならねえんでね、その間、大沢達にはこっちを向いてもらおうってわけ。…怖かったら、よしてもいいぜ？」

「怖い……で引き下がれたらいいんだが……」  
直樹と肩を並べながら、思わず溜め息をついた。  
ここまでどっぴり事件に浸っちゃったからには、きちんとカタがつかない限り逃げられないのはわかってる。

。「ほんっとにおかしな人だな」

「？」  
「よくまあ、他人の事で、そこまで一所懸命になれるもんだぜ」

呆れ果てたと言いたげな直樹の声だった。  
「周一郎があんたにとってどうだって言うんだい？ 何の繋がりがあって、死んじゃった今でも、あいつの影を追っかけてるんだい？」

（繋がりに？）  
きょんとした。  
陽は温かく俺達を照らしている。人々の幸せそうな笑みの中で、俺と直樹だけが夜へ向かって歩いていく。  
直樹のことはぼんやりと考える。

俺は孤児だった。  
俺が育てられた園の園長は、世に珍しい世捨て人風の老人で、身寄りのない俺達をそれなりに親身に育ててくれた。

園には俺より小さい子供もゴロゴロいたが、園長には、彼の生き方に惚れ込んだ出資者がいて、園はまあまあの水準を保ち、俺達はひねくれている暇もなく、遊び、喧嘩し、そして成長した。

奇妙で不思議なヘンクツ老人は、俺が大学に入る前にこの世を去り、子供達はバラバラになって――それぞれ行き先を一人一人見つけておいたのは、何か思うところがあつたのだろう――社会に紛れた。

そうだ、周一郎ぐらいの奴は一杯いた、年齢的にも、性格的にも。  
なのに、俺はどうしてあいつにだけ、これほど魅かれたんだろう。  
始めは、あんな子供が、朝倉家のいざこざを耐えているのに驚いた。話すうちに、その目が時々、ほんの時々、哀しそうにたゆとうのを知った。ほんのひとかけら、驚くほどの脆さを冷たい仮面の下に見つけ、その仮面が俺の前で幾度か外れるのに気づいて、手を差し伸べて声をかけずにいられなくなった。

ほんの少し、もうほんの少しだけ踏み込めば、こいつは心を開くんじゃないか、そんな気がして、見捨てておけなくて……。

（繋がりに……）  
俺と周一郎の繋がりは何だろう。  
兄弟のようでもある、相棒のようでもある、他人のようでもあるし、身内のようでもある。  
手を伸ばせば届く距離にしながら、あいつはいつも手を伸ばさずに、ぶいと背中を向けてしまう。俺の伸ばした手は宙に浮いたまま、舌打ちをしながらも、俺は周一郎に手が届く距離まで歩みよらずにはいられない。

（きっと、それは）  
肩を叩きさえすれば振り返るとわかっているからだ。ほんの少しのきっかけさえあれば、あいつの本音が見えたとわかっているからだ。

けどそれを、どんな繋がりとさえいえるか？

「……わからん」

「……」

俺の答えに、直樹はふいと足を止めた。  
「わからないけど……なんかこう……繋がってるんだ」  
じっと俺の顔を見つめていた直樹は、唇の端でくわえた煙草の灰が革ジャンに落ちるのを払って、

「そりゃ結構なことだ」  
皮肉めかして応じ、再び歩き出した。そっけなく前を行く背中に、何となく、  
「…お前は どうして綾野の手下になんかなったんだ？」

尋ねてみる。

「オレ……かあ」

ひょい、といつものように肩を竦めてみせ、直樹は答えた。  
「別に食べ物が手に入りゃ、それで良かったけどな。……綾野の悪の程度にも惚れてたかな」

「周一郎の身代わりは？」

「……この前の冬、初めて朝倉周一郎を見た。子どものくせに妙に大人びた目の、隙のない奴だった。オレ達の視線に気づいたようにこちらを向いたときは、さすがにどきとした」

まるで何かを読み下すような妙に堅苦しい声でつぶやいた後、直樹は唐突に、にやにや笑いを広げた。  
「ところが、その側に、いやにドジな奴が居やがるじゃねえか？ おまけに、そいつと話す時だけ、周一郎の表情が和らぐ。ほんの一瞬、周囲に対する警戒を忘れたように無防備な顔になる。オレは確信した、こいつはうまく行くぜ、って」

あれ？

思わず眉をしかめる。  
何だかどうもこう、直樹の口調が一定していないような気がする。文章を読み上げるような調子と、いつも通りのふさけた口調が入り交じっているようだ。

でも、なんでだ？

「まあ、こうなりゃ、あのドジな奴ぐらい騙すの、わけねえや、と思って身代わり決行、ってわけだ」  
それを確かめる前に、直樹の口調は安定した。短くなった煙草を指で弾いて道路に捨て、次の一動作で踏み

消す。同時に半身振り返って、  
「そうだ、そんなに恋しいなら、周一郎のまねでもしてやろうか？」  
悪戯っぽく瞳を光らせる。  
「未だに体によくなじんでるぜ？」  
不敵に笑んだ唇が、次の瞬間、きゅっと賢そうに締まった。止めるという前に、あっという間にイメージが変化する。  
「滝さん、どうしたんですか？」  
淡々として、そのくせ気遣う声。  
「そんなにしょげないで下さい、心配になります」  
けれど、絶対あいつが口にしない類のことば。  
気持ち悪い。  
思ったとたん、俺は勢い良く直樹の横っ面を張り飛ばしていた。  
「つうっ！」  
「わ！」  
慌てて右手を左手で掴む。おろおろして周囲を見回す。人通りが少なくなったとは言え、不審そうな目で人々が俺達を眺めていく。  
「…ってえ、なあ！」  
あまりの意外な状況に、しばらく我を忘れていたらしい直樹が、突然喚いた。  
「なんだよ！ あんたがえらくしょげてっから、元気づけてやろうと思ったのに！」  
ギラリとこちらを睨みつけた目に赤面した。  
自分でも、またこれほど『過敏な』反応をしてしまうとは思わなかったのだ。  
「わ、悪かった」  
急いで謝る。  
そりゃ、今のは誰が見たって俺が悪い。  
「そんな気はなかったんだが、つい」  
「つい、で叩かれちゃ、たまんねえよ！」  
ふてくされる直樹に必死に弁解する。  
「いや、その、お前が嫌なんじゃなくて……つまり、その、そういう台詞は…偽の周一郎、つまりお前は直樹で、つまり」  
「どこが『つまり』だよっ！」  
苛立った相手に思わず大声で言い返した。  
「つまり、いくらそっくりでも、お前は周一郎じゃないんだ！」  
「……」  
毒気を抜かれたように、ぼかん、と直樹は口を開け、やがて肩を竦めた。  
「……やってられねえ……」  
赤くなった左頬を、手の甲で撫でながら、直樹は背中を向けながら吐き捨てる。  
「あんた、鈍感すぎ」

数十分後、大沢はうってかわって不機嫌な表情で、相手の顔を凝視していた。  
外の通りを歩いていた温和な社会人風はなりを潜め、裏道に片足突っ込んでいることが明らかな冷やかさが漂っている。  
「ずいぶん慣れてるなあ」  
俺は直樹の様子に少々感心していた。  
普通の繁華街ではなく、ちょっと静かな路地にある『桜樹』という店、品揃えは喫茶店だが、当たり前の喫茶店にしては出入りする人間達の目が鋭すぎる。夜になってもパブ形式には変わらず、店の中には物憂い紫煙とコーヒーの香りが漂うのみ。直樹はここの常連だとかで、俺にサングラスをかけさせると、先に立って店に入った。  
「そりゃそうだろ、大沢はこの店をいつも使っているんだぜ」  
「いや、お前の事」  
「オレ…？」  
にやりと直樹は不敵に笑って、コーヒーカップを覗き込んだ。一瞬、きゅ、と閉じた口元に少し寂しさが漂ったように見えたが、すぐにぱっと目を上げる。  
「前から知ってたしな。ここが大沢のよく来る店だとわかってからは、ずっとマークしてた」  
「お由宇の指示か、それ？」  
「そ」  
頷いて直樹は大沢の相手に目を据えた。  
暮れた日は、人恋しさを呼び起こす。人々が一人二人と近くの店に入っていく。けれども『桜樹』には人が増える気配はない。  
薄暗い照明の下、一癖ありそうなマスターは表情のない瞳を時々ドアの方へ向け、『桜樹』と金文字の入ったガラスの押し戸が、鉄壁で自分達を守っているのだと言わんばかりに薄い笑みを漏らす。微かに流された音楽は、話し声をうまく溶け込ませて、店は妙なざわめいた沈黙に満ちていた。  
俺も、直樹の視線を追って、大沢の方をそっと見つめた。  
サングラスを通して眺める世間は、鈍いトーンの光にたゆとうような感じで、誰もがセピアがかった仮面を被っている、さながら音楽のない仮面舞踏会だ。  
（あいつはいつも、こんな感じで外を見ていたんだな）  
思い出すともなしに、周一郎のことを考えた。  
（何もかもがセピアの闇に沈む……）  
そして、その薄暗闇の視界に対して、ルトは色鮮やかな世界を捉える、激しく移り変わる人々の本音を、隠された笑みの裏を、人の想いの光と影を。  
（俺も同じように見えていたのか？）

仮面を被った道化師のように。  
(他のやつと同じように)  
サングラスを通した人の顔は、どれもこれも似たように見える。どの笑顔も形だけの虚ろな笑みに、どの怒りも体面を守るだけの中身のない怒りに。  
(俺もそんな風に見えて)  
だから、周一郎は黙って逝ってしまったんだろうか。  
「ん？」  
肘を突かれ、我に返る。  
大沢の様子が厳しいものになっていた。どうやら言い争いになっているようだ。相手の男、五十歳前後の平凡そうなサラリーマンも難しい顔になっている。  
それでも、互いの声が店内の音楽を破るほど高くないのは、よほど、こういう所での商談をし慣れていると見える。が、どうしたはずみか、ふっと大沢の声が、一瞬途切れた音楽の合間を擦り抜けてきた。  
「…モレリー・コレクション…」  
はっとしたように声を落として、大沢は周囲を見回した。  
ぼんやりとそっちを見つめていた俺と、まともに目が合う。大沢の目がぎらりと光って、思わず首を竦めた。穏やかな紳士然とした容貌に殺気が通り、唐突に席を立つ。  
「っ」  
こちらへ来るのかと思ってひやりとした俺に、それ以上一瞥も投げず、大沢はゆったりとした足取りでカウンターの隅まで歩き、携帯を開いた。  
「なんだ…」  
どこから電話がかかってきただけか。  
はっとしたのもつかの間、ちちちと軽い舌打ちが漏れるのに、直樹に目をやる。  
あくまで静かな落ち着いた顔でコーヒーを飲んだ直樹は、伏せた視線をじっとテーブルの上、俺の手のあたりに注いだまま呟いた。  
「まずいな」  
「え…？」  
直樹はしばらく全身で大沢の気配を探っているようだったが、流れるような自然な動作で立ち上がった。  
「出よう」  
「？ 大沢は？」  
思わず尋ねながら、それでも慌ててレシートを掴む俺に、憐れむ視線を投げて、  
「死にたいなら見張ってるよ」  
背中を向けて店を出ていく。  
「死ぬ？」  
後を追いつつ問いを繰り返すと、  
「もっと、ちょっと遅かったような…気もする……が」  
店を出て数分、直樹は唐突に立ち止まった。闇を透かすように、静かに周囲に目を向ける。つられて俺もあたりを見回す。  
「あ…れ…？」  
いつの間にか、俺達は数人の得体の知れない男達に取り囲まれていた。

## 6.法の網の目

「……大沢さんの人たちかな？」  
妙な沈黙の漂う中、ぽつりと直樹が尋ねた。不敵な笑みを浮かべて、ぐるりと回りを見回す。男達は無言で一步、詰め寄ってくる。チンピラ風、というのではない、どこにでもいそうなサラリーマンのように見えるのが、一層凄みがある。

「！」  
無言で飛びかかってきた一人を、直樹が平然と躲す。

「うわ！」  
流されてたたらを踏んだ男がこっちへ来るのに、無我夢中で両手を握って突き出すと、幸運にもどちらかが当たったらしい。げ、と呻いてよろめきながら、それでも脚を振り回してくる。飛び退くなんて器用なことが俺にできるわけがない。もろに脚蹴りをくらってひっくり返り、踏まれかけて危うく避けた時には、既に乱闘まった中だった。

「ひゅ！」「わ」「ぐっ！」「ひえ！」「ぎゃっ！」「うわわわ…」  
男達の苦しげな悲鳴はもちろん直樹が生み出したもの、続いた情けない声は、巻き込まれかけて必死に逃げている俺の声、よく時代劇の殺陣で主人公に一人ずつ斬り掛かってくるという光景を見るが、あんなふう順序良く来てくれるわけもなく、地面を這いずり回りながらただただ必死に逃げているのが、時々直樹への攻撃をしかけた男の脚を狙って突っ込んだ状態になったりする。

けれど、それももうぼちぼち限界だった。  
「滝さん！」  
凜と直樹の声が響いたのは、左頬に見事なストレートをくらった時で、ぼやけて揺れる視界でそちらを見ると、直樹は魔法のようなフットワークで男達の攻撃をかわしながら、じりじりこちらへ近づいてきていた。殴り掛かった男のこぶしを身を沈め、傾けて避け、背後から殴り掛かった相手の鳩尾に肘鉄を入れて倒し、斜めから突進してきた男は寸前に身を翻し、重い音が響き渡った後には三人同時に地面に沈むという華々しさだ。しかも、呻いて体を起こそうとした最後の一人の顎を靴の踵で蹴り飛ばす、というおまけまでつけている。猫科の野生動物が二足歩行していたら、こういうやり方で自分からほとんど仕掛けず、相手の力だけで相打ちに持って行って擦り抜けてくるんじゃないか。

「すげえ…」  
「だいじょう…」  
紅潮した頬に薄笑いを浮かべて呼びかけてきた声、最後のぶ、は雷のように轟いた爆音に消えた。背中からいきなり照らされたシルエットになった直樹の姿、振り返って相手を確認していたわけではないだろう、それでも駆け寄ってきた直樹が的確に突っ込んで来たバイクの進路から俺を突き飛ばす。

「危ないっ！」  
「ひえいっ！」  
今の今まで俺が立っていた場所を削るようにバイクが通り過ぎていった。だが、少し前方ですぐにターンして、再び戻ってくる。

「走るんだ！」  
俺と一緒に転がった直樹が服を掴んで怒鳴った。  
「わかった！」  
慌てて起き上がるが、かたかた震えた脚がなかなか言うことをきかない。先に立って走る直樹の革ジャンをヘッドライトが白く灼き、俺の視界を眩く光らせた。すぐ後ろから来る重量感、耳を叩きつける轟音、追ってくる、追ってくる。

「こっち！」  
直樹に続いて細い路地に飛び込んだ。一瞬だけ遅れて、俺の踵の外側をタイヤが駆け、気配を唸りで断ち切っていく。直樹はなおも走り続ける。ずきずき痛む左頬、何だか歯がぐらぐらするのは気のせいかな。まっすぐ前に見えてきた路地の出口、直樹が安心したように飛び出しかける、だが。

「っっ！」  
体を半身出しかけた直樹が歯を食いしばり、片目を閉じて精一杯の早さで身を引いた。ウワン、と叫んだバイクが、直樹の髪の毛を掴もうとするように伸びた腕とともに、路地の出口の外を駆け抜けていく。あっ、と小さな悲鳴が上がって、直樹が腕を抱えて壁にもたれた。

「直樹！」  
「擦っただけ」  
に、と笑った顔は白い。  
「囲まれちゃったみたいだな」  
静まり返っていた路地に、大型バイクの重い唸りが響いていた。どの方角からとも言えない、逆にどこからでも聞こえてくるような、腹をえぐっていく音。  
直樹はだらりと垂らした左腕を軽く右手で押さえている。  
その袖口から一筋、赤黒い糸が下へと滴り落ちるのにはっとした。

「直樹！」  
「え？」  
「どこが擦っただけなんだ！」  
「…ああ」  
今は擦っただけさ。  
「それで傷がちょっと開いて」  
青ざめた頬にふてぶてしい笑みを押し上げながら、直樹は応じた。額に浮いた汗が次第に範囲を広げる。

「！ 事故の、か！」  
思い出した。  
こいつはバイクで事故ってたのだ。  
慌ててポケットを探り、一、二週間洗ってない気もするハンカチを見つけた。

「手を貸せ」

「いいよ、すぐ止まる」

「貸せったら貸せ！」

思わず怒鳴る。

どうして、この手の顔の奴はすぐ意地を張るんだらう。

(ああ、こいつは整形してたんだっけ)

そうだ、もう一人の意地っ張りは、もうとっくに。

脳裏を掠めたその思考に胸が詰まった。革ジャンから腕を抜き、渋々差し出した直樹から目を伏せ、歯をくいしばる。

革ジャンの下のカッターシャツとセーターが赤黒く濡れている。セーターを脱がせ、カッターシャツの上からハンカチを縛りつける。

「痛むか？」

「慣れてっから、どうってことねえよ」

低く答え、直樹はセーターと革ジャンに手を通した。

「どうする、かなあ」

バイクの音はぐるぐると周囲を囲みつつ響き続けている。

この騒ぎを聞きつけて、警察が来てくれないだろうか。

「冗談じゃねえよ」

漏らしたつぶやきに、じろりと直樹は俺を睨みつけた。

「あんた、俺達のやってること、わかってんのか？ 法律の内か、外か、ぎりぎりのところでやってんだぜ」

「…」

そりゃそうだ。

突っ込まれるとこちらは一言もなかった。

社会的には綾野は死んでしまっているのだし、周一郎の仇討ち気分になっているのは、俺ぐらいのものだらう。

。「ほんとおかしな人だな。マジで人のことを心配するくせして、自分のことにはいい加減でさ」

皮肉めかして肩を竦めた直樹の顔色は、時折閃くバイクのライトに交互に染められ、以前より青くなってきているようだ。このままではいずれ身動き取れなくなる。いっそ、もっと派手な騒ぎになってしまえばいいのかもしれない。

(騒ぎになって、警察を呼ばずにはいられなくなるような……？)

警察に捕まって困るのはお互いさま、けれど奴らの方が早く逃げるんじゃないか？

周囲を見回して、水色のポリバケツが幾つか目についた。周囲にある飲食店のゴミをいれておく類だろう。

「おい…何を…」

生ゴミがぎっちり入ったポリバケツは結構重い。臭いを堪えて、ずるずると引きずり集めてくる。直樹の声を無視して、路地の入り口に陣取る。ポリバケツを蓋をしっかりと閉めて、横に寝かせ、一方の壁がヘッドライトで照らされた矢先、力の限り道路に向かって蹴り出した。

キキキッ！ ドォン！ グワッシャッ！

「っ……っ！」「わ…あぁっ…！」「くそおっ！」

怒号が飛ぶ、悲鳴が響く。

半身ほど路地から乗り出してみると、オートバイが数台絡むようにして止まり、中には転がっているものもあるのがわかった。しかも、ポリバケツを破壊したらしく、辺りに散乱する生ゴミ塗れ、悪臭とべたべた汚れが一気に撒かれている。

「やっ…！」

たね、と続けたかったが、すぐに腕を引っ張られて後ずさりした。耳元に口を近づけた直樹が叫ぶ。

「あんたもたいがい、無茶な人だな！」

ほら、来たぜ！

直樹が促すまでもなく、バイクに乗っていた男が俺達に気づいて走ってきた。呑気にそちらを眺めていた俺に向かって、気合いとともに拳を繰り出してくる。

「わ！」

その瞬間、足下に散っていた生ゴミで滑った。どすっと尻餅をついたとたん、踏ん張っていた両足が蹴り上がり、相手の脚を引っかける。俺の頭上で相手が呻いてひっくり返る。

落ちてきた男の体を、俺はかろうじて避けた。

「今のうちだぜ、滝さん！」

「ああ！」

俺達は逆方向へ向かって走り出した。

「前！」

「っ」

正面から走り込んできた男を、瞬時の当て身で直樹が倒す。

「そっちだぞ！」「回れっ」「逃がすな！」

叫び声が飛び交う中、俺達は走った。

法治国家日本なんて、誰が言った。世界に冠たる日本警察は何をしてる。息を切らせながら考える。これだけの物音、これだけの騒ぎ。なぜまだやってこない。曲がる角、流れる路地、慌てて逃げ去る野良猫。

二人して細い路地へ再び逃げ込んだ時には、もう話すどころじゃなかった。荒い息を吐きながら、お互いの顔を見るときもなく見つめて、同じことを考えているのを知る。

(いつまでもっ？)

「ふ、うっ」

深い息を一度吐いて、すぐに再び喘ぐ呼吸になりながら、直樹は膝に両手をついて前屈みになり、体を支えている。左手の甲に改めて紅が糸を引き始めている。

「大丈夫か？」

乱れる呼吸を何とか整えて、肩を上下させている相手に声をかけた。呼びかけに上げた直樹の顔に、まだ不敵な笑みが残っているのにほっとする。

「夜の方が調子…よくってね」

にっとう直樹は笑った。

「ウワン、と遠くでバイクが唸る。

「ここもいずれ見つかわっちゃうな……は、ご大層なこったぜ」

ひねた口調でぼやきながら身を起こす。

「ま、綾野と日本支部にとっちゃ、起死回生の機会だからな」

「キシカイセイ？」

漢字が思いつかない。きっと脳味噌が前代未聞の酸素不足に陥っているんだろう。

「そっ。つまりさ……」

直樹の話すところによると、綾野の失敗は組織全体に響くものだった。綾野一人失脚するのならまだしも、周一郎という敵を引っ張り込み、あまつさえ公的な警察権力の介入を呼び込んだ。壊滅状態になりかけた組織は、綾野に責任を取るように詰め寄り、仕方なしに彼は大勝負に出ることにした。

モレリー・コレクションの密輸だ。

「もれりー・これくしょん？」

「……あんたが言うと、珍獣大紹介みたいな感じがするな」

「ほっとけ」

「モレリー・コレクションって言うのは、無名だが一部のマニアの間で異常に高値で取引されているモレリー一家のコレクションで、未来へ残す国家的な美術遺産の一つとして注目されているんだ。ただ、モレリー一家の当主はひねくれた老人で、今回全てのコレクションを放出するにはするが、美術館関係者と外国人には一切売らないと言いつ出した」

直樹はひよいと肩を竦めた。

「もちろん、そのままでは、コレクションは美術愛好家の眼に触れることなく、世界中に散ってしまう。そこでじいさんは少し譲歩したんだな。コレクションの買い手が決まった後、主要各国で各々一週間前後の展覧会を行う、責任はモレリー一家のもとにおく、と。この巡業旅行を狙ったのが綾野で、展覧会の間に偽物と取り替えて売買してしまおうって魂胆らしい」

そんな危険なんか、深く考えなくても想像つくだろうに、金持ちの考えることはわからない。

「まあ、自分達の手に入れたものを見せびらかしたい、羨ましがる周囲の顔を見てやりたいってとこじゃねえのか」

「ふうん……」

「そこに、罨を仕掛ける」

再び遠くの方で響いた爆音、ぽつりと呟いた直樹の目が、一つ向こうの路地を駆け抜けた光条を追った。

「罨か……」

お由宇の謎めいた微笑が脳裏を過った。

確かに綾野にとっても大勝負だろうが、こっちにとっても大博打なんじゃないだろうか。へたをすれば、こっちが強盗団に仕立て上げられかねないんじゃないだろうか。いや、それだから、あのアンリとかいうのが関わってきているんだろうか。

ふいに、路地を眩い光が照らし出した。

「居たぞ！」

「滝さん！」「ああ！」

俺達は再び走り出した。それでも、どうしても怪我のせいで一歩遅れた形になる直樹に光が迫る。

「くそっ」

息を切らせながら前をみる、と。

「直樹！」

思わず叫んで後ろを振り返った。前方から突っ込んでくる一台のバイク、その背後に乗用車のヘッドライトらしいものも迫ってくる。思い出したのは京都の竹林、車まで出して狩り込もうというのか。

振り返った視界に直樹が脚をふらつかせるのが映る、その真後ろにライト……。

「っっ！」

俺は直樹に飛びかかった。精一杯伸ばした手で直樹を突き飛ばす。直樹が跳ね飛び、俺はライトの進路に片足残して道路に転がる。

「！！」

轢かれる。

と、前から来ていたバイクがきしり音をたてて斜めに突っ込んで来たかと思うと、俺を轢こうとしていたバイクと俺の間に割り込んだ。突っ込んできたバイクが間一髪、進路を逸らせて急カーブし、手前の路地へ飛び込んで走り去る。

「志郎！」

ぼかんとしている俺に、お由宇のきびきびした声が飛んできた。今まさに轢かれようとするのから助けてくれた乗り手が、バイクを止めてこちらを見ている。フル・フェイスのバイザーを跳ね上げた隙間から、お由宇のくっつきりした顔立ちが覗いていた。

「早く！ アンリの車に乗って！」

振り向いたワイン・カラーの乗用車の窓から、顔を出したアンリが叫ぶ。

「ハヤク！ 滝サン！ ナオキ君！」

お由宇がアクセルをふかし、鮮やかなターンを決めてバイク連中に突っ込む隙に、俺と直樹はアンリの車の後部席に転がり込んだ。

「掴マッテ！」

片目でウィンクしたアンリがハンドルを切り回し、一気に加速する。背後から獲物を捕らえ損なった悔しさに唸るバイク音、追いかけてようとしているのをなおも牽制したらしいお由宇のバイクがすぐに追いついてくる。入り組んだ路地のはずだが、くるくると迷路を擦り抜けるように走り抜け、アンリとお由宇は見事に脱出を成功させた。

「大丈夫デスカ？ …血ノニオイ……ケガデスカ？」

アンリがバックミラーを見ながら尋ねてくる。ほっとしたのと、車の振動で眠くなりかけていた俺ははっとした。

「あ……あ、そうなんだ、直樹が」



「救急箱、借りてるぜ、アンリ」

直樹は既に革ジャンとセーターを脱いでいた。車の後ろにあった箱から、包帯とガーゼを取り出し、手慣れた様子でまくり上げたシャツの下の傷に巻き付け始める。生暖かい血の匂いに軽く眉をしかめたアンリは、ぼつりと呟いた。

「ヤッパリ…大沢デスカ」

「うん、大沢だ。モレリー・コレクションのことは本当らしいぜ」

「トイウコトハ…」

アンリと直樹の、よくわからない会話を聞きながら、俺は車の側を擦り抜けて先へ走り出していくバイクを眺めた。

（あれは…お由宇だったのか）

周一郎と和野岬へ行った時、二台のバイクの背後から追ってきていたライダー、止まれ、と合図を送ってきていると運転手が言った。それを、周一郎は振り切るように命じた、おそらくはお由宇だとわかっていただろうに

。（お由宇は周一郎のやろうとしていることを知っていた…だから止めに来た……でも）

周一郎はその手を振り切った。

笑みが脳裏を横切っていく。切ないような、淋しいような……薄々殺されることを予想しながら、救いの手を振り切った者の笑み。

（そうせざるをえないように……俺が、追い詰めた）

シートにもたれる。

あの日、周一郎は何を考えていただろう。今の俺と同じように車のシートにもたれ、窓の外に近づく救いを拒否して、隣に自分の命を狙う男を置き…。

「滝さん」

「ん？」

呼びかけられて我に返る。

手当を終えたらしい直樹が肩を竦める。

「悪いけど、肩貸してくれよ。疲れちゃった」

「あ、ああ」

「ふう」

ためらいもなく俺にもたれかかり、疲れ切っていたのだろう、やがて微かな寝息をたて始める直樹を見つめる

。この事件が始まった日、お由宇からの手紙が来た日を思い出す。高野の声……「よっぽどあなたに気を許していらっしゃるんですね」……背中を向け合ったまま、けれども同じ場所に居て、一つの事件に立ち向かうはずだったあの日……あの場所に居た周一郎を、俺は永久に失ってしまった。

（何が…間違っていた？）

俺の自覚、だろうか。

俺が、周一郎にとって、どういう存在なのかがわかっていなかったから？

いや、周一郎が俺にとって、どういう存在なのかがわかっていなかったからだ。

「…ん…」

直樹の安らかな寝息に涙ぐみそうになった。

（もっと、ゆっくり眠らせてやればよかった）

寝起きの慌てる顔を見たいなぞと思わないで。

せつかく得た安眠を、守ってやればよかった。

「……ちえ」

情けない。

ああしてやればよかった、こうしてやればよかったばかりだ。

「アチラモ、ナリフリ、カマワズデスネ」

「え？」

響いたアンリのことばに視線を上げる。

「『彼』ニシテハ、強引ナヤリ方ダト、由宇子サンガ言ッテマシタ」

「ふうん」

「イツモ、法律トハ上手クヤッテイタノニ、今回バカリハ、法律カラハミダスシカナクナッタヨウネ、ト」

「へえ…」

で、お前はお由宇とどういう関係なんだと尋ねようと思ったが、ただでさえ落ち込み気味のところにダブル・パンチの気配濃厚、それ以上は突っ込まないでおく。

「……コワイ人デスネ」

しばらく黙っていたアンリが再び話し出す。

「お由宇が？」

「彼女モ、コワイ人デス。敵ニシタクアリマセン。コッチノ意図ヲ伝エル前ニ、ソレニ応ジテ行動サレマスカラネ……刃物ミタイデス」

「そうかあ…？」

確かに不思議な女で、悪魔のように頭がいいとは思いますが、こわいと思ったことはない。

と、アンリがバックミラーの中からくすりと笑った。

「ボクガ『コワイ』ト言ッタノハ、アナタノコトデスヨ、滝サン」

「え？」

余りにも意外な応えに驚く。アンリがくすくすと楽しげに笑った。

「アナタハ、何ノ意図モナシニ、コチラノ本音ヲ引き出シテイッテシマウ。ツイ、本音ヲ言ッテシマウ。アナタト話スノハ、大変ウレシイ……ケレド、ボクラ……人ノ裏バカリ見テイル人間ニトッテハ……大変コワイ人デス……味方ニスルニハ、不安……」

アンリの顔が、少し前までの愛想良さを捨てていた。酷薄に光る青い瞳、鋭い視線をこちらに向ける。

「……カト言ッテ、敵ニナッテホシクハナイ……モシ、アナタガ敵ナラ、ナントカシテ、助ケタクナルデシヨウ……ナントカシテ、自分ノコトモ心配シテモライタイ……ケレド、ソノ代償ハ本音……大変、困リマス……」周一郎君ノ気持チ、ワカリマス」

アンリは一転、柔らかで渋い苦笑を見せた。  
「モシ、許サレルナラ……友人ニナッテホシイト思ッテシマウ。コンナ、自分デモ、許サレルナラ…」  
憂うような表情が、にっと笑みに崩れた。  
「アア…ホラ、ネ…ツイ話シテシマウデショウ？」  
「友人って……俺は特に友達を選ばないけど」  
そのせいで宮田なんかがやってくるんだらうな、きっと。  
溜め息をつく、ふっとアンリは笑った。その笑みが、どこか周一郎の微笑に似ていてぎくりとする。  
「ソウ……デモ、自分ハダメジャナイカト……思ウ時ガアルンデス、アナタミタイイナ人ニ会ッテシマウト、ネ」  
きゅっ、と目元に軽く皺を寄せて、アンリはウィンクした。魅力的で華やかな、女性ならばくらしりするよう  
な笑顔、けれどどことなく、何を考えているのかわからないような笑みに戻る。  
「由宇子サンハ、本格的ニ綾野ヲ追イ詰メルツモリデスヨ。大丈夫デスカ？ 滝サン」  
大丈夫かと確認されるのは、これで何度目だろう。それでも。  
(何とかなるさ)  
胸の中で呟く。  
踏み込めば、変わるものがあるのを、俺は知っている。踏み込んで、終わらせなくてはならないものがあるの  
も知っている。  
だから。  
(これが終わったら)  
俺は朝倉家を出て行こう。  
時々墓参りに行くことは許してもらって、俺は俺の生活を始めるんだ。  
(淋しいだろう)  
亡くしてきた大事な人同様に。きっと数ヶ月は、周一郎の姿を探しちまうことだろう。  
それでも、俺はもう一度、自分の生活を始める。  
(「滝さん」って呼ぶ奴がいなくなる)  
バイトを始めなくちゃならないな……幾つ掛け持ちするかな。  
(あのレンガ塀ともお別れだ)  
しばらくはお由宇の所へ転がり込んでいようか。  
(墓の下は寒いだろう…)  
下宿を探そう……コートをカタに取られないような所を。  
(ルト…どうするんだろ)  
大丈夫だろう、何とかやっていこう。  
そして俺は新しい生活を始めるんだ。  
窓の外の流れ去る景色を見つめた。  
直樹は眠っている。アンリも黙って運転し続けている。  
そして俺は、これからの生活を思い。  
俺は。

「…くそっ」

そんな風に割り切れりゃ、誰も厄介事に巻き込まれるもんか！

## 7.モレリー・コレクション

「もれり一家ハ、知ル人ゾ知ルこれくた一デス。代々、一風変ワツタ趣味デアツタ当主ガ、自分コソハ一流ノこれくた一デアロウトシテ、腕ト財ニモノヲ言ワセテ、珍シイこれくしょんヲ集メテキマシタ」

アンリの穏やかな声が、お由宇の家の居間に響く。

あの『追いかけっこ』から一週間近くが過ぎた日の午前のことだ。

「幸いに、志郎達の陽動作戦もうまくいったみたいね。こっちの仕事がやりやすかったわ」

お由宇がコーヒーを配り、俺、アンリ、直樹、理香、そしてお由宇自身もソファにそれぞれ納まってから、アンリは綾野への罠について話し始めた。

「モチロン、熱心スギルこれくた一ノ常トシテ、必ずシモ合法的デナイ方法デ集メタこれくしょんモアリマス。マタ、これくしょんソノモノガ、一般的ナ意味デノ価値ガナイ物モアリマス」

「何か…その…おかしな絵なのか？」

俺の問いに、アンリは微笑を含ませて答えない。

「ソノウチ、ゴ説明シマス。トコロデ、ソウイウ意味カラ、もれり一家ノこれくしょんハ、これくた一ノ間デ、一種、異様な人気ヲ勝ち得ルコトニナリマシタ。一応、よーろっぱデこれくた一ト自称スル限り、もれり一・これくしょんヲ知ラナイノハ『モグリ』デスシ、ドンナニオ金ガカカッテモ、ドンナニ苦勞シテモ……言イカエレバ、ドンナ手ヲ使ッテモ手ニ入レタイト、願ッテイルこれくしょんノーツデス」

「その、モレリー・コレクションの中で、特に代表的な『モレリー・コレクション』、一般的に『モレリー・コレクション』を呼ぶ場合はそれをさすのだけど、無名画家達の『木影』の連作が、今度売りに出された…というわけ」

お由宇の話によれば、それは『木影』をテーマに描かれた十数作品で、タッチも色彩感覚も様々、共通しているのは後世に名を残さずとされたのに若くして亡くなったり、種々の事情から筆を折らざるを得なかった実力派という要素だけ、というコレクションだそうだ。

「大戦や内戦、政治圧力やテロ、そういったもので命を落とした画家も含まれている……遺族にさえ渡されることがなかった作品群、国家間の取引に使われるのを嫌がって作家自らが焼失させることを望んだ作品もある……門外不出の一品揃いという噂よ」

お由宇はこくりとコーヒーを呑み込みながら、薄く笑ってみせた。何か良からぬ事を考えているような、一物ありそうな笑みだ。

「もう聞いたかも知れないけど、まあそういう経過もあって、モレリー当主は国家遺産として保管したいという美術館関係者は信用していない。また同じく、それぞれの画家がその人生をかけて作り上げた宝石のような作品を、商取引に使うことしか考えないような外国人にも売買したくないと考えているの。秘められ隠されれば見たいものよ。世界のコレクターは何とかなして一目なりとも見たいと願っているし、できればその一品なりと手に入れたいとを考えている。ひょっとすると、今世界的に有名な画家の、無名の頃の作品があるかも知れない。そうなれば、美術界にとっては一大発見よ」

そこに綾野はつけ込んだ。そういうコレクター達を相手に、綾野の言い値から始めるオークションを開催しようと言うのだ。

「綾野の計画はこうよ」

お由宇は指先でテーブルに小さな円を書いた。

「美はつい先日、フランスで『木影』の連作のオークションが行われたの。それぞれに厳重な誓いをたて、転売禁止の制限を理解したうえで。そのうち『木影』『木の色』『木もれ陽の下』それに『木漏れ日と少女』、この四作はポール・ボウヌという南フランスの地主の手に落ちた。でも、このポール・ボウヌというのは綾野の息のかかった男……まさか、オークションで競り落とした絵を盗ませ、自分は贋作で満足するコレクターがいるとは普通思わないでしょうけど、ポールが愛しているのは絵ではなくてオークションで競り落とすという快感なの」

とんとん、とテーブルを突いた指が、円から離れる。

「モレリー一家の当主は、四日前、コレクションの世界各国展覧会への旅に出たわ。フランスを皮切りに、イギリス、スイス、ドイツ、アメリカ…日本へ来るのは三週間後だけど、その頃にはコレクションのほとんどが綾野の手によって贋作とすり替えられているでしょうね。世界各国で数枚ずつすり替えられていった絵はやがて綾野の下に集まり、オークションにかけられる」

「日本で？」

ぎょっとする俺に直樹が凄んだ笑みを見せる。

「ここじゃ、あいつは死んだことになっているからな」

「綾野を追い詰めるのに必要なのは、警察権力じゃないわ。彼が自滅するようにすればいい……つまり」

お由宇は冷やかな笑みを浮かべた。

「『彼の世界』で生きていけないように、信用を剥ぎ取ってしまえばいい」

お由宇の後を受けて直樹がさらりと言った。

「オークション参加者の中にはコルシカがらみも居たはずだ」

「こるしか？ ナポレオン？」

口調の冷たさにぞっとしたものを感しながら、思わずアンリを見る。

「Intermezzo Sinfonico」

柔らかな声で返されたのは外国語…しかも英語じゃない。

「は？」

「ゴッド・ファーザーよ」

お由宇が解説してくれて、ようやく気づく。

「え、えーと…あ、ああ！」

そうか、コルシカって、ナポレオンじゃなくて、マフィアの方か！

「結構デスネ。おーくしょんヲ潰シマスカ」

ふふふ、とアンリは楽しそうに笑う。優しい笑顔にちらつく殺気に首を竦めた俺は、続く直樹の声に振り返った。

「潰す？ 冗談じゃねえよ。オークションはきちんとやらせてやるさ。最後の最後までな。そして、お客さんに

はきちんとブツを持って帰ってもらう」

ヒュウッとアンリが口笛を吹きかけ、お由宇の視線に制してにこりと笑った。

「ソコマデ、ヤリマスカ、ヤッパリ」

「そうね。私としても、そのあたりまでは詰めた方がいいわ」

俺には話の焦点が見えなかった。

なぜオークションをやらせてやるのが綾野の信用を剥ぎ取ることになるんだ？　オークションが成功してしまえば、綾野は再び組織の中核として返り咲いてしまうのではないか？　言わば、オークションの成功自体が綾野の裏の世界でのパスポートになるはずだ。

俺が腑に落ちない様子を見ていたのか、お由宇が悪戯っぽい顔で尋ねてきた。

「ねえ、志郎、いくら何でも、モレリー・コレクションの売り出しがタイミング良すぎると思わない？」

「え…？」

ぼかんとする。奇妙な笑みを浮かべたお由宇が続ける。

「組織復興と地位の確立に懸命の綾野だもの、モレリー・コレクションの絶好の機会を逃すはずがないわ……多少の疑いは持っても」

「まさか……」

俺はごくん、と唾を呑んだ。

「その……モレリー・コレクションの売り出し自体が、綾野をおびき出す餌って言うんじゃないだろうな」

「その通り。たいした女性だろ、この人は」

直樹がいつもの癖で、肩をちょいと竦めた。ちらりとその直樹に視線を走らせたお由宇が、質問は、と言いたげに俺を見る。

「で、でも、どうしてそんな事ができるんだ？　まさか、そのモレリーとかがお前の知り合いとか何か…」

「あなたの知り合いでもあるでしょ、『彼』は？」

お由宇はコーヒーカップ片手に、アンリに合図を送った。

「アンリ…？」

「失礼シマシタ。アナタガ色々知ッテルト困ル時ガアルト、言ワレテマシタカラ。ボク、あんり・もれりートモ呼バレマス。でゅびえハ、母方ノ姓ナノデス」

「あなたってお芝居ヘタでしょ？　もし、綾野の手下に出くわして、何か訊かれたら、相手に隠し通せそうにないから、アンリには黙っててもらったの」

「お由宇！」

むっとして怒鳴ろうとした俺の頭に、ふっと綾野の手下に向かい合っている自分の姿が浮かんだ。闇の帝王のように冷やかな笑みを広げてかっこつけている綾野が、実は密かに張り巡らせた罠に向かってまっしぐらに走り込んでいると思ったら……だめだ、確実にしまりのないにたにた笑いになってしまう。

そんな俺の頭の中を見抜いたように、お由宇はにっこりと笑った。

「ね？」

「……うん」

「アンリは次期当主なの。モレリー氏は、元々綾野の遣り口を忌々しく思っておられたの。それで、息子から今度の作戦を持ちかけられた時、二つ返事で協力して下さることになったの」

「でも…せつかくのコレクションを売ってまで」

思わず呟く。

いくらむかつく相手をやっつけるためだからと言って、自分の大切にしていたコレクションが売り飛ばされていくことを同意できると思えない。それとも、金持ちってというのは、そこまで酔狂、いや、暇を持て余して退屈がっている人種なんだろうか。

と、どうしたのか、アンリはふいに奇妙な笑みを浮かべた。

「もれりー・これくしょん、ネ。確カニ、アレハ、モットモもれりー家ラシイこれくしょんデショウネ。ゴ心配ハ無用デス、滝サン。父モ、一度、アレヲ売りニ出シテミタガッタノデス。彼一流ノゆーもあデネ」

ますます訳がわからなくなった。モレリーのユーモアとモレリー・コレクションの売り出しとどういう関係があるというんだろう。

「あら、もう昼を過ぎてるじゃない。御飯にしましょ」

お由宇が時計を振り返りながら立ち上がった。いつの間にか空のコーヒーカップを集めて手に持っている。そのまま台所へ向かいながら尋ねてくる。

「食べて行くでしょ、アンリ？　理香さん？」

「ハイ」

「ん」

俺と直樹は計算済みらしい。手慣れた動作で五組の食器を用意し始める。

「むー」

どことなくすっきりしないまま、かと言って何を確かめればいいのかもわからないまま、お由宇の動きを眺めていると、ふあう、と小さなあくびを漏らして直樹が席を立った。

「午前中に起きることなんて、まずねえからな。昼飯ができたら起こしてくれ、ちょっと寝てるよ」

眠たげな口調に、はっとしたように理香がその腕にしがみついて一緒に立つ。

「じゃ、後で」

にやりと笑った直樹は軽く手を振り、理香を従えてドアの向こうへ消える。

「理香サンハ、彼ノ側ニイルト別人ノヨウデスネ」

「うん」

顔いて二人を見送っていた視線を戻し、俺を凝視しているアンリにどきりとする。

「な、何だ？」

「…イエ」

アンリは穏やかに澄んだブルーの瞳に微かな憂いを浮かべた。

「コノ仮面劇ノ結末ハ、ドウナルノカナ、ト思ッテ」

「仮面劇…？」

俺の脳裏を、リオのカーニバルの派手派手しい仮面がわさわさ揺れながら横切った。

「仮面劇って……何が？」

「それでね、志郎」

アンリが答える前に、台所から食器を運び込みつつ、お由宇が話しかけてきた。  
「実は一つ、あなたにお願いがあるの」  
「お願い？」  
「私の恋人になって欲しいの」  
「へっ」  
どん、と胸をでかい木槌で殴られたような衝撃がきた。  
「こ、恋人……っ」  
そりやお由宇は十分に美人だ。料理も上手いし、いろいろと面倒も見てくれるし、頭もいいし、それなりに親切だし、いやそういう意味では本当に突っ込みようのない相手だが。  
「お、俺のかっ」  
思わず聞き直す。だってそうだろう、お由宇に問題がないとしたら、こういう場合は絶対俺に何かあるか、相手が間違っているかに違いない。  
「そうよ、あなたが一番いいの、恋人役に」  
「…は？ 恋人…役……？」  
それはひょっとして。  
「えーとつまり、芝居、ってことだよな？」  
「他にどんな意味があるの？」  
「……いや、ないと思う、ないだろう、うん、絶対にない」  
ずるずる落ち込んでいく気持ちを必死に引き立てつつ頷いた。  
なるほどなー、恋人役。それならわかる、とってもよくわかる。わかってしまうあたりがもうどうにも情けないが、十分にわかる。  
「そっかー恋人役なーなるほどなーさすがだなー」  
「何がさすがなの？」  
「いやいいんだもう気にしないでくれ明日は雨に決まってるそういうことだ、で何で恋人役がいる？」  
訝しそうなお由宇の突っ込みを何とか流して尋ねると、相手は直樹が消えたドアに素早い一瞥を投げて、俺を振り向いた。きらきら光る瞳がとても楽しそうで、物騒に見える。  
「綾野が罠に落ちていくところ、見たくない？」  
「見たい！」  
即決で答える。周一郎を追い詰め、世界の覇者みたいに振舞うあいつが、どんなに惨めな顔になるのかは是非見たい。  
「オークションは、モレリー・コレクションが日本を離れフランスに着く頃に、綾野の持ち船、『マリー・ボネ』号の船上で行われるわ。名義はポール・ボウヌのものなんだけどね。船上の財界人のパーティという名目だから、パートナー同伴なのよ」  
ああ、なるほど、と改めて腑に落ちた。  
「オークションが終わった後、オークション以上の見物ができるはずよ」  
嬉しそうにお由宇は笑う。逆に俺は、財界人のパーティと聞いて気力が萎えてくるのを感じた。そんなものは見たことも食べたこともない。災難には喉から溢れるまで出くわしているのだが。  
「アンリは？ 彼ならびっぴりだろ」  
怯んだの半分で、多少いじけて答えると、お由宇は心底残念そうに首を振った。  
「彼はだめなの。私達がオークションを見物している間に、直樹とやっってもらう仕事があるのよ」  
「仕事？ ……じゃ、俺達の仕事ってのは、ひょっとして綾野の目を引きつけておくとかいう」  
「そう、陽動作戦、ね」  
俺は陽動作戦ばかりだ、と変わらず胸の中でぼやいたが、俺に仕事を任せるようなら、お由宇の作戦とやらもかなりいい加減だとは思ふ。  
「お昼できたわよ。直樹君達を呼んで来てくれる？」  
「わかった」  
俺はソファから腰を上げた。

数日後。  
お由宇の所へ行こうとした俺に、高野が一通の手紙を差し出した。  
「？」  
「滝様宛でございます」  
「あ、どうも」  
白い封筒、宛名には『滝様へ』と書かれているのみ、住所も郵便番号もない。裏返してみたが、差出人の名前もやっばりない。恥ずかしがりの娘から来たラブレターにしてはあまりにも殺風景な代物だ。  
「…これはやっばり……」  
何となく不安を感じつつ、封を切る。  
（あ・た・り、だ）  
『出かけられないことをお勧めする。その家が君にとって最も安全な場所だ』  
白い便箋にそれだけの文章が印字されている。何となく、大沢を思い出した。  
「高野、これはいつ？」  
「申し訳ございません、いつの間にか郵便受けに入っていました」  
監視カメラの映像を探せば、誰が投函したかわかるだろうが、身元がわかるような人間は使っていないだろう。ましてや、差出人が入れるわけもない。  
「ありがとう。ちょっとお由宇の所へ行ってくる」  
「かしこまりました」  
手紙をポケットに入れかけ、思い直して破り捨てる。  
もし、大沢が俺を見張っているなら、俺がうろろすることはそのまま陽動作戦の一部になる。あれやこれやと手配しているお由宇や直樹から、少しでも敵の目がそらせるかもしれない。だが。  
（お由宇のところへは行けないな）  
相手が直樹達の存在や居場所をどこまで知っているのかわからないが、わざわざはっきりさせてやることもないだろう。

門扉を出て、レンガ塀が遠ざかるに従って心細くなってくる。やあめた、と言って駆け戻りたくなる。

大体、俺はハード・ボイルド向きじゃない。敵の追及を知らながら平然としていられるほど図太くない。怖けりゃ震え、痛けりゃ泣く、普通の人間なのだ。断じて、お由宇やアンリや直樹や……周一郎のように、危険の中に飛び込んでいくのを日常生活や趣味にしたりしているんじゃない。

俺はいつも逃げ回っているのに、厄介事の方が挨拶をしにやってくる。俺はウィンクさえ投げないのに、事件が引き寄せられてくる。加えて、より面倒なことに、俺はその厄介事を完全に無視できるほど器用でも強靱でもない。毎度毎度、こてんぱんになるのを知っているのに、なぜか『俺も手伝いましょうか』なんてへらへら笑いながら応じていってしまう。

(マゾなんだろうか)

泣きたくなってきた。

またその厄介事というのが、電信柱にぶつかることから国際犯罪まで、品数の豊富なことこの上ない。そのうち惑星直列とか、世界の破滅とかまで引掛かってくるに違いない。

(そうになったらもう普通じゃないよな？ 呼吸する天災とか？ 動き回る迷惑とか？ 災難発生能力とか言われるんじゃないか？)

「はあ…」

深く溜め息をついた俺は、すうっとふいに側に寄ってきた深緑の外車にきょとんとした。するすると助手席の窓が開く。

「あの…」

「はい？」

呼びかけられて立ち止まる。窓からこちらを見上げた男は、俺の顔を眺めた後、

「失礼ですが」

「はい」

「滝さん、でしょうか？」

「は？」

通りすがりに道を尋ねられるんだと思っていたのに。

「な、何か？」

引き攣った笑いを浮かべて見下ろすと、相手はにこやかに笑みながら、助手席のドアを開けた。

「道を教えて下さい。佐野由宇子という人の家なんです」

「佐野？ ああそれなら…」

言いかけて戸惑った。

今こいつは俺のことを『滝さん』かと確認したよな？ なぜ知ってるんだろう、俺はこいつを知らないのに。しかも、お由宇の家を知っているとも確信してて、そこへの案内を頼んでいる。なぜこいつは、俺にそこまで『詳しい』んだ？

脳裏を掠めたのは、白い封筒、そういや、こいつがあの手紙の差出人だということもありえるわけだ。朝倉家を出てきた俺をずっと尾行してたってことも…。

途中でことばを切った俺を、なぜか面白そうに見ていた男は、ちらっとバックミラーに視線を投げたとたん、きびきびと命じた。

「こっちへ！」

「え」

あ、も、う、もない。助手席に引きずり込まれたとたん、近くの電柱にぶつかるような勢いで車が発進、加速する。

「なっとなっとなっ…」

「本当に聞いた通りの人だな」

運転席の男は苦みばした笑みを唇の端に浮かべ、横目で俺を見た。

東洋系にも見えるが、どこの国出身ともわからない、四十過ぎの男だ。カラーシャツにジャケット、ループタイにシャツに合わせたポケットチーフ、よく見れば嫌みがない程度に整った顔で、仕草も滑らかでスマート、かなり上流階級なんじゃないだろうか。ちらちらとバックミラーを見ながら、

「ちょっと振り回しますよ」

告げられたとたん一気に、安全ベルトを掴んだまま、ドアに押し付けられる。

「後ろの車、オオサワの手の人ですね」

流暢な日本語だったが、大沢という人名に微かな異国訛りがあった。ぎょっとして体を起こし、得体の知れぬ紳士然とした相手を見つめる。

「私が気になります？」

「はいとっても！」

「私の事はすぐにわかりますよ」

俺の元気のいい返事にくすくす笑った相手が続ける。

「それより、今はあの人達を何とかしなくてはね……何をやって、あんなに怒らせたのかな？ 警告でも無視しましたか」

「なんでそれを…」

つい尋ねかけて、慌てて口を塞ぐ。こいつだって、敵か味方かわからないのだ。

ふふふ、と妙な含み笑いをした相手は、小学生を諭すように首を軽く振った。

「あなたみたいな素人が、こんな無茶をするのはいけませんね。大変、危険です」

(わかってるよ)

思わず心の中で反論する。

(それでも、俺があいつにしてやれるのはこれぐらいしかなかったんだから、仕方ないじゃないか)

「佐野さんが言ってましたよ。あなたは時々、ひどく『無邪気な』考え方をして行動に移すから目が離せないって。本当に、そう、です、ね！」

きりりと歯を噛み締める音がした。ハンドルがぐるっと回され、ヘアピンカーブを一息で回ってしまう。横滑りしかけたと思った次の一瞬に、弾かれるようにカーブを抜けて飛び出していき、後ろの車が突き放されるように後じさった。

「やれやれ、少しは話ができそうだ」

男はにっと笑って煙草をくわえ、デュポンのライターで火を点けると、無造作に後ろの座席に放った。

「オオサワ達の脅しに妙な意地で反発するところなんか、実に『無邪気な』人ですよ、怖いもの知らずだ」  
「あんた、誰なんだ」  
上機嫌で話し続ける相手によく口を挟めた。  
「誰ねえ……あっとまずい」  
男は煙草を窓から弾いてハンドルを回した。裏路地に車を斜め駐車したまま、ドアを開けて降りる。  
「お、おい！」  
「手伝って下さい。この車はあの人達にあげましょう」  
男はトランクから幾つかのバッグを出した。俺に二つのバッグを持たせ、悠々とした様子で尋ねる。  
「佐野さんの家、この近くでしたっけ？」  
「あ、ああ。そこの角を曲がって…」  
「ああ、あそこか」  
男は背後を振り返ることもなく、すたすたと歩き出した。荷物持ちよろしく、俺はその後に続く。  
「あ、でも車…」  
あんな所に置いたままじゃ、と思う間もなく、鋭いブレーキ音の一瞬後、ぐわっと凄まじい音が背中を押した

。「っっ！」  
思わず半身振り返ると、俺達を追っていた車が置き去った車にまともに突っ込んでいる。うろたえたようによたよたと男達が逃げていく。  
（上げるって…こういうことか）  
わけもなく、後部座席に放られたデュポンのライターが思い浮かんだ。あれ一つでも、けっこうな値段のものだと思うが、車まで『あげる』状況においては、ささいなことなのかもしれない。  
「滝さん、早く！」  
「あ、はいはい」  
男が親しげに呼ぶのに、重いバッグを必死に持ち上げ、俺は駆け寄っていった。

「どうですか？」  
男はお由宇の家の居間へ入ると、バッグの中の物を見せた。  
それは、写真で見たモレリー・コレクションと寸分違わぬ十数作品だった。  
「え…あ…本物？」  
「ええ、本物ですよ。ただし、モレリー・コレクションではない」  
「??」  
訳のわからぬ俺に、アンリが続けた。  
「デモ、彼ガ描イタナラ、ソレハ本物デス」  
「??」  
俺は頭の中のマーボードーフをまとめようとした。が、マーボードーフはますますぐちゃぐちゃになっていく。見るに見かねて、お由宇が説明してくれた。  
「つまりね、あのモレリー・コレクションを描いたのも彼なのよ」  
そこで俺は、男が『ランティエ』と呼ばれる贋作造りでは有名な人間だと知った。モレリー・コレクションの無名画家の連作とは全くの嘘、全ては二十年ほど前に『ランティエ』が描いた作品群だったのだ。  
「父ハ、世ノ知識人ガドコマデ鑑識眼ヲ持ッテルノカ、知リタガッタノデス。これくしょんガ、全テ売レタ時、父ハ大笑イシマシタ。美術関係者ト外国人ニ売ラナカッタノハ、父ノゆーもあヲ、ゆーもあトシテ終ワラセルタメデモアリマシタ」  
アンリは、例の妙な笑みを浮かべた。  
「もちろん、モレリー・コレクションが何の価値もないというのではないわ。無名画家『ランティエ』の技量をつぎ込んだ連作、世にも珍しい贋作のコレクションとしてだけではなく、美術品としての価値も充分あるわ。だから、彼に綾野への罫の一つとして、自分の作品を完璧に贋作することを依頼したのよ」  
「世界広しと言えど、自分の作品を贋作したのは、私ぐらいでしょうな」  
『ランティエ』は含み笑いをしながら言った。  
「タッチが狂っているかと思ったが、大丈夫だったようです」  
「狂っているどころか、昔のミスまでまねたのはさすがね」  
お由宇は『木影』の葉の影の一つを指差した。深緑のはずの影に、ほんの二、三粒と見える金色がついている

。「あの頃を思い出しましたよ。ほんの一瞬、自分の絵を描きたいと迷った筆遣いをね」  
『ランティエ』は感慨深げに言った。  
「それで？ これをどう使います？」  
「すり替えられた偽物のモレリー・コレクションとすり替える。そして、その偽物を綾野がすり替えられた本物とすり替え、オークションの客にも偽物を提供しようというのさ」  
それまで、黙って絵を眺めていた直樹が応じた。相変わらず、理香の肩に回した手で優しく彼女の髪を撫でながら『ランティエ』を見つめた。  
「あんたの描いた『もう一つの本物』は、本物と改めてすり替えるまでの代役というわけだ」  
「……ふむ、満足です。贋作の命は如何に多くの人を騙すか、ですからね」  
『ランティエ』は、穏やかに笑った。  
「それで？」  
「あんたの出番は終わりさ。謝礼はスイスの銀行に振り込まれてるはずだ」  
直樹は『ランティエ』をじっと見つめて言った。  
「なるほど。私の安全を保障してくれるわけだ」  
彼は笑み、少し頭を下げた。  
「では、また御用がありましたらどうぞ。最近仕事を選んでますから、御注意を」  
それから、アンリに向き直り、  
「モレリー・コレクションを気に入って下さってどうも。あなたの父上とは懇意でしたよ」

「父ニ伝エテオキマス」

きらっと二人の間に殺気が走ったようだった。コレクターと贋作家では、あまり仲がよくもないのだろう。

『ランティエ』は来た時と同じように、ゆったりとした足取りで家を出て行った。

「本当ニ名前ドオリノ奴デス」

「え？」

「『らんていえ』トハ、ふらんす語デ……『何モシナイデブラブラシテイル人』トイウヨウナ意味デス」

アンリは少し肩を竦めて見せた。

「さて、駒は揃ってきた」

直樹は絵を見つめ、続いて俺を見た。

「大丈夫かい、滝さん。ドジしたって、すぐに助けられないんだぜ」

「彼は私と一緒にパーティに出てもらおうわ」

お由宇のことばに、一瞬舌打ちしそうな表情が直樹の顔に過った。きっと、また足手まといになると思ったのだろう。しかし、俺としても、ここまで引くわけにはいかなかった。

「ま、せいぜい、ドジで陽動作戦をやらないようにしてくれよな」

直樹の遠慮のないことばに、俺は俺だって『それなりには』やれるつもりなんだぞ、と毒づいた。たとえ…ドジのオンパレードでも。



## 8.夜に還れ

船上のパーティは今やたけなわだった。脚の震えも次第に納まり、やっと立食パーティの料理の味がわかり始めたところだった。この俺でさえ、見覚えのある有名人があちらこちらに居て、さりげなくお由宇の仕草を見習って会釈すると、向こうもまるでこっちを知っているかのように頷いて見せた。

「ずいぶんいい加減なんだな」

「一人一人覚えていたら、それこそ身が持たないわよ。カクテルはどう？」

「うん…」

俺はカクテルを受け取りながら、手が震えて借り物のスーツを汚すじゃないかと気が気じゃなかった。こういう場所にずいぶん慣れているらしいお由宇は、次々かかる誘いをさりげなくかわしていたが、それでも時間だけは忘れていなかったらしく、ちらっと時計に目をやって囁いた。

「時間よ」

「あ…うん」

俺は半ばお由宇に引っ張られるようにして、人々の間をゆっくり動いていった。

「志郎」

お由宇がウィンクを送ってよこす。鴨を見つけたらしい。

このパーティへの招待状はアンリの方から手に入れていたが、オークションの参加状はない。そのあたりのコレクターの券を失敬しようというのだった。前の、歳に不似合いな真紅のドレスを着た婦人と如何にも成金風の男が、俺達と同じように人波の間を縫って行く。見たところ、オークションに出るのは初めてらしい。きよろきよろして二人を通路の窪んだ所で待ち伏せ、人影が居なくなった所を見計らって軽く殴らせてもらった。きよろとも言わずにのびる二人を、手荒いながら近くの客室へ運び込み、参加状と中世の舞踏会用じゃないかと思える仮面を頂く。

「伊田様でございますね、こちらへどうぞ」

どうやら、オークションの中身については詳しく知らされていないらしい、素人っぽいスーツの男が俺達を席へ案内し、ドアを閉めた。鍵のかかる音。

これで、俺達は完全にこの広間に閉じ込められたわけだ。

ずり落ちそうな仮面を着けた俺達は、部屋に集まったコレクター達の顔を見ていく。気のせいだろうか、外に居た著名人があまりいないような気がした。

「とんだ仮面舞踏会（マスカレード）ね」

お由宇のことばに、また周一郎を思い出した。

十分な視力はない、色も形も曖昧な、淡く霞む世界の中に、幾つも幾つも仮面を重ねた人々が往来する。ルトの爪がその仮面を剥ぐにつれ、隠されていた顔が見えてくる、優しい春めいた微笑みの中で残虐に血に濡れた牙も……。

「直樹とアンリは？」

「もう待っているはずよ」

用意された座席はそれほど多くない。導かれて次々と座っていく客達は、お互いの仮面を興味深そうに見つめ合い、曖昧な笑みで目を逸らす。

広間の正面にはイベントや舞台などで使われるのだろう、低めのステージが設けられている。

「あ…」

お由宇の視線を追って周囲を見回していた俺は、ステージ中央に置かれた重厚な木目の演台に近づいた人物に気づいた。黒地に銀で模様が描かれた仮面をつけているが、その冷酷な瞳の色には覚えがある。獄中で死んだはずの綾野だ。

「お集りの皆様」

マイクから声が響いて、ざわめきが静まった。それぞれに演台を見やる顔をゆっくりと見渡して、綾野はことばを続ける。

「お待たせいたしました。オークションを開始いたします」

綾野の背後に降ろされていた真紅のカーテンがするすると左右に分かれた。

「モレリー・コレクション『木影』の連作です」

通常のオークションなら、品物を一気に見せることはないのではないかと。

だが、居並ぶ客の視線が慌ただしく作品を行き交い、やがて深く重い溜め息が漏れる、羨望と興奮と、全てを手に入れるための財力を思って。

「『木影』『木の色』『木もれ陽の下』『木もれ陽と少女』『冬の幻想』『木樹の祭』『月樹の影』……以上七点」

本物がここにある以上、フランスに戻ったのは綾野がすり替えた偽物のはずだ。だが、俺とお由宇は、その偽物が、直樹とアンリの手で『ランティエ』が新しく描いた贋作に再びすり替えられたことを知っている。

そして、直樹とアンリは、その偽物の絵を持って、この船のどこかに潜み、綾野のモレリー・コレクションとすり替える隙を狙っているはずだった。

「…けどさ」

俺はそっとお由宇に耳打ちする。

「防犯カメラとか、そういうの、当然あるよな？」

「そっちは大丈夫よ」

カメラがあっても、機械だから。

お由宇は微かに笑う。

「それをチェックするのは人間だもの」

「？ どういうことだ？」

「私には友達も多いということよね」

これ以上、あまり聞かない方がいいってことか、と尋ねると、そういうことね、と苦笑された。

「では、まず『月樹の影』から」

モレリー・コレクションの中でも、幻想的とされる絵が背後の壁から二人の女性によって、中央の綾野の隣へ

運ばれた。

モノトーンに近い色遣い、ぼうっと煙るような緑と紫、ミルク色の月光が滴るような柔らかい筆遣いで表現されている。

絵の事はよくわからないが、その絵の甘く切ない美しさは充分心に沁みた。

確かに『ランティエ』は世界の裏側で生きている人間かもしれないが、それでもこれだけ美しいものを生み出せる心というか魂というか、そういうものを持ち合わせている。

(人間って、わからねえな)

「5000万」

「7000万」

「1億」

淡々とした声が続く。まだ誰もがお互いの程度をはかっているぐらいなのだろう。

「1億2000万」

「1億2500万」

「1億3100万」

上がり方が鈍った。それ以降は続かない。

「では…『月樹の影』は1億3100万で『ブルー・タイガー』様に」

青色の虎を模したと思われる仮面の紳士がゆっくり頷く。

「次、『木樹の祭』」

綾野の唇が皮肉っぽく歪む、

「2000万」

「2700万」

「3200万」

「…3700……いや、5000万」

これは上がり方が遅い。

「ふう……」

思わず溜め息をついた。よくも、どもらずにぽんと2000万などと言えるものだ。俺なら確実に舌を噛む。

「7500万」

「……他には？ 結構、7500万で『ホワイト・クラウン』様に」

腹がせり出したでっぷりした男が、にまりと笑って周囲を見回す。気まずい顔になって、その男の視線から顔を背けた婦人が一人、夫らしい男にイライラと何か訴えている。

「『木もれ陽と少女』……5000万から」

「1億」

「1億2000万」

「2億！」

きんきん声その婦人の喉から飛び出た。

「……はい、2億」

綾野が静かに繰り返す。ざわめきが起こる。数人はしまったという顔、残りはたいして関心がなさそうか、微かな軽蔑を浮かべている顔だ。

「失敗したような顔は、オークション慣れしていない人よ」

「え？」

「今が賭け時ではない……彼女はそれに気づいてないのね」

「賭け時って……欲しい絵に値をつけていくんだろ？」

お由宇は少し肩を竦める。

「あの人が欲しいのは絵ではなくて、オークションで競り勝ったという気分なんですよ」

続く数作、オークションが進むにつれ、その婦人の様子は目に見えて落ち込んできた。周囲が次々出されてくる作品に熱狂していくのに反比例して、彼女は沈み込んでいくが、夫はもう知らぬ顔だ。オークションに予定していた手持ち額を使い果たしたのだろうか。

「いろいろ大変だなあ」

「感心してる場合じゃないでしょ？ こっちも大変よ」

「次、『木の色』、3000万から」

綾野が作品を紹介しながら、ぴたりと俺を見据えてきた。仮面をつけ、格好もいつもとは全く違うはずだが、感情を読み取りにくい瞳が、より無表情に俺の顔を凝視する。

「いかがですか？」

「う」

まるで俺を指名したように問いかけてくるのに怯む。たじろぐ俺に重ねて声をかけようとした相手に、お由宇が淡々と応じた。

「5200万」

「7500万」

「9000万」

お由宇の提示を追うように次々と値がつく。綾野が仕方なしに俺から客達に視線を戻す。

「では『木の色』、1億3000万で」

綾野は買い取った婦人に優雅な一礼を送る。上品に、如何にも誠実真摯な人間のように。

「次は『木もれ陽の下』…」

「3000万」

「志郎？」

「ん？」

お由宇が冷ややかな声をかけてきた。

「ちょっと騒ぎになりそうよ」

「え」

お由宇の視線を追って、彼女の言っている意味に気づく。ステージの端に居た男が綾野に頷き、片隅の扉から滑り出て行くのが見えた。

「5100万」

「6000万」

「他には？」

尋ねる綾野の視線が、俺達を舐め回す。センサーがあれば、派手な警報音が鳴り響くような、物騒な視線だ。

「6300万」

「7500万」

「俺達だとわかったのかな」

「きっとね。伊田夫妻を確かめに行ったよね」

「7600万」

「願ってもない陽動作戦だな」

俺が強がると、お由宇が苦笑した。

「あなたにそんなことが言えるとは思わなかったわ」

「…俺だって、たまには言える」

「そうね」

くすくす笑うお由宇の声に重なって、吊り上がる値が聞こえる。

「7800万」

「そのためには、ここでもうしばらく綾野の相手をしなくちゃならないのよ」

「8100万」

「あんまりやりたくない」

「8300万」

「なにせ、一度、綾野の視線で戦死している」

「9000万」

「精神戦は強いでしょ」

「1億1000万」

相手によりけりだ、と応えようとした俺の目に、隅の扉から再度顔を出す男が映った。綾野が地獄の鬼もいじけるような冷たい笑みを浮かべて、俺達を見る。

「っ」

原初的な恐怖というのか、体中の産毛が一気に逆立って身を竦める。

どうしてこんな奴を相手にしようとしたんだろう。

後悔が見る見る競り上がって、ない尻尾を股に挟んできゃんきゃん悲鳴を上げて逃げ出しそうなのを、必死に押さえ付ける。

「怖い？」

「……」

お由宇が柔らかく笑うのに応えなかった。

今更言ったところで、どうなるものでもないんだし。

「では、『木もれ陽の下』は1億2300万で、『レッド・キャット』様に」

始まった時にはひんやりしていた広間の空気は、詰めかけた客の熱気に蒸されてきていた。喉が渴く。背中にべっとり汗をかいているはずだが、乾く気配も冷える気配もない。

「次が最後です、『木影』7000万から」

綾野がことさら丁寧に最後の作品を導いた。その後ろで、隅の扉から入ってきた男達が、一人また一人と俺達の背後、入り口の扉の前に集まり始める。

「7200万」

このオークションが終われば、背後に回ってきている男達が、俺達を捕まえるつもりだろう。猫がネズミをいたぶるように、綾野は落ち着いてオークションを進める。

「7500万」

「8100万」

「あら」

ふいに、お由宇が小さく呟いた。じっと『木影』を見つめている瞳が、ゆっくり細められ小さく笑う。

「9000万」

「1億2000万」

「他には？」

綾野は俺達を見やって笑った。ふてぶてしい、どこか嘲笑するような笑み。

「1億3000万」

「1億3700万」

「1億7000万」

「1億……7200万」

歯を食いしばるような音が響いた。

「1億7200万。他には……いらっしゃらないようですね。では、1億7200万で、『グリーン・ジャガー』様に」

ほうっ、と並ぶ人々の間から溜め息が漏れた。

「作品は別室にご用意いたしております。どうぞお持ち帰り下さい。事前にお伝えしておいた通り、以後は皆様の持ち物となり、保安全管理もお任せいたします。また、私どもの手をご入用ならば、ご相談させていただきますのでお申し付け下さいませ」

(もちろん、ただという訳じゃねえよな?)

俺の心の声が聞こえたわけでもないだろうが、慇懃な態度で頭を下げた綾野は、席を立ったお由宇に向かって声をかけてきた。

「『パープル・ドッグ』様」

打って変わった鋭い咎めるような響きに、三々五々出て行きかけていた客が足を止める。半身振り返らせたお由宇が、穏やかに尋ねた。

「何か御用でしょうか」

「今日はお目に止まるものはなかったのでしょうか。一作も…お声がかからなかったようですが」

客達の好奇心に満ちた視線がお由宇と、隣で突っ立っている俺に向けられる。

一作も買わなかった？ 声もかけなかった？ どうしてだろう？

訝しげな目の色が、俺とお由宇をじろじろ検分する。

「…して…ご存知ですか」  
「…には見えない…あの方達は…」  
不安そうに、或いは不審そうに、あからさまに眉を潜め、警戒を見せる女がいる。囁きを交わしながら、実力排除を依頼しようか、そんな雰囲気のものもいる。  
(どうする、お由宇)  
身構えて、足下を確かめる。  
いざとなれば俺だって。  
(全力で逃げる！)  
「仮面を取って頂くか、佐野由宇子さん、滝志郎君」  
綾野は冷笑しながら命じた。お由宇が静かに仮面を外す。俺も続いて外していくと、周囲の不穏そうな気配がざわめきになって広がった。  
何だあれは。誰だあれは。ひょっとして、余計なことをどこかに吹き込んだり漏らしたりする類の？ おお嫌だ。  
「さあ、何をしに来たんだ？ このオークションにただ見物に来たとも思えんが」  
綾野の嘲りに、お由宇は唇を綻ばせた。鮮やかな微笑を浮かべる。  
「見物？ ええ、その通りよ」  
「はっ」  
綾野は上品そうに呆れてみせる。見回す周囲に、仕草で吹き込む、申し訳ない、不愉快で下品なネズミが入り込んでおりました、ただちに始末いたしますので、もうしばらくのご容赦を。  
「ただの見物だって？ まさか」  
「ただの見物じゃないわ」  
お由宇はにっこりと笑った。光が灯ったような明るい笑みだ。  
「偽物売りさばく、三流悪人のオークションを見物に来たのよ」  
偽物？ 偽物だって？  
ざわり、と客がざわめいてふいに静まった。誰もが警戒心を満たしてお互いを、綾野を見やる。  
「お由宇？」  
呆気にとられたのは俺ばかりではない。綾野も、だが、真っ先に我に返ったのは綾野だった。  
「ふ、ははっ…偽物だって?!」  
呆れ果てたような高笑いを響かせる。  
「君らしくないね。私が何をやったか知っているはずだ。なのに、偽物だって？ 私が何のために、そんな危険な賭けをする必要がある？」  
「もちろん、モレリー・コレクションを手に入れるためよ」  
「馬鹿な！」  
「では、お客様に確かめて頂きましょう」  
お由宇は作品があるという別室へ手を振った。  
「たった今オークションにかかった品物と、本当に同じものがあそこに準備されているのかどうか」  
「…見せてくれ」  
一人の男が思い切ったように顔を上げた。  
「ええ、もちろん、どうぞ」  
一瞬不愉快そうな顔になった綾野は、すぐに笑みを取り戻した。  
「ご確認下さい。確かにモレリー・コレクション、そのものです」  
「失礼する」  
でっぴりした白い道化師の仮面を被った男が、綾野の配下に連れられて続きの部屋へ入る。固唾を呑んで見守る客達、自信ありげにお由宇を見下ろす綾野の顔が、続いて響いた声に固まった。  
「…どうということだ、これは！」  
うろたえたような宥め声、だがそれよりも大きく響く声は怒りも露に言い募る。  
「全くの偽物じゃないか！」  
「え…っ」  
綾野の顔が蒼白になった。  
「まさか！」  
「私のも見せて！」  
きんきんした声の婦人が隣室へ駆け込む。悲鳴に似た叫びが上がる。  
「これは、何なの！」  
「おい！ どうということだこれは！」  
先に入った男が怒り狂いながら、片手に絵を掴んで戻ってきた。  
「こんなおかしなものどすり替えたのか！」  
「いえ、そんな馬鹿な」  
「返してちょうだい、あたしの絵よ！」  
きんきん婦人が戻ってきて涙ながらに叫ぶ。  
うわ、っと客達は一気に隣室に押し寄せた。唸る蜂の大群のような状態を呆然と見ていた俺は、そろそろとお由宇を振り向く。  
「そうか……もうすり替えが終わっていたのか…」  
「そう、『木影』の影の金粉がなかったでしょ？」  
「そうだったか？」  
「実はあの技法は『ランティエ』しかできないのよ」  
一瞬奇妙で切ない笑みをお由宇は浮かべた。  
「どんな天才画家でもできなかった技法……けれど、技法で絵が描けるものじゃないから」  
誰も再現できない絵を描けるのに、それは感動とかイマジネーションとか、つまり芸術の持つ力とは関係のないところで成立してしまっているの、哀しいわね、とお由宇は目を細めた。  
『あの頃を思い出しましたよ。ほんの一瞬、自分の絵を描きたいと迷った筆遣いをね』  
ランティエの声が耳の奥で響く。素晴らしい技法を持ち、けれど、それでは駄目だと見切りをつけたのだろうか。

「待て、待って下さい！」  
押し寄せる客を止め切れずにいる綾野もまた、素晴らしい才能と人を動かすカリスマ性を揃えながら、それでもある一点でどうしようもなく潰れるしかない運命にある。  
そこへ、最後の断罪のような声が響く。  
「見たぞ！ 綾野の手下が金と本物の絵を積み込んで逃げた！」  
閉ざされていた入り口を開け放って叫んだのは直樹、だが、それが誰であったか確認する余裕は客達にはなかった。  
「何だって！」「まさか！」「ああ！」  
我先に、今度は入り口から飛び出していく、その激しい動きの彼方に、ただただ白い顔になって立ちすくんでいる綾野の姿がある。俺とお由宇の凝視に気づくと、がちりと音が聞こえそうな顔で歯噛みし、次の瞬間、身を翻した。  
「綾野も逃げるぞ！」  
「捕まえろ！」  
今度の怒号はもはや直樹でもなんでもない、突然の展開に我を失った客達の叫び、うろたえ怒り狂って走り回る中を、目立たぬようにそろりと俺とお由宇は部屋から逃れた。

「冷や汗かいた…」  
ぼやく俺ににやりと笑ったお由宇は、大騒ぎになっている船上の喧噪を離れ、もう片端のデッキの下を覗き込みながら応えた。  
「思ったよりもうまく行ったわね」  
「で、本物は？」  
俺の問いに、相手はつい、と下へ手を伸ばした。白い指先に視線を導かれて、暗い波間に灰白く漂うモーターボートを見つける。  
乗っていた人影がぐるりとライトを回して合図した。  
「あれ？」  
「アンリよ。直樹ももう戻っているみたいね」  
「本物も？」  
「置いていったって仕方ないでしょ」  
アンリに言ってやりたい。これでもお由宇より俺の方がコワイというのか？  
「これで…綾野も終わりかな」  
「この世界では無理ね。信用第一、ですもの」  
肩を竦めたお由宇が足下の何かを拾い上げ、外へ放り投げる。かあん、と高い音をたて、一度船体にぶつかったのは縄梯子、そのままつるつると海面近くまで落ちていくのに目を見張った。  
「どうするんだ？」  
「降りるの」  
「どっから！」  
「ここから」  
「無理だって！」  
思わず首を振った。  
「絶対無理、落ちた方が早いから」  
「落ちてもいいけど、拾い上げにくいわよ？ 夜だし、暗いし」  
「いやいや、待って」  
「スーツだし、汚したら弁償でしょ？」  
「いやそういうことじゃなくってさ、上に居て何とか隠れるとか」  
「あのね、今はあのおお客様方、綾野の追跡に夢中だけど、そのうち私達のことを思い出すわよ？ かなりの事情通だったなあとか、それならもっというんなこと、綾野の行き先と知っていないかなあとか」  
「俺達を知るわけないだろが！」  
「ええそうよ、でもあっちもそう考えてくれるとは限らないのよ？」  
言い合っている間に、モーターボートは縄梯子の下端を確保してくれたらしい。  
「じゃあ、お先に」  
「え、お、おい！」  
お由宇はふわりと身軽に手すりを乗り越え、まといつくドレスを膝上にたくし上げ、するするとかなりの早さで縄梯子を降りていく。  
「待てよ、そんなの聞いてねえって…」  
けれど、お由宇の言う事はもっともで、客達に綾野が捕まるとは思えず、それならもう少し動きの鈍そうなこちらに矛先が向かうのは時間の問題だ。  
溜め息をついて手すりを乗り越える。それだけで、波に従って上下する船体に煽られ体が半端に浮きそうなのを、必死に堪えて縄梯子を掴んだ。踏みしめても沈むロープ、しっかり掴んでも変形してしまい、ごんごんと船体に当たる足や手、すぐに千切れなれないと思っただけでも、安定しなくて頼りないことこの上なく、必死に探ってボートに辿り着いた時には全身汗びっしょりだった。  
「オ疲れサマ」  
アンリが俺に労りの声をかけて、ひょいと片手で何かを構える。  
「何？」  
「証拠隠滅」  
かわりに直樹が低い声で答えてくれた。ばしゅっ、という音と閃いた光が意味を付け加える。断ち切られた縄梯子がボートに落ちた。  
「サ、行キマシヨウカ」  
アンリは淡々と銃を片付け、操縦桿を握った。振動音とともにモーターボートが『マリー・ボネ』号から離れていく。  
(綾野…もう、行く所はねえんだろな)

組織に戻れるわけがない、起死回生の一手が破滅を招いたのだから。死人となっているからには、普通の生活にも戻れない。

蒼白になっていた綾野の顔は、それまで感じていた鬼神でも得体の知れないオカルトっぽいものでもなく、ただただ白く無表情、月光を受けてたゆとう波間に浮かんで滲む。

(まさか、ああいう風にひっくり返されるとは思ってなかっただろうな)

何だか、妙に、気力が落ちる。

「元気ないな、滝さん」

直樹が、ちらりと俺を見上げた。

「ん…」

吹き寄せてきた風の冷たさに目を細める。

「俺…さ」

何だろう、この空しさ。一番ぴったりくることばを胸の中から探した。が、零れたのは、その瞬間まで思いもしなかったことばだった。

「綾野を何とかしたら……周一郎が帰ってくるような気がしてたんだ」

ふいに、その想いが胸にあふれて、我にもなく、ましてや柄でもなく、ことばが詰まった。

「周一郎、が…」

直樹が掠れた声で呟く。

「ああ」

白々とした月光は、周一郎が生きていた頃と同じように明るく、ある種の澄み切った静けさを満たして降り注いでいる。煌々と輝く月は、白い面輪を曇らせもせず、俺を見つめ返している。

綾野相手に大バクチをやらかした顔、アンリ、直樹、お由宇、そして俺……ただ、周一郎だけがこの場にはいない。

誰よりもここに居るのが当然、居るべきはずのあいつだけが、いない。

「馬鹿だな……死んじまっているのに」

吐いたことばが自分の胸に沁みて、俺は眉をしかめた。

それは重い実感だった。たとえようもなく重い、確かな実感だった。

どうしてこの実感が、今の今まで湧かなかったのか、それが返って不思議だった。

周一郎は、いないのだ、もう永久に、どこにも。

「朝倉家を出るの？」

「うん」

お由宇の問いに、小さく息を吐いた。

脳裏で澄んだ黒曜石のような瞳が瞬き、静かに閉じられる。

「うん、出ようと思う」

ぼそりと答える。

一人問答をしていた時よりも、それは一層はっきりした気持ちになっていた。

「すぴーど、アゲマスヨ」

アンリの声がそう告げ、風が強まった。

## 9.ロード・オン・ロード

ルルルル……。ルルルルル……。  
眠りの闇の遠くから電話の音がする。  
「…はい」  
かちゃり、と受話器を取る音がして、お由宇の声が聞こえた。  
「アンリ？ ええ、由宇子です」  
俺は寝ぼけ眼を開けた。  
「っ」  
すぐ目の前に机の脚があってぎょっとする。ソファで寝てたはずなのに、いつの間に床に落ちこちたんだろう。

「あてて…」  
きしむ体に唸りながらごそごそ起き上がる俺に、ちらりと視線を投げてから、お由宇は相手に応えた。  
「綾野が？ ……そう……あの中にやっぱりいたの……不運だったと言えばそれまでだけど……そうね、彼の作戦がうまくいき過ぎたことにしておきましょう」  
きゅっと肩を竦めたお由宇は淡い苦笑を浮かべた。  
「え？ ええ……きつとそうね、あちらの末端から追い込んでおいたんでしょうけど……今までなら、綾野ごときに食いついてはこなかったでしょうし。全く喰えないお子様よ」  
くすくす笑った顔は声の割りには楽しげじゃない。いや、楽しげは楽しげだが、ああよかった嬉しいわとかいう無邪気なものではなくて、全力で噛み合える相手を見つけた闘犬のような殺気がちらつく。  
今まで見たことのない、冷ややかな獰猛さ。  
思わずごくりと唾を呑んだ俺を一瞥して、お由宇はすぐに猛々しい笑みを消した。柔らかなアルカイクスマイルになり、  
「ええ……そう伝えておくわ。それじゃ」  
チン、と上品な手つきで受話器を置いて振り返る。  
「綾野が殺されていたそうよ」  
「っっ！」  
「あのコレクターの中に、シシリアンに繋がる関係者が居たらしいわ。信頼と名誉を重んじる彼らは、綾野のやり方に黙っているわけにはいかないと判断したようね。フランス行きの船で撃たれて、海に落ちたらしいわ」  
どこか寒々とした声だった。  
(あいつが散った海に、綾野も消えた)  
これこそ前世からの腐れ縁というやつか？  
(でも、だからって)  
のろのろ起き上がり、洗面所で顔を洗う。ばしゃばしゃ冷たい水を頭から被っても、体のどこかで死んだように身動きしない自分を感じた。  
(だからって)  
周一郎が帰ってくるわけじゃないもんな。  
「荷物を取りに行くの？」  
タオルで顔と頭を同時に擦りながら出て来た俺に、お由宇は心得たように声をかけてきた。  
「ん……先に休学届け、出してくる。しばらくはアルバイト暮らした。下宿も探さなきゃならんし」  
溜め息が出る。学費と住処を同時に失ってしまった。いや、たぶん、そうじゃなくて、失ったものは。  
「しばらくなら、ここにいてもいいのよ」  
鼻先をタオルに埋めたままぼんやりしてしまった俺を気にしたのか、話しかけてきたお由宇にゆっくり首を振る。  
「いや……直樹は？」  
「部屋よ。まだ寝てるでしょうね」  
時計を見やる。オークションがあったのが昨日の夜、今が午後二時過ぎ、俺が起きられた方が不思議なのだ。  
まあ、俺なんかまだいい方で、アンリはあれからすぐチャーター機でフランスへ、モレリー・コレクションを持って飛んだから、今電話をしてくるまで一睡もしていなかっただろう。  
「……ちょっと、挨拶してくる」  
「志郎、」  
なぜかお由宇が止めかけたが、それを無視して、直樹が寝泊まりしている部屋に向かう。  
「おい、な…」  
おき、と続けてノックをしかけて、中から漏れる声にぎくりとする。  
「……ったね」  
「……りがと……」  
囁き声と甘い返答、どうやら理香と一緒に居るらしい。うろたえてその場を離れようとして、止めようとした気配のお由宇を思い出す。  
(そうか、理香が居るって知ってたのか)  
「やれやれ」  
首を竦めて向きを変えた俺の耳に、ふいに激しくしゃくりあげるような声が届いた。  
「直樹…直樹！」  
「どうした！」  
夕べは怪我をした様子はなかったが、顔を似せたせいで中身まで似たのか、妙に意地っ張りなところがある奴だから、また何かを我慢していたのか傷が悪化したのか。慌てて部屋に飛び込んで、ベッドから半身起こした直樹と、彼にしがみついて泣いている理香を見つける。  
「…聞いてたのかい？」  
一瞬びくりとした直樹は、ふてぶてしい笑みを広げた。  
「案外、趣味が悪いな」

「違うっ」  
これはひょっとすると、ひょっとする状況だったのか。さっきの泣き声はひょっとしてひょっとするものだったのか。思いついた内容に焦りながら、まくしたてる。  
「もう、お前と会うことはないだろうと思って、挨拶に来ただけだっ！」  
(昼間っから公然といちゃつくな、ガキのくせに！)  
いやもちろん、いい大人だって時と場合があるだろうあるはずだあってほしい。  
「挨拶？」  
直樹はきよとんとした。  
「ここを出ていくのか？」  
「ああ」  
それがお前に何の関係がある。  
「じゃ、朝倉家に…」  
「あそこも出る」  
かばん、と直樹のどこかが外れたような、呆気にとられた表情で直樹は俺を見返した。  
「出てどうすんだ？ ……綾野の方は？」  
「綾野は死んだんだそうだ」  
「死んだ…」  
「ああ。客達の知り合いにししりあん、てのが居たそうだ。そいつに殺られたって、アンリが連絡してきた」  
「ふ…うん…」  
直樹はゆっくり瞬きすると、そっと理香に視線を落とした。  
「じゃあ、もう、お前が狙われることもねえなあ」  
ぎくっ、と理香が震えた。しばらく体を硬直させた後、のろのろと体を起こす。鼻の頭と目元が薄赤くなっている、ただのラブシーンにしてはひどく哀しげな切なげな顔だ。まるで、かけがえのないもの、今にも失いそうになっているものを眺めるように、直樹を見つめると、唐突ににっ、と笑った。  
「うん、そうだね」  
一抹の寂しさが漂った、強がったとしか見えない表情は気のせいだったのか。  
理香はさっと直樹から離れた。立ち上がり、打って変わって明るい顔で言い放つ。  
「あたしも、もう抜けようっと。由宇子さんに言ってくるね？」  
「ああ」  
直樹も、恋人が離れていくにしては奇妙な表情で理香を見送った。いとおいしいというよりは哀れむような、大事だと思っているというよりはとても綺麗な見知らぬものを見るような。  
「それで？」  
昨日の服のまま眠っていたのだろう、ベッドから抜け出し、脱ぎ捨てられていたセーターを被り、ジーンズのチャックを上げる。  
「どうする気だっ？」  
「俺？」  
「他に誰が居るんだよ」  
「……下宿を探す」  
「はあ？」  
直樹は珍生物世界一覽を見るような視線で俺を眺めた。  
「……大学は」  
「しばらく休学。生活していけそうになるまで」  
「……わからねえな」  
肩を竦めた俺に、直樹は背中を向け、革ジャンを羽織りながら続けた。  
「周一郎はいないんだし、あの家はあんた一人だろ？ 誰にも気兼ねする必要ねえじゃねえか」  
何て言ったかな、執事とかあそこに居る連中だっ、あんたに出ていけなんて行ってないんだろ？  
「……だからだよ」  
耳の奥に過った声、胸の暗がりを掠めた幻影、柔らかく両手を広げる、逝ってしまった静かな存在。自分がいなくなることを覚悟して、それでも俺の居場所を守ってくれようとした、優しい腕。  
「……周一郎がいないからだ」  
「え？」  
今度こそ本当に驚いた、そういう顔で直樹が肩越しに振り返る。  
「周一郎がいないから、俺があの家に入る意味はないんだ」  
そうだそうだ、皿洗いだってできないし、掃除も洗濯も、草刈りだって満足にできないんだから俺は。  
(俺ができるのは)  
あの、所作完璧で、頭が良すぎて、気持ちが優しすぎて、意地っ張りで不眠症のやつ、一瞬寝落ちるための枕になるぐらい。  
「だから出て行く」  
またぞろいじけてしまいそうになってきたので、投げるように言い捨てて部屋を出る。  
「おい！ 滝さん！ 待てよ、もう出てくのか？」  
背後から追ってくる直樹の声を無視して、俺はお由宇の家を出た。

大学で休学届けの書類を受け取り、荷物を取りに朝倉家に向かった俺の目に、あの長い長いレンガ塀が映る。  
「……一年くらい前、か」  
初めて朝倉家を訪れたのは、大家にコートを下宿代の形にとられて、行く所もなくぶらぶら歩いていた時だった。こんなバカでかい建物に住む奴、物好きにも遊び相手に金を払おうとしている子どもってどんな奴だろうと思っていた。現れたのはサングラスをかけた弱視の少年、いろいろな仮面を被り直す大人達の争いを冷然と見つめ、自分もサングラスという仮面で心を隠し、全てを操った。  
なのに、俺には、その全てを種明かしして見せた、少年だった。  
(いや……一年もたっていないのか)



そうだ、長い人生からすりゃ、まだ知り合ったばかり、なのに、俺はずっと昔からあいつと居たような気がしている。

「にゃ…あ？」

「ルト！」

足下に聞き慣れた声が出て、思わずすり寄った小猫を抱き上げた。

「そういや、あの時もお前だったけな、俺を入れてくれたのは」

ルトは、顔の大きさから言えば少し大きすぎる耳を寝かせた。小さなたれ耳の可愛いタイプじゃない容姿、目を細めて小さな口を開け、声を出さずに鳴いてみせると一層なんだか妖しい気配、それでも今日はどこか不安げに見えた。

「俺と来るか？ ご主人がいなくなって淋しいだろ？」

きゅっ、とルトは鼻に皺を寄せた。冗談言うない、そんなすぐに宗旨替えできるかよ、と言いたげに顔を背け、身をくねらせて俺の腕を擦り抜ける。

「…だよな」

(俺だって、直樹の『周一郎もどき』はまっぴらだ)

一人頷いて、門扉を開ける。

歩く一足ごとに、思い出がほろ苦く駆け抜けていく。

先を行くルトの尻尾がゆらゆらと揺れて、それを追って歩く俺は、このまま永久に朝倉家の玄関に着かないような気がしてくる。着かないまま、思い出の中を歩み続けて抜けられなくなりそう。

「にゃあん」

だが、ルトはきちんと、俺を朝倉家の玄関に導いた。

そのまま、再び自分の本来の居場所、迷宮の彼方の異世界に歩み去るような足取りで、振り返りもせずに姿を消していく。

こうやって、通り過ぎた光景の一つとして、奇妙な猫と少年の姿は、俺の遠い記憶の中の物語になっていくのかもしれない。

「お帰りなさいませ」

「うん」

出迎えた高野は、いつも通りだった。

綾野の死が伝えられていないはずはない。

けれど、世界に何が起ころうとも、この朝倉家を守るのが至上命令と考える彼は、この先もずっとこうやって、客を迎え送り出していくのだろう。

俺が、こうして高野に迎えられるのも今日限りだ。

(二度とこんな経験するこた、ねえよな)

大豪邸で、執事にお帰りなさいませと迎えられ、輝く銀食器で食事をし、染み一つなくふかふかに整えられた寢床で休む。

夢のような、華やかで豊かな暮らし。

想像してみる、まだここに居続けることを。

だが、そこには居るはずの姿がない。

『滝さん』

光を背中に、小首を傾げ、淡々とした声音で、それでも体全体が俺を迎えようとするような優しさを滲ませる、細くて小さな、一人の少年。そんな自分を恥じらうように苛立つように、険しい表情と冷淡な仕草を取り繕う、周一郎。

未練を振り切り、自分の部屋に脚を向けかけ、思い直して階段を上がった。

キィ。

軽い虚ろな音をたてて、周一郎の部屋の扉が開いた。

逝ってしまった部屋はそのままに整えられ、埃一つ載っていない机の上に、日記があった。

真っ白なページを抱え、永久に埋められることのない空洞を抱えた、閉じられてしまった物語。

「ちえ」

幻なりと見たかったが、俺は想像力貧困な人間なんだろう。人の気配なく静まり返る部屋に、新たな存在は出現しなかった。

この次、この扉を開けるのが周一郎でないのは確かだ。

そして、この部屋が周一郎以外の主人を迎え入れることがないのも確かだろう。

「…開かずの間、か」

この屋敷には、そういう部屋があるのがふさわしい気がする。

扉を閉めて階段を下りる。

俺の部屋は、もうさっぱり片付いていた。

いつでも眠れるように整えられたベッドを横目に、俺はボストンバッグとコートを取り出した。

これ以上に荷物が増えないのはどうしてだろうな？ ひょっとすると、持ち物には、それを持つだけの格とか

がいるのかもしれない。

(俺の格はボストンバッグとコート……いや、ボストンバッグ一つ、か)

何となく納得して、笑えてくる。

部屋を出て、玄関に向かう。

高野はさっきからずっとそこに居て、動かなかったんじゃないかと思うぐらい静かに、まだ立っていた。

「長い間、お世話になりました」

立ち止まり、ぺこりと頭を下げる。

相手も黙って頭を下げる。黒尽くめの服装、いつもよりネクタイの色も濃い。この分ではずともうこの喪服じみた姿のままで一生過ごす気かもしれない。

無言の気配に押し出されるように、外へ出る。

午後の日差しは少し弱まっていた。コートを丸めてボストンバッグにひっかけ、これが最後と周一郎の眠る白い墓を訪れる。

「大悟がいるから、少しは寂しくないだろうが」  
そっと声をかけた。  
森閑とした周囲に俺の声がえらく無遠慮に響く。  
「たまには来るよ……その…生活に余裕ができたなら、花でも持ってくる。線香は…いらねえよな？」  
我ながら間拔けた別れのことばだとは思った。と、かさり、と木の葉を踏む音がして、俺はどきりとして振り返った。  
「その…ここだと聞いたんで」  
「…お前か」  
うんざりした俺に、直樹が肩を竦めて見せる。  
「こんな立派なところ、出ちまうのか？」  
俺はむっとして直樹の側を通り過ぎた。  
「何だよ、怒ってんのか？」  
「人がマジの時に出てくんなよ」  
ポストンバッグを持ち直してすたすた歩く。タイミングが悪い。胸の奥に立ち上がった周一郎の顔に、クレヨンで落書きしてくるよううっとうしさだ。  
「下宿なんて、いいの、ないぜ」  
「屋根がぁりゃいい」  
こいつはほんと、自分の顔とか存在とかの意味をわかってやがるのか？ もう居なくなった大事な友人の出来ないコピーが飛んだり跳ねたりするのを、誰がああ懐かしいなあとか思えるだろう。  
「けどさ」  
「もう黙れ」  
「……」  
俺が言い捨てると、直樹は大人しく口を噤んだまま、俺についてくる。  
背後からの気配を無視しようとして無視しきれず、つつい脚を速めて、俺はあっという間に朝倉家の門扉に辿りつき、そこから出た。  
ガッシャーン。  
冷たく重い音をたてて閉まった門の遥か彼方、高野の姿を、朝倉家を、そしてそのどこにも居なくなった周一郎の姿を思い、俺は背を向けた。  
その瞬間から、朝倉家は、俺の世界と急速に離れていった。

幾つ物件を見て回っただろう。  
何の興味があるのか、俺の下宿探しに付き合っ、広告やチラシを見つけるたびに、ああだこうだとけなしながらしつこくつきまとっていた直樹は、さっきから急に黙り込んでしまっていた。  
『滝さん…本気で？』  
そう聞かれて、当たり前だが、そう突っぱねたのが不愉快だったのか。  
直樹が沈もうが落ち込もうが、とにかく、今は少しでも安い所へ潜り込まなくてはならなかった。朝倉家での暮らしはすっぱり忘れろよ、と自分に言い聞かせていると、月額20000円という文字が飛び込んだ。幸い、この近くだ。  
「よし！」  
急いでそこへ向かう。物件を確認して、できるだけ早く手を打たなくては。  
沈黙を守り続ける直樹が無言で付いて来る。  
数分歩くと、その『みすぎ荘』が見えてきた。  
「う…わ」  
思わず声を上げる。  
建っているのが不思議なくらいの二階建ての木造、だよな、きっと。微妙に傾いている雰囲気、ガスと水道が通っているというのが自慢なんだろうという代物だ。だからといって、ここでめげては、明日から食べ物にも困ってしまう。  
「ここにするぞ！」  
自分に気合いを入れてみた。  
「ここに決めた！」  
「こんな…どこに？」  
直樹がぼそぼそと呟く。  
「屋根どころか壁もあるんだぞ、立派なもんだ！」  
無茶を承知で言い張る。もっとも、そうやって自分を励まさなくては住む気になれない。屋根のある所でいいなんて、言わなきゃよかった。  
「床が抜けるぜ」  
「一階にする」  
「冬は寒いぜ」  
「新聞紙をセーターの下に巻く！」  
家の中でか？ どんなサバイバルだ。  
「ガス使ったら爆発したりして」  
「あつたかくてちょうどいい！」  
「何だか泣きたくなってきた。」  
「滝さん」  
「お前が何と言おうと、俺はここに決めたからな！」  
足を踏み出す。  
「……滝さん！」  
いきなり腕を引っ張られてぎょっとした。  
「離せよ、何だって止め」  
腕を振りほどこうとして、続いたことばに絶句する。

「行かないで下さい、滝さん」  
その、他人行儀な、いじっぱりな口調を誰が忘れるだろう。  
驚き……続いて強烈な怒りが湧き上がる、またや俺をからかう直樹への。  
「直樹！ お前いい加減に…っ」  
振り返る俺の視線を受け止める印象的な瞳、結んだ口許に不安そうな微かなためらいを浮かべて、俺を見つめる。  
(雰囲気が、違う…?)  
「まさ…っ」  
叫びかけて、俺は詰まった。頭の中が一瞬空白になり、続いて今までの場面が一気に混ざる。  
相手は薄く笑った。  
「ご心配かけてすみませんでした。……まだ直樹に見えますか？ ……なんなら、今『ルトが見ている』景色でも言いますか？」  
決定的なことばをさらりと吐く唇、それでも信じられなくて口を開く。  
「いや、待て、でも、あいつが『行かないでくれ』なんて、言うはずが……いや、第一どうして今の今まで…  
てか、何で今になって」  
途切れることばにもどかしくなる。  
(違う、俺の言いたいのは)  
へどもどする俺の前で、相手はぷい、と背を向けた。  
「だって、このままだったら」  
妙に幼い声が響いた。  
「滝さん、あそこへ行ってしまわないですか。……まさか、本気でそんなことするほど馬鹿だとは思わなかったから」  
忌々しげに舌打ちする気配の口調に、ようやく言いたいことばの一部を取り戻す。  
「周、一郎…なんだな…？」  
相手はちらりと肩越しに視線を投げて来た。怒ったような照れたような表情、紛れもなく周一郎の懐かしい顔だ。  
(生きていた？ 死んでなかった？ どうして？ いつから？ なぜ?)  
だめだ、おかしくなる。  
頭の中が、交差する横断歩道を躍りながら入り乱れて渡っていくリオのカーニバルに占拠されたような気分、軽くパニックになってくるりと背を向け、逃げるように数歩『みすぎ荘』の方へ歩く。  
「え？ ……滝さん！」  
驚いた顔で周一郎が振り返るのが背中であつた。見ていないのに脳裏で展開する光景、不安げに向きを変えて一歩、片手を伸ばし、俺の腕を掴もうとして一歩、スローモーションに駒送りが入ったような一場面一場面がはっきり見える。それに重なるように周一郎が死んだと思った日からの出来事が流れ、二度と聞くことはないと言った声の繰り返しが耳に響き渡った。  
「滝さん！」  
(生きて……いやがった)  
腕にかかる力、掴んでくる指。  
(この、人騒がせな)  
駆け寄る足音、近寄る体温。  
(俺の)  
今まで感じたことのないような深い安堵と興奮、池の中で今にも枯れ落ちそうに項垂れていた蓮が見る見る首を上げて花開くように、心の底にずっと重苦しく沈んでいた苦さが一気に溶け出していく。  
(俺の…?)  
「滝さん、って」  
ああ、そうか。  
ふいに、あの魔術師に操られてから俺がしてきたことの意味が見えた。  
(巻き込まれたとか、乗りかかった船とか、そんなんじゃないかと)  
ずっと受け身で厄介事に関わってきた俺が、何度も逃げられる機会があったのに、とうとう最後まで逃げなかったのは。  
(失いたくなかったんだ)  
空を仰ぎ、目を閉じる。  
(こいつを、失いたくなかった)  
なのに。  
自分の気持ちに納得すると同時に、むくむくと湧き上がってきたのは怒りだ。  
(こいつは、俺が朝倉家を出て行かないなら、『直樹』のままでいるつもりだったんだよな)  
「滝さん、聞こえないん…」  
つまり、俺が大事にしているのは『周一郎』なのに、何かよくわからないおかしな理屈で『直樹』の方を押し付けようとしたわけだ、俺の気持ちを無視して。  
「この…馬鹿やろう！」  
次の瞬間、強引に自分の方を振り向かせようとする相手の力のままに振り向いて、思い切り怒鳴りつける。  
「どれだけ心配して悩んだと思ってるんだ！」  
「っ！」  
「断りなしに死ぬ奴があるか！ 今度死ぬ時は早めに言え！」  
(おい今度死ぬ時はって何だそれは)  
つい勢いで口が滑った台詞に自分で突っ込みかけた瞬間、目を見開いて固まった周一郎が、  
「は、い」  
見事に素直に頷いて、今度は俺が固まった。  
泣きそうな幼い表情が周一郎の顔を過る。見たことのない脆そうな気配、何だかそのまま飛びついてきそうな雰囲気だったが、自制力に関しては周一郎の方が遥かに上だった。  
「……すみません。でも、滝さんは困るんじゃないですか、僕の家を出ると」  
一瞬にして気持ちを切り替えたような低い謝罪の後に淡々と続く説得、けれど瞳は珍しくまっすぐに俺を見上

げる。  
困ルト、イッテヨ。  
記憶を失っていた時の直樹なら、きっとそうあっさりねだったはずだ。  
俺が困らないと言えば、周一郎にはもう打つ手がない。  
なのに、困るんじゃないのか、としか言えない。  
どこまでもどこまでも。  
(意地っ張り、だよな)  
「……戻ればいいんだろ、戻れば」  
ばあっと顔を輝かせてくれれば、こっちも照れくさくなくていいのに、何だその、驚いたような不安そうな顔は。出てくと困ると言ったのはそっちだろうに、何で驚いちゃうんだよ、そこで。  
そんなに自信がないのか、自分の側に俺が戻ることに。  
「あ……ああ、腹が減った！」  
思わず喚いてしまった。  
「……高野にすぐに用意させます」  
見開いた目をにっこり細めかけ、慌ててくるりと背中を向けた周一郎、後ろ姿が今にもスキップしそうに見えるって気づいてねえんだよな、やっぱり。  
「五食分ぐらい頼む」  
わかりました、と応じる嬉しそうな声に気づかないふりで、俺はボストンバッグを担ぎ上げた。

「…今回は、佐野さんにいろいろお世話になりました」  
朝倉家の自室、窓に軽くもたれながら、直樹の顔を脱ぎ捨てた周一郎が続ける。  
「僕と直樹を入れ替えたのも彼女…もともと、僕は死ぬつもりだったけど」  
翳らせた深い瞳をゆっくり瞬いた。  
和野岬で俺達を追って来た二台のオートバイのうち、ヘルメットを脱ごうとしていたのが直樹だったらしい。  
綾野の卑劣さに嫌気がさして裏切ろうとしたが、果たす前に消されてしまったのだ。お由宇は周一郎を追っていて、それに気づき、二人を入れ替えたという。  
そして、周一郎は直樹に成り済まし、俺達と行動を共にした。  
「綾野がどういう手を打って来るかわからなかったから」  
ぼつりと言った周一郎の、口に出さなかった部分を、お由宇ならこう言うだろう、残された俺の身を案じたに違いない、と。  
「理香さんも協力してくれました」  
彼女も辛い立場だったはずだ。恋人そっくりの偽物相手に、幻の、もう戻ってこない日々を重ねなかったはずはない。  
そうやって、綾野にとって目に見えぬ蜘蛛の糸が、静かに張り巡らされていったのだ。  
ふと、耳の奥に、お由宇の電話の音が蘇る。  
『不運だったと言えよそれまでだけ……そうね、彼の作戦がうまくいき過ぎたことにしておきましょう』  
あの、彼、は周一郎のことだったのだろう。  
『きっとそうね、あちらの末端から追い込んでおいたんでしょけど……今までなら、綾野ごときに食いついてはこなかったでしょうし。全く喰えないお子様よ』  
俺の知らないところで、まだまだいろいろと、周一郎はお由宇を苦笑させるような喰えないことをやっていたということだろう。  
種明かしを頼もうかと思ったが、窓にもたれてじっと月を眺めている周一郎があまりにも物憂げで、俺は諦めてコーヒーを口に運んだ。  
「滝さん」  
「ん？」  
思い詰めたような声音に目を上げる。  
「もし、僕が、側に居てくれと」  
言いかけて周一郎は口を噤んだ。そこから先を続けられないまま唇を噛み、気を取り直したように、  
「僕はここに居ても」  
だが、その問いも途切れる。  
(死んでも治らねえな、この意地っ張りは)  
思わず苦笑した。  
そういう俺だって、同じ問いを周一郎にしろと言われれば、やっぱり口ごもるかもしれない。  
必要だと言ったら居てくれるか？  
ここはお前の居場所だと言ってくれるか？  
家族らしい家族もなく、違う意味でお互い天涯孤独、意地を張って背中合わせに立ち尽くす、けれどわかっている、背中から風が吹き込まない、その安心を感じている。  
しん、と胸に沁みる想いだった。  
「お前が……生きててくれてよかったよ」  
俺はそっと静かに吐き出した。  
コーヒーのほろ苦さが想いの優しさを際立たせていく気がする。  
そして、俺には周一郎ほどの自制力の持ち合わせはない。  
ぴくっと指を震わせた周一郎が、ためらうように視線を投げて来るのに、途切れた問いかけを感じ取る。  
『僕はここに居てもいいんですか、滝さん』  
(当たり前だろ)  
聞こえない問いに、胸の中で返答する。  
(お前以外の誰がここに居られるんだ)  
けれど、口にしたのは違うことばだった。  
「生きててくれてよかった」  
(二度とあんな想いはごめんだ)

(勝手に一人で決めちゃうな)

(もっと寄りかかってくれていいんだ、少なくともお前よりは年上なんだし)

続けたいことばは山ほどあった。

けれどどれも、今口にできるこのことばほど、真摯なものにはならないような気がした。

「本当に、よかった」

「…」

つい、と突然周一郎が窓の外へ顔を向けた。嬉しいような哀しいような表情で下唇を噛んだその頬に、一瞬、光るものが伝わったような気がした。

「…クレセント・ムーンですね」

淡々とした声が微かに震えている。

「ああ」

俺は応えて、ゆっくりコーヒーカップを傾けた。

終わり

## 月下魔術師

<http://p.booklog.jp/book/99170>

著者 : segakiyui

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/segakiyui/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99170>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99170>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ